

いの中に以前の盛況を恢復するに至らぬ。

謀反者の處置に就ては議論區々に分れしも、結局は盡く之を放免するに決し、南方の大統領ゼフェルソン、デヴィスの如きは、醜くも逃亡し、途中に於て其妻の衣服を纏ひ、之を以て追従者の眼を瞞まさんと謀りしも、捕へられて後に赦され、リーは其後レキシントンなる或る大學の校長となりて、青年教育に其身を委ねて餘命を送り、常に舊怨を忘れて、現今の政府に忠勤を勵むべきを以てせしかば、衆皆其徳に服して其終を完ふし。所在大風の荒れし後の如く靜穩に歸し、世界をして其文明的なるに驚かしめたりき。

嗚呼千古の偉人リンコルンは死せり、而して頑愚なるジョンソンは副大統領たりしを以て、其後を次ぎたりしも、大勢は已に定り、米國人は十分に共和政治を運用するの熟練を得たれば、政務は毫も滯滞せず、又た沮害せられず、着々として進歩發達の途に活動し、遂に今日の米國を現出せしめぬ。吾人は只だ其國民の智能に富めるに驚嘆するのみ。

第四章

佛國史

ル井十八世 (自千八百二十五年至千八百二十四年)

- 那翁後の佛國
- 那翁黨の剷除
- 極端王黨の復起
- 王黨内閣と西班牙役
- ル井十八世の死と遺言
- 那翁没落の結果
- マレーラン、リセリユー、デカーツ
- リセリユーの壓制政治
- 國勢漸く急なり

上卷に見たる如く、ル井十八世が即位間もなく、那翁がエルバより脱出し來り

たるを以て、一百日間の大騒動となりしが、那翁が已にセント、ヘレナに流さるるや、又々ル、十八世の代となりたるなり。

ウ、井、ン、ナ會議の結果に就ては既に之を上卷に陳べたり。左れば此際佛國のみに就て之を云はんに、佛國は此際城下の盟を爲させられたることゝて、先づ第一七億フランの償金を取られ、猶ほ他に諸國を荒したる賠償をも拂はせられ、爾來五ヶ年間は、其境界に十五萬の聯合軍を置かせられ、之に要する入用は、盡く佛の擔當と定められ、パリも五ヶ年間は監視せらるゝことゝなりたるなり。

加之那翁の没落すると聞くや、マルセーユを始め佛國の各地に於ては、かねて那翁黨を疾み居たるものゝ、俄かに起て那翁黨を掃盪せんと企つるありて、此等のものゝ間に衝突を起し、政界の方面に於ては、那翁黨其威を落せしも、『憲政黨』あり、『王黨』ありて、互に政權を握らんと擬し、佛國の前途は容易に治まるべしとは見へざりき。

左ればル、十八世は先づタレーランをして首相たらしめたり。此者は元來那翁に用ゐられたるも、後合むところありて那翁を去り、ウ、井、ン、ナの大會に大手腕を顯はしたるもの。次にフーシヤをして警視總監たらしめたり、フーシヤはル、十六世を殺すに左袒したるものにて、依然那翁の下に警視總監たりしが、夙に那翁の末路を曉りて、之れに備ふるところあり、聯合軍がパリに入り込みしとき、自ら談判の衝に當り、佛に其人ありと知らしめたるもの。左れば此際用ゐねばならぬ必要ありしなり。然るに事の漸く定るや否や、王黨の勢力次第に増加し、かねて革命時代若くは那翁時代に用ゐられしものは、皆盡く排斥すべしとの説勝を制し、タレーランもフーシヤも間もなく其職を退くに至れり。斯くて憐れなりしは、チー將軍の末路なりき、チーは其後姿を變じて瑞西に行き、後歸り來りて佛國の片田舎に潜れ居りしが、畢に見出されて勿られ、那翁がエルバより歸り來るや、第一に驅せ加はりたるラベドールも、伊太利に將たりしムラも、皆同時に死罪の宣告を受け、那翁時代の殘

物は次第に其數を減じ行けり。反動の勢とは云へ、英雄の末路憐れなりと謂はざるべからず。

ル井はタレーランの後にリセリユー公<sup>デュック</sup>を擧げ、顧問として寵臣デカールツを用ゐたりき、皆憲政黨員なり。然るに此時に當りて『極端王黨<sup>アルトラス、ロイヤリスト</sup>』なるものあり、反動の勢を利して、此際憲政的政體を破棄せんと企て、兩議院に多數を制するに至りしかども、ル井は災禍を見るを恐れて、此際衆議院を解散し、之と同時に國王は決して立憲政體を棄てざるべしと宣言せり。左れば再撰擧の時には、例の極端王黨員大に減じ、憲政黨員其多數を占め、國民は之れが爲めに満足を表したりき。然るに之れより先き、例のリセリユーはエークス、ラ、シアベルの萬國會議に赴き、五ヶ年間なるパリ監視軍を三ヶ年となすの大功を奏せしが、左る代りに此際露の歴山王及び塊のメテルニヒ等保守黨政治家の爲に斷然民黨を壓して其國を強固にすべく勸められ、稍々之れに動かされて歸りしに、今や憲政黨の勝利を見て、體よく事に託して其職を辭しぬ、時に千八百十

八年。

### 極端王黨の復起

リセリユーの辭するや、ル井は將軍デサー<sup>デサール</sup>を擧げて之れに代らしめ、デカールツを内務大臣と爲し、猶ほも憲政を維持せんと志し居りしに、こゝに端なくも政界に一變動を起すに至りぬ。千八百十九年に於て僧正グレゴリーなるもの議員として現れ出でたり、然るに此グレゴリーなるものは、彼の大革命時代に、議員の一人としてル井十六世を嘗りたる有名のものなりければ、ル井十八世は之を退けんことをデサーに請ひぬ、然るにデサーの承引せざりしを以て其職を奪ひ、デカールツをして之れに代らしめたり、是れ其一なり。又た更に一騒動起りぬ、當時ル井の兄弟アルトア伯の子にペリー公<sup>デュック</sup>なるものあり、一夜途上に於て暗殺せられたり、而て之を暗殺したるもの、自白に依れば、今や王黨は再び我國をして壓制國と爲さんとする、故に王位を繼ぐべき恐れあるペリー公を殺したるなりと。左れば之を聞きたる王黨は之を以て内閣を攻撃し、合せて此暗殺者はデカールツの手より出でたるものな

りと譏誣せしかば、アルトア伯はル井に迫りて速かにデカーツを退くべしと爲し、ル井が止むなくデカーツを退けしと是れ其二なりき、時に千八百二十年。

### リセリユーの壓制政治

リセリユーは再び首相に擧げられたり、而して今回は壓制家となりて現はれぬ。彼れは首相となるや、直ちに言論の自由を束縛し、新聞雜誌等を檢閲するの制を定め、又た一法律を制し、目下治安の爲めに、凡そ王家若くは國家の秩序を紊す恐れあるものは、平常の裁判手續に依らず、内閣員の獨斷を以て之を處罰することゝなし、更に議員の撰擧法を改め、所謂『復撰法』なるものを作り、自ら貴族若くは王黨の多く撰出せらるゝものと定めたり、而して其後の撰擧に於て、果して王黨の最大多數を得るに至りしかば、國民は再び如何なる運命に會はんかと氣遣ひ居たりき。

### 王黨内閣と西班牙後

リセリユーは壓制主義を取りたりき、左れば王黨より歡迎さるべき筈なりしも、王黨は此際猶ほも一步を進めんと欲し、ル井に勸めてリセリユーを退けしめ、代ゆるにアルトア伯の指揮の下に在るデ、

イリールを以てし、所謂る極端主義を行はんとせり。斯くて更に王黨を益せしむると出来せり、西班牙役即ち是れなり。此時に當りて、伊太利を始め西班牙葡萄牙に於ても、革命的運動起り、王家の轉覆するもの尠からざりしが、ル井は當時グエロナに會したる神聖同盟國の諸王に勸められ、兵を西班牙に出して、憲政黨員を破り、之れに擁せられ居たるフェルデナンド王を救ひ出し、更に西班牙をして專制君主の下に繋がるゝものとならしめしかば、佛國に在る極端王黨と『ゼスイト』宗の僧侶より成れる、『コングレゲーション派』は、我時

### 國勢漸く急なり

左れば千八百二十四年の撰擧に於ては、種々の干渉政界を用ひたる結果として、衆議院に憲政黨員を見ること僅かに十九人(或は十七人と記す歴史家あり)のみ、而してグイリールは此際一計を案出し、年々五分の一づゝを改撰する制度を改め、此議員の儘にて七ヶ年間繼續せしむるの議案を通過せしめれば、政界は全く極端王黨の手に落ちぬ。

### ル井十八世の死と遺言

百七十六

千八百二十四年の九月ル井は病床に在り、而して命の將に終らんとするを見るや、即ち其の弟なるアルトア伯を枕邊に招き、靜かに之れに告げて曰く、『卿よ憲法を蔑如する勿れ、若しも之れあらば災害必ず御身に及ばん』と、斯くて更に又た前に暗殺せられたるベリー公の遺子ポードー公を指して曰く、此子の王位の爲めに注意せよと。蓋しル井十八世は前年に於ける革命に懲り、何處までも憲法に遵はんと欲せしに、其意志の弱きが爲めに、今や極端王黨の擁するところとなりたるも、前途を想ふて憂慮に堪へず、爰に此一言を遺せしなり、而かもアルトア伯や其人にあらず、畢に其災害を招きたるぞ是非なかりき。

### チャールレス十世

(自千八百廿四年  
至千八百三十年)

○チャールレス十世の人物

○チャールレスいよく専政に決す

○革命の終結

○チャールレス十世と自由黨

○革命

チャールレス十世は即ちアルトア伯なり。伯は青年時代遊蕩に耽り、後改むるところありしも、傲慢にして人に下らず、殊に『ゼスイト』の僧侶に教育せられたれば、何處までも自由主義を喜ばず、今や極端王黨首領より一轉して王位に即きたるなり。左れば其即位には中古時代の式を用ひ、いよく『ゼスイト』僧侶と共に壓制の政治を取るべく見へしがば、憲政黨は已に戦闘の覺悟を爲し居りしに、偶々王黨の中にも、『ゼスイト』の日に専横に赴くを喜ばざるものあり、尙かに欸を憲政黨に通ずるに至りしかば、爰に意外なる現象を呈し、憲政黨新聞の『ゼス

イト』を語る言論は、政府の爲めに訴へられしも、法廷に於ては無罪の宣告を受くること多く、且つ貴族院に於ても、遂に出版條例を廢するの動議を通過せしめたりき。加之千八百二十七年國民護衛兵の觀兵式に於て、最初軍隊は切りと

『チャーレス萬歳、國王萬歳』と唱へ居りしに、チャーレスが去るや否や、直ちに『内閣轉覆』、『ゼスイト轉覆』と叫びたりき。左ればチャーレスは驚き内閣は怒りて、忽ち國民護衛兵を解散するのみならず、溫和的政黨と憲政黨との聯合したるを認めれば、此際議會を解散して、全く極端政黨のみにて議會を制せんと試みぬ。然れども『ゼスイト』とヴイリールの不人望は到底恢復せらるべくもあらず、政府が種々の干渉を試みたるに關はらず、再撰せられたる議員の多數は、依然非政府黨員にてありければ、ヴイリールは其職を辭し、デ、マルチニアックを首相とする溫和政黨と憲政黨との聯立内閣組織せられぬ、時に千八百二十八年。

**チャーレスいよゝ専政に決す** 之れより先き希臘が獨立を圖りて土耳其と開戦しつゝありしに、チャーレスは千八百二十七年英露と共同し、

希臘を援けて土耳其を撃ち、今年に至りていよゝ希臘を獨立せしめたりき、故に心竊かに自由論者の歡心を得べしと思ひ居たりき。又たマルチニアックの首相となるや、其内閣が自由制度の方針を取らんとするをも妨げず、且つマルチニアックが非常なる果斷の處置を爲し、從來『ゼスイト』に依て支配せられたる數多の學校をして、パリイ大學の管轄に屬せしめたるをも忍んで許し、勉めて慎重の態度を取り居たりき。然に事の餘りに意氣地なく見へたるを以て、極端王黨の激昂も亦た太甚しく、屢々チャーレスに迫りて果斷を促し、『ゼスイト』の政派なる『コングレグーション』の如きは、いよゝチャーレスを威嚇するまでに至りしに、チャーレスは終に斷然志を決してマルチニアックを免じ、ボリニアック太公をして之れに代らしめ、ラプー、ル、ドンチー伯をして内務大臣たらしめ、ボールモン伯をして陸軍大臣たらしめ、『我意決す、我れは再び自由者に屈せざるべし』と宣言せり。

**革命** 千八百三十年の三月、議會が大多數を以て、現在の内閣を信せずと

決議するや、チャールレスは大に怒り、『予は断じて調和せず又た降参せず』と叫びながら、直ちに議會を解散したり。愍て此際一國民を威嚇し呉れんと志ざし、かねて亞非利加なるアルヂリアの領主が佛國領事を侮辱したるが爲めに、外交談判を開き居たる折柄なれば、いよ／＼之を征するに決し、陸軍大臣ポールモンに大軍を授けて之を撃たしめしに、ポールモンは大激戦の後に大功を奏し、全くアルヂリアを平げて還れり、而してアルヂリアは爾來佛國領地の中にも樞要なる土地となりたるなりき。然れども佛國人民は最早や此等の爲めに威嚇せらるべくもあらず、撰擧の結果は同じく非政府黨員を多く出さしめしかば、チャールレスはいよ／＼狂ひて、今回は憲法中に在る王は國家治安の爲めに、法令を發布し且つ之を施行し得る』と云へる極めて種々に解し易き一文を執へて、『予は此權利を行ふなり』とて、直ちに五箇の條例を發布し、言論の自由を奪ひ、又々議院を解散し、來る九月に再撰擧すべきを命じ、更に撰擧法を改めて、今回は己のが屬黨たるべきものを擧げんと工夫せり。左れば政府と人民との間に

益々激甚なる衝突を始め、自由論者は其命令に従ふべくもあらず、『國民』の記者ナエールの如きは、最早や劍を執る時なりと叫びしかば、チャールレスは急ぎモールモン將軍にパリ及び其附近の警備を命せしに、之を開きたるパリ人民は已に戦闘の用意を爲し、最初は王の兵士に石を投ずる位に止りしが、終には互に發砲し、革命の砲火はいよ／＼爰に開かれぬ。顧みれば古來よりパリ市民が兵機を執て王兵に抗したることは珍からず、左れば彼等は前例に倣ひ、瞬く間に例の市塞なるものを建設し、千八百三十年七月二十七日より、いよ／＼純乎たる戦闘に従事したり。二十八日に於てモールモンは一時大攻撃を試みたりき、然れども今は全市の人民皆悉く兵士となり、屋上より又た窓間より又た門前より現はれ出で、戦ひしかば、モールモンも畢に怯怖心を出し、チャールレスに向ひて、『事已に此に至る調和するに如かず』と忠告せり、而かもチャールレスは肯かず、於此乎市民の重立ラフヒート、ペリエ、ラボール等はモールモンに面會を求めて、『速かに今の内閣を解散せば、我等は忽ち平穩に歸すべし、敢

てチャールレスに抗するにあらず」と明言せしかば、モールモンは更にチャールレスに向て以前の忠告を繰り返せり。然れどもチャールレスは猶ほ肯かず、兎角する中二十九日に及ぶや、王兵の去て民軍に投ずるもの引きも切らず、而してモールモンは終に殘兵を率ひてパリィを去り、パリィも王宮も、皆忽ち民軍の領するところとなりたれば、所謂る革命なるものも、僅か三日にして成就しぬ、故に世に之を稱して「榮光ある七月の三日」と云ふ。

革命の終結

チャールレスはセント、クロードより勅令を出して、速かに民望に従ひ、直に現内閣を解き、百事憲法に従ふべしと宣言せり。而かも最早や遅かりき。パリィ市民は已に大集會を催し、かの米國獨立戰爭時代より佛國大革命時代を通じて有名なるラ、フアエ、ット(時に七十三歳)を戴て、國民護衛兵の元帥となし、王家の支流オルレアン公を王位に戴くべしと決議したれば、チャールレスも今は又た奈何ともすること能はず、然らば責めては皇太子と定めたる我孫ボルドー公に我後を譲らしめよと嘆願せしも、亦た容されず、於此乎

彼れは空しく全國の人民に見棄てられながら、家族と共に英國を指して落ち延びぬ。





### ル井、フ井リッ、プ

(自千八百三十年  
至千八百四十八年)

- ル井、フ井リッ、プの人物
- ル井、フ井リッ、プと自由黨
- 急激黨の蜂起
- ギゾーとチエール
- ル井、ナポレオンの謀反
- パリー市民の激昂
- ギゾー内閣
- 當時の社會黨
- 革命の徴候

- 當時佛國の政黨
- 白耳義の獨立
- 當代の内閣
- ル井、フ井リッ、プの遺囑
- 埃及事件
- 那翁の遺骨とル井、ナポレオン
- アルセリア遠征
- 改善宴會
- ル井、フ井リッ、プの末路

オルレアン公ル井、フ井リッ、プ位に即く、公はル井十三世の第二子より支れ來れる末孫なり、同じく「ボルボン」家なりを雖ども、大革命の時には民黨に投じ、身を陸軍に置き、國境を壓し來れる外敵に當りて名あり。ル井十六世の殺さるゝ

や、事の餘りに過激に渡るを喜ばず、稍々温和黨に傾きしが、時勢の益々非にして、其身の危険を感ずるに至りしかば、國を脱して諸方に流寓し、姓名を變じて賤業に従事し、米國に渡り、英國に行き、爰に留ること多年、ル井十八世の位に即くに及んで、佛國の諸公子と共に歸朝したるものとす。左れば元來自由の味方を以て自ら任せしものゝみならず、久しく英國に在りて、英國の政治の如何にも圓滿に發達しつゝあるを見て、益々立憲政治の美を稱し、ル井十八世の末路、殊にチャーレス十世の時に至りて、最も其失政を危み居りしが、遂に今回憲政黨の推すところとなりたるなり。

或は曰ふ、ル井、フ井リッ、プは暗に憲政黨の首領となり、今回の舉の如きは、彼れが王位を奪はんとする魂膽より出でしものなりと。然れども彼れは其れほどまでの悪性を有するものにはあらず、かねて立憲政を嘉みし、今日の場合、己のが起たすんば、佛國をして再び無政府の慘狀に陥らしむべしと懸念したるに由ると稱するを以て至當なりとす。然れども此ル井、フ井リッ、プの位地たるや、

極めて困難なるものなりき。何んとなれば此時に當りて、佛國に四個の政黨ありき。第一は「憲政黨」、是れ今回主としてル井、フキリッブを推したるもの、第二は「王黨」、第三は「ボナバルト黨」、是れ那翁の血統を戴き、舊時の如き盛時を見んとするもの、斯くて第四は「共和黨」にして此黨中には當時猛烈の勢を以て興り來れる社會黨を混じ、最も當り難き概を示し居たるものとす。左れば尋常の君主にては、到底此間に其手腕を振ひ能ふべしとは見へざりし也。

### 最初の決議

議會はいよ／＼ル井、フキリッブに王冠を授け、且つ其子の男統に王位を繼承せしむべく約せしが、左る代りにル井十八世よりチャールズ十世に至りて破られたる憲法を復し、總て自由の制度を取り、加之「主權は人民に在り、王は人民を代表するものなり」との條件を附せしめたりき。

### 白耳義の獨立

ウキンナの大會に於て和蘭と白耳義とは合併し、こゝにネザラランドの一國を起せしが、固より無理に合併せしめたるものなれば、爾來兎角に軋轢を絶たず。千八百三十年の八月に至り、獨立黨の暴發したるを

以て、フレデリック太公ブラッセルに於て之を撃ちたりしも勝たず、終に擊退せられてアントウエルブに退きしかば、獨立黨は假りに政府を打建て、其理由を歐洲の諸國に訴へたり。因て其結果として、諸國は之を許し、且つサククスコーポルグのリオポルドを其王に承認したりしに、此王は英の皇室との姻戚に當るのみならず、其後ル井、フキリッブの長女を娶るに至りしかば、英佛は特に此白耳義に同情を表することゝなれり。然るに和蘭の方面に於ては之を喜ばず、猶ほも兵をアントウエルブに駐めて退かざりしかば、千八百三十二年に至り、英佛相議し、五萬の佛兵を之れに派し、忽ち之を擊破して、いよ／＼白耳義の獨立を確めたりき。

### 急激黨の蜂起

ル井、フキリッブは調和の爲めに急激黨を斥けざりしも、主として溫和派を用ひ、ブローリエ、ギゾー、ラファエット、及びラフヒート、ペリーエ等を以て其政府を組織し、着々内治の改善を圖らんとせしに、急激黨即ち共和黨は、此革命の餘威に乗じて、飽くまでも其主張を貫かん

と欲し、此際先づ多年國民を苦しめたるチャールズ十世の閣臣を處罰すべしと迫りたり。政府はポリニアック及び外三名を貴族院の裁判に附し、終身禁錮に處せしめぬ。然れども急激派は猶ほも之を以て満足せず、何故に之を殺さざるやと語り、ル井、フ井リップを暗殺せんとするの企畫を始むるに至れり。次でリオン地方に社會黨の蜂起するありて兵を動かす、更にラ、グエンデーに於て、ベリー公の未亡人に煽動せられたる王黨派の謀反あり、而して間もなく共和黨の將軍ラマークの死するや、其葬式に際してパリ市民の共和黨萬歳を唱へ、終に暴舉に出でたるを以て、兵士を之れに差し向くるに至り、所在共和黨若くは社會黨の秘密會社を見ざるなく、天下は更に此儘にては治まるべしと思はれざりき。

### 當代の内閣

千八百三十二年元帥ソールトを首相とし、ギゾーを文部、チェールを内務、ブローリエを外務として組織せられたる内閣は、往日に自由を叫びて、ル井、フ井リップを擧げたる、いづれも第一流の元老株にてありき。

左れば強固に於ては此上もなきものと見做されたりき。然れども其方針は此際斷乎として民黨の囂々者流に當り、以て之を挫屈せしむべしと云ふに在りしかば、國民は喜ばず、加ふるに其後ギゾーとチェールの間に確執を生じ、互に權力を争ふて相軋り、實にル井、フ井リップ朝の大不幸を來しぬ。而して今此二大政治家が互に消長したる跡を尋ぬるに、千八百三十二年より四ヶ年間共立し、千八百三十六年チェールが俄かに進歩主義に變じて争ふたるにより、ギゾー退きてチェール内閣となり、須臾にして又たギゾーの召還となり、翌年更にチェールに戻り、千八百三十九年ソールト内閣となりて兩人とも暫く退き、其翌年又々チェールとなり、而して是れ亦須臾にしてギゾーと變じ、爾來此ギゾー内閣は八年間即ち千八百四十八年まで續きしが、更にチェール等の反對に會ふて、終に大倒れに倒れて、畢にル井、フ井リップ朝の轉覆を見るに至りし也。

**ル井、フ井リップの遭難とル井、ナポレオンの謀叛** 之れより先

き、千八百三十五年フ井リップが觀兵式に赴くや、其車駕の駐りしところに、

突然地雷火爆發し、フキリップは無事なりしも、多く其從者を殺したり。由て其發頭人たるフイエスキ―を刑し、之れより益々共和黨若くは社會黨を壓するに至れり。然るに更に此に『ボナバルト黨』の謀反起りたり、上卷に陳べたる如く、那翁の弟の子にて、ル井、ナポレオンなるものあり、那翁の没落後は處々に流寓せしが、其後端西の陸軍に入り、更に英國に行き、伊太利の革命軍にも投じ、其敗れて歸るや、専ら文事に従事し、佛國の再び革命を起すべき時期あるを察し、密かに『ボナバルト』黨と計を通じ、種々の書を出版し、暗に那翁一世の如き大英雄の更に現はるゝにあらすんば、佛國の天下は復た奈何ともする能はずと煽動し居りしが、千八百三十六年突如としてストラスブルグに現出し、若干の兵を率て反旗を擧げぬ。尤も此際は何事をも爲す能はず、直ちに捕へられて米國へ放逐せられしが、ル井、フキリップの運命は最早や長かるべしと思はれざりき。

### 埃及事件とパリ―市民の激昂

之れより先き埃及の國王モハメ

ット、アリー―土耳其と争ふて決せず、千八百三十九年終に大に土耳其を撃てシリアを領奪したり。左ればかねてアリー―に同情を有する佛國政府は進んで之を是認せんとせしに、アリー―と隔意を生じ居る英國は之を拒み、佛軍を度外に置きながら、英露埃土の四角同盟を造り、海軍を之に差し向け、忽ちシリアより埃及軍を逐ひ、アリー―に迫てシリアを土廷に還へさしめ、佛蘭西をして大馬鹿を見せしめぬ。佛國々民は之れが爲めに激昂し、パリ―に於て更にダ―ルミ―なるもの現はれ、短銃を以てフキリップを狙ふに至り、チエールも終に其職を保つ能はず、更にギゾ―之れに代るに至れり、時に千八百四十年。

### 那翁の遺骨とル井、ナポレオン

チエールの首相たるべき、英國の

承諾を経て、那翁の遺骨をセント、ヘレナより佛國に迎ふるに決せしが、千八百四十年の十二月、いよゝ之を迎へて壯大なる儀式の下に改葬せり、而してフキリップも出で、之を迎へ、人民も歡呼せしが、之れと同時にル井、ナポレオンは米國より歸り來り、更に反旗を翻へして又々敗れ、今回は終身禁錮に處せ

られぬ。

### ギゾー内閣時代

ギゾーは歴史家なり、即ち有名なる文明史を著したるもの、而して人物も亦たチェールの如く野卑にてはあらざりき。然れども彼れは到底其理論を行ふ能はざりき。彼れは自由家なりき、然れども治安の爲めと思ひて壓政に傾き、且つ議員賣收の策を弄し、終に國民に棄てられたりき、而して今其時代の出來事を擧ぐれば左の如し、

- (一) 前述の如く亞非利加なるアルゼリアは佛領となりしも、其後 アブデル、カ―デルなる會長あり、久しく抗して降らざりしが、千八百四十二年、畢に大敗してモロッコ王に到り、更に之と共に我軍に當りしが、我陸將ブーゾー及び我海將ザンヅイールは之れに大打撃を加へ、モロッコ王をして和を請はしめぬ、而してアブデル、カ―デルは千八百四十七年に至りて、終に佛軍に降り、終身禁錮に處せられぬ。左れば内は前述の如くに騷擾せしも、外には其威を落さざりき。
- (二) 埃及事件以來、毎に英國と衝突し居りしが、此に西班牙結婚事件なるも

の起れり。ギゾーとル井、フキリップとは西班牙の女王をして、『ボルボン』家と結婚せしめんと欲し、英國は佛をして西班牙に勢力を得せしめざらんと欲して之を許さず、双方互に交渉せしが、ギゾーは遂に英のバルマルストンを凹めて、佛の思ふがまゝに成し遂げたり。(三) 然れども千八百四十七年に於て、いよゝゝ民黨と政府黨との決戦となりぬ。此年諸穀豊らず、物價騰貴し、労働者其職を失ひ、賃銀低落せしかば、所在不景氣と不平の聲を聞かざるなく、折柄社會黨は此機を利用して、大に國民の權利を主張し、議會の改良を叫びたれば、天下糾然として之に應ずる傾向ありしに、チェール等は爰に一計を案じ、此際非政府黨員全體の懇談會を催し、之を稱して『改善宴會』と呼び、之をしてパリより地方に及ぼさしめしかば、天下はいよゝゝ騒然となりぬ。於此乎ギゾーは飽くまで之を壓せんと欲し、先づ其『改善宴會』の集會を禁じ、巧みに議會に多數を制し、非政府黨員をして勝を議會に占めしめず、一時政府黨をして萬歳を唱へしめぬ。然れども一たび叫び始めたるパリ市民は到底之を壓へ得らるべくもあら

す、かねて千八百四十八年の二月二十二日と豫告せられたる「改善宴會」の集會は、民黨の首領株の穩かに政府の命に従ひしを以て、之を開くに至らざりしも、此時に至りてバリー市民の其の嘗て豫定せられたる會場附近に集るもの非常にて、皆區々に「改善萬歳」と呼ばり居りしが、果てはマルセーユの革命曲を歌ひ始め、斯くて其翌日となるや更に集りて政府より派出せられたる兵卒との小衝突となり、次で之を聞きたる秘密會員の武装となり、瞬く間に革命の光景と變じ、更に市民と兵卒との衝突となり、例に依りて此兵卒が畢に市民に對して活潑ならず、否、寧ろ之れに投ずるに至りしかば、ル井、フ井リップは之を聞て仰天し、ギゾーは責を引て辭職せり。

### ル井、フ井リップの末路

ル井、フ井リップは直ちにモーレー伯を召して新内閣を組織せしめ、將軍ブーゾーをしてバリーの軍隊を指揮せしめ、猶ほも事局を維持せんごせり。然れども到底民聲を壓して事を爲すとの難きを見るや、モーレーとナエールとパーローとを民黨より抜き、之をして

民衆を鎮撫せしめたり。因てチエールとパーローとは先づバリーに於ける軍隊に撤去を要求し、ブーゾー其職を辭して、一時民衆を治めしも、更に起れる蜂民は、右撤去せられたる兵卒をも之れに混じつゝ、王宮を指して進行し、ル井、フ井リップに退位を迫りしにより、フ井リップは畢にセント、クロードに退き、其孫たるバリー伯に位を譲るべく宣言せり。然れども事已に遅し、有名なるラムルナンを首領に戴ける共和黨員は、みる／＼中に議會を制し、兎も角も民主主義の假政府を打建つべしと爲し、舊き叫び聲なる自由と平等と兄弟との三大綱領は再び叫び出され、爰にラマルナン、ヂュボン、デリユール、ロルレアン、ブロン等を以て組織したる共和的政府を打建てたり、而して折角「市民の王」として現はれ出でたるル井、フ井リップも、亦たチャーレス十世と其運命を同ふし、其後英國に逃げて死し去れり。

## 假共和政府時代

(自千八百四十八年十二月)

○各政黨の主張  
○社會黨の敗戦  
○ルキナホレオン起つ

○國立職工場  
○憲法の制定

共和黨員は勝利を得て、此に假政府を打建てたり。然れども直ちに其黨中に於て軌轡を始めたり。ロルレアン、ブロン等の社會主義者は曰く、此際よろしく労働者の爲めに『國立職工場』を興すべしと、而してラマルナン等は之れに不賛成を唱へしも、竟に労働者の激昂を恐れて之れに與みし、いよ／＼之れを設置せり。然るに此事たるや到底實行せらるべくもあらず、労働者は無數なるも場員には限りあらざるべからず、忽にして四萬人を許可せしも、猶ほ漏れて之れに不平を云ふもの所在に満ち、之を維持する費額の莫大なるのみか、職

工の中に數多の懶惰者を出すに至れり。因て千八百四十八年の五月普通選挙に由りて組織せられたる議會は討議の末、此職工より兵士を募集し、之を厭ふものには退場を命ずべしと定めしに、彼等は又々騒ぎ始め、更に不穩の舉動に出でしかば、政府は直ちに將軍カヴァンニアックに國民軍の指揮を命じ、之れに百事を委ね、思ひ切て鎮壓せしめたり。於此乎更に民衆、否、寧ろ社會黨員と兵卒との衝突と激戦となりしが、今回は民衆の大敗となり、彼等は終に數千の死屍を遺して潰散するに至りしかば、其後將軍カヴァンニアックは假りに執政官の職に就き、更に内閣を組織したり、時に千八百四十八年の七月也。斯くて議會は直ちに憲法を制定し、其模範を米國合衆國に取り、先づ大統領の期限を四ヶ年と定め、其再撰は満期後四ヶ年を経るにあらずんば之を許るさすとなし、議會より撰出せられたる委員を以て、國家評議會なるものを組織し、其期限を六ヶ年となし、副大統領を以て其長たらしめ、議會は一院となし、總員七百五十名と定めたり、而して千八百四十八年の十二月普通選挙によりて、

いよ／＼大統領を撰ぶことゝなりぬ。

然るに例のル井、ナポレオンは當時終身禁錮を脱して、英國に潜み居りしが今や共和假政府の建設に會ふて歸り來り、已に其黨派より撰ばれで議會に在りしが、此時檄を諸方に飛ばせ、其大統領候補者たるべきを以てせり。斯くて當時大統領の候補者として數へられたるもの、中には、勿論將軍カヴァンニアクあり、次でラマルテンあり、ロルレアン、ラスバー等ありしが、開票に至りて之を見れば、いづれもル井那翁の半數にだも及ばず、因て那翁は直ちに大統領の官宅に入りぬ。

### ル井那翁時代

(自千八百四十八年  
至千八百七十年)

- 佛民が那翁を撰みたる理由
- 那翁野心の實行に着手す
- 皇帝の位に即く
- クリミア戦争
- 伊太利と同盟す
- メキシコ遠征
- いよ／＼普佛大戦争
- 重圍中に在るパリ
- 伊太利自由黨を征す
- 大不意打を行ふ
- 那翁の政治
- 支那戦争
- シリア事件
- 那翁武功を望む
- 那翁の末路
- 嗟呼佛國民

當代の大癡物たるル井那翁は、いよ／＼大統領に撰ばれたり、而して何故に彼れは斯くも俄かに佛國民の人望を得るに至りしか、是れ疑問の如くして疑問にあらず。佛國民は大那翁の斃れたる後に、種々の政體を試みしが、一も成功したるものあらず。佛國民は大那翁時代の盛時を追想して欽慕措く能はざる折柄、



今回は普通選挙に依りたることゝて、一般の人民はル井那翁の人物如何を知る由もなく、何分にも大那翁の眞の甥なりと聞きしより、人氣の忽ち彼れに向ひしに過ぎざるなり。

然るに那翁の大統領に擧げらるゝや、其第一に行ひしものは、當時伊太利に共和黨的の革命起り、ガリバルヂー等が羅馬を襲ふて之を取りしより、法王が檄を天主教國特に佛國に飛ばして、救援を求めしかば、則ち之を救はんが爲めに兵を羅馬に送り、終に伊太利革命黨を撃破したること是れなりき。於此乎宗教者よりは欸心を得たりしも、共和黨派よりは、已に猜疑の眼を以て眺められ居たりき、時に千八百四十九年。

次で彼れは内閣を改造し、今回は單に那翁の命を奉ずるものゝみを擧げたり、而して更に豪直屈せざるバリ護衛兵の長官シヨンガルニエを罷むるに至りしかば、心あるもの及び議會は、益々那翁を疑ひ始めぬ。然れども議會に於ける政黨は、個々に分裂して相争ひ、那翁を監視するに暇あらず、之れに加

ふるに那翁は此際地方を巡遊し、予れに他心なし、全く諸君の意に任せんのみ、而かも四年間の後更に四年を経ずんば大統領に擧げられざる制規は、聊か憲法中の缺點ならんと云ひしも、深き思慮なきものは其意を悟らず、齊しく之に賛成せり。然るに之れより先き兎角社會黨の暴擧に出づること屢次なりしを以て、議會は普通選挙權に條件を加へ、普通選挙權は同處に三ヶ年留りたるものに限るとせしを、此際那翁は此條件を撤回せんことを議會に要求せり、是れ民衆の心を得んが爲めなりき。

左れば議會もいよゝ其大野心を看破し、一體大統領が國家の秩序を慮からず、種々なる事を申出で、且つ再撰に關する憲法の非難を爲すが如きは穩かならずとの議論議會に沸騰し、那翁の運命も亦た已に危からんとせしかば、那翁は此に斷然と假面を脱して、所謂不意撃の處置に出でぬ。

千八百五十一年十二月の二日、那翁はいよゝ大伯父の跡を襲はんと欲し、モルニール伯、將軍アルノー、警視總監テモールパ等と相謀り、洩すことな

く八方に手配を爲し置き、不意に警吏を差し向け、議員の重立十六人及び其他諸黨の首領株を捕縛したりき、而して其中には、ナエール、カヴァンニア、ツク、及びかの小説家として有名なるヴクトル、ユーゴをもありき。人民は愕きの、政黨員は憤慨しぬ、而して再び劍を把て起たんとせり。然れども此際に於ける那翁の準備は、已に周密を極めて乗すべき間あらず、那翁の軍隊と警吏とは早くもパリと地方とを壓して控へたり。斯くて那翁が新に布告したるものを見るに、曰く、(一)議會には解散を命ず、(二)普通選舉は無條件となれり、(三)來十四日に總選舉を行ふ、(四)パリを包圍の内に置く、(五)國家評議院を解散す、云ふ事、是れなりき。次で新内閣を組織し、モルニを内務、アルノーを軍務と、其々指命し、行政立法の兩部を改正し、専ら大統領に隸屬するものとなし、此際大統領の期限を定むるを發表し、而して普通投票によりて國民の贊否を問へり。然るに國民は久しく小黨分裂の弊に懲り居たるを以て、大多數の投票は、畢竟那翁の言に従ふこととなり、パリに於ても地方に於ても、干

戈を執て之れに抗したるものあるも、直ちに破られ、那翁がボルドーに大宴會を催して、自ら帝たらんと欲する意を洩すや、其翌月元老院は帝國復興の議を全國に下し、人民は大多數を以て、いよ／＼那翁を佛國皇帝の位に擧げぬ。那翁は夙に能く佛國民の性質を知れり。佛國民は少々壓制を蒙ることも、若夫れ其國が繁榮し、其國權が揚がるを見れば、何等の不平をも謂はざるものなり。於此乎那翁は皇帝の位に即くや、勉めて内部の改良を圖り、殖産貿易の途を開き、英國流の自由主義を取り、俄かに商業界に活氣を與へしめぬ。又パリに廣大なる土木を興し、之をして世界第一流の市府たらしめんと志し、總て華美なるものを爲して人民の目を眩せしめ、益々人氣を收めたりき。然れども猶ほ其地位を強固にせんには、爰に武力的の功名を擧げざるべからず、於此乎露國と兵を構ふるの途に出で、乃ちクリミア戰爭となれり。千八百五十三年より交渉を開き、其翌年に至りていよ／＼開戦となりたるクリミアの役に就ては、已に之れを英國史中に見たるを以て此に畧す。

斯くてクリミヤの戦争終るや、那翁の威力は益々揚れり、而して猶ほも處々に遠征を差し向けぬ。先づ其一是支那戦争なり、而して此戦争に就ても、已に之を英國史中に見たるを以て之を復せず。其二是伊太利戦争なりき、英國史に見たる如く、當時オルシニーなる伊太利人あり、那翁を殺さんど欲して事成らざりしも、此時よりして那翁は其身の危険を恐れ居りしかば、千八百五十九年、伊太利のカヴールが、援助を求めたるを承諾し、伊太利に於て塙と戦ひ、大に勝利を博しぬ。尤も間もなく塙と和して引き上げ、伊に大失望を與へしとは云へ伊太利史の部を参照せよ。

更に又た其翌年に至るや、那翁はシリアに在る佛國領事館が、其地の暴徒の爲めに襲はれたるを以て、之を罰せんが爲めに兵を送り、同じく大勝利を博したりき。而かも是れ又た英國の拒むところとなりて、其地を領するを得ず、空しく其軍隊を引き上げしめたり。斯くて次ぎにはメキシコの遠征を企てぬ。千八百六十一年那翁はかねてメキシ

コの共和國が、佛國に負債し居るを名とし、速かに之を拂ふべしと迫りたり。蓋し當時北米合衆國は南北戦争の最中に在るを以て、之れに干渉する能はず、甘く行けば、一舉してメキシコを呑み得べしと信じたるに由る。左れば畢に開戦となり、最初のほどは、英西の兩國も同様の要求を爲して之れに與みしたりしが、間もなく那翁の野心を看破するや、佛のみ之れに當りたり。斯くて此役や大勝利を博して、全く之を征服したるを以て、暫くマキシミアンをして此國を治めしめぬ。然るに南北戦争の終るや、合衆國は例のモンロー主義によりて、大に之れに反対し、佛國をして主權を此地に立てしむることを拒み、動もすれば大軍を差し向けんとする傾きありしかば、那翁は止むなく、マキシミアンを呼び還さんどせしに、マキシミアンは事の餘りに殘念に堪へざるを以て、猶ほも躊躇して退去せざる中、メキシコの兵は合衆國の後援を得て、終に大ひに寄せ來り、マキシミアンは捕へられ、間もなく死刑に處せられたり(米國史の部参照)。

那翁は内治に於て其意を用ゐざりしにあらす、法律を改正し、刑法を寛にし、社會改良に熱心し、殖産業に注意し、鐵道を布設し、電線を通じ、國家の繁榮の爲めに大に盡力するところありたりき。左れば那翁在位の間、佛の富みしことは非常なりき、而して政黨の騒動も一時之れに壓せられて、天下太平となりたるなりき、故に其功勳しとせず。然れども妄りに權勢を其身に附せんと欲して、専ら武事的功名を望み、クリミア戦争と支那戦争とは成功したれ、シリヤに於ては英に屈し、メキシコに於ては米に屈し、漸次武運拙なく見へしかば、此際更に大武功を立てんと企てぬ、因て爰にいよ／＼普佛戦争となりたるなりき。

### 愈々普佛戦争

千八百六十五年に於て、爰に埃普の戦争あり、而して埃の大敗して普の大勝するや、佛は漸く普の勢力を嫉み始めたり、而して普は又た佛の古來より己れに敵するを見て、力もし叶はゞ一撃を佛に加へんと工夫し居たりき。於此乎世界は早晚此兩國の間に大戦争を見るあらんと期待し居たりき。

りき。

左れば千八百七十年に佛も十分に用意を爲し、普も十分に準備を爲し、互に睥んで相控ゆる中、爰に衝突の口實起りぬ。當時西班牙王位に嗣子なきを以て、西班牙は日耳曼國なるホーエンゾルレルン家のリオポルトを所望せり、然るに此のリオポルトは普王ウイヘルムの血統なるを以て、かねて西班牙に大關係を有する佛國は、西班牙の終に普に渡るを恐れて之を許さず、那翁は忽ち之れに抗議を申込みたり。斯くて事いよ／＼普佛間の問題となりしに、之を聞ききたるリオポルトは自ら其候補を辭し、以て西班牙の招待を受けざるべしと言せり。然れば事は之れにて落着すべきに、一日那翁が陸軍大臣デ、グラモンを召して、軍備如何と尋ねしとき、『軍備は充實す、何時にても四十萬の精兵を日耳曼國境に繰り出し得べく、輜重糧食も亦た之れに協ふ』と答へしかば、那翁は時來れりと爲して、猶ほも無理なる要求を普王に呈したり、曰く『リオポルトが自ら辭するとも、當てにはならず、願くは普王之れが保証を爲せよ』と。

是れ已に侮辱の語なり。左れば普王も一時如何と躊躇せしが、時の首相 ビス マルク が切りと開戦を主張せしより、時の陸軍參謀長たる モルトケ を召して之に問へば、『時は今なり、今日にして戦はずんば戦ふの時なし』と答へしかば、いよ／＼此れ亦た強硬主義を執り、其後互に折衝の後、遂に双方とも宣戦の布告を爲しぬ、時に千八百七十年七月の十九日。

那翁は之を待ち受けぬ。今日まで那翁の爲めに壓せられ居る政黨員若くは自由家は那翁の敗亡を祈りたり、而して人民は兎も角も今や誇り居る普國を挫折せよと叫喚せり。於此乎那翁は意氣揚々として出陣せり。然れども憐れむべき哉、彼れは グラームン が明言したる如き大軍を得る能はず、僅かに其半を整へ得たるのみ。加之兵機之れに伴はず、輜重揃はず、當時始めて用ゐられたる元込の銃を使用する法をすら知らざる兵士之れに加はり、敗形已に現はれたり。然るに日耳曼の方面に於ては、瞬く間に、即ち僅々十四日間に、四十五萬の大軍を整へ、輜重も皆之れに協ひ、直ちに佛境を壓して攻め來れり。

斯くて八月の四日に至るや、普の皇太子に依て率ひられたる一隊は、疾風の如くに普佛兩國を分つところの ローラル を横り來り、グアイセンブルグ の佛軍を破り、直ちに ウオルス に於ける マクマオン の陣を突て來れり。佛軍は其疾きに驚けり、而して一時は頑強に抵抗せしも、終に敗れて潰走せり。次で六日に至るや フロッソー に依りて守られたる スビヘルン の地は不可攻と思はれしに、忽ち普軍の前に陥落したり。

時に那翁は メッツ に在りしが、之を聞て大に愕き、殆んど爲すところを失したるが如くなりし、蓋し那翁は軍人にあらず、而して戦畧の何物たるかを知らざりし人なればなり。於此乎 メッツ の總督を將軍 バゼーヌ に委ね置き、自今自己は指揮に任せずと申出でしかば、忽ち軍隊の人望を失ふに至れり。加之 パリ の市民等は今まで那翁に謠歌し、又た那翁に開戦を慫慂したるものなりしも、今や敗局の顯はれしを見て、俄かに那翁に反對し、那翁政府を轉覆せんと企てたり。因て那翁は マクマオン の軍に到り、速に軍を引て パリ に歸り、

一は市民を制し、一は敵の來るに備へよと命じたり。然るに事の未だ此に至らざる間に急報あり、今やバゼーヌはメッツに於て大軍に圍まれ、將に陥落を見るあらんとす。於此乎マクマオンは更に之れが救援に赴かざるべからずなりぬ。

メッツに於けるバゼーヌは其後敵の包圍するところとなるべきを悟りしかば、敵軍を衝てマクマオンに合せんと欲し、之に向て出發せしが、途中に於て敵の進るところとなり、敗れくゞて終にいよゞメッツに圍まるゝことゝ成り了せしなり。

マクマオンは又たメッツに達せんと欲し、勇を鼓して進みたりしも、今や洪河の滔々と決し來る如き普の大軍に對して其道を開くべくもあらず、逐はれくゞて、之れ亦た終にセダンに立て籠ることゝなりぬ、而して那翁も今は彼れと俱に在りき。

マクマオンの軍隊がセダンに到着する間もなく、普軍は直ちに其後を逐ひつゝ、

來り、九月の一日に於て已にセダンを圍みたり。此時普軍は二十五萬、佛は十萬、而して一は戰勝の餘に乘じ、一は敗衄の極に在りしかば、其結局や知るべかりしなり。加之間もなくマクマオンが負傷して退き、次でデユクローが指揮官に任せられしに、其後亞非利加より歸り來れる將軍デヴァンプフエンなるものが、俄かに陸軍大臣の命なりとて、此處の指令官として入り込み來りしかば、將校士卒等は皆此ヴァンプフエンを歡ばず、不平次第に高まりて、いよゞ敗北を速めたりき。

普軍はいよゞ攻めぬ、佛軍とても亦た能く防戦せり。然れども最早や其敵にはあらず、みるゝ中に五英里に亘る堡壘は、次第くゞに陥られ、五百門の大砲は周圍の高地より我が陣中に落下せり。左れば死するもの、傷くもの、遁ぐるもの、散ずるもの、相集て大混雜を呈し、また之を制すべくもあらず、セダンも已に陥落と見へげれば、那翁は直ちに休戦の旗を上げしめ、將軍ヴァンプフエンを普軍に遣はし、如何なる條件の下に降参を許すべきかを聞かした

當時普王ウイリアム一世も皇太子もビスマルクもモルトケも、皆此攻圍の軍中に在りき。因てヴァンプフェンは口を開て「願くは寛大の條約あらんことを、君等もし寛大の處置に出でなば、我佛國は之を以て恵とすべきも、若夫れ屈辱的降服ならんには、吾人は飽くまで戦ふべし」と言ひしに、モルトケは靜かに之に答て、「君よ、思考せよ、今や我軍は二十五萬人を以て君の八萬人を圍み、五百の大砲を其頭上に注ぎつゝあるなり、君等にして暫く躊躇せば、君等の全軍は殄滅のみ、亦た寛酷を云ふの時にあらざるべし」と。於此乎無條件にて八萬有餘の將卒は止むなく武器を投することゝはなりぬ、時に千八百七十年九月二日なり。降服已に終るや普王并に皇太子等來りて那翁を吊し、極めて鄭重に之を遇せり。ビスマルクも亦た那翁が佩劍を解かんとするを制し、「帝よ其れには及ばず」と告げしかば、流石の那翁も背に汗して、言ふところを知らず、其儘悄然として日耳曼の地に送られ、在位二十餘年の活動も、今や一場の夢とはなりぬ。

パリに於ては此報を聞くや、共和黨は俄かに吼り出し、此戦争の罪を那翁に歸し、速かに別政府を打建つべしと爲し、議會に於ても大激論の最中なりしが、爰にガンベッタなるものあり、若干の武装者を率ひ來りて「佛國は勿論共和國たるべし」と宣言したるに、最早や之れに抗するものあらず、假に國防政府なるものを設け、將軍トロシユールを首領となし、フアーヴルを外務に、ガンベッタを内務に撰定したり。此時チエールも議會にありて、多少ガンベッタ等と議論を異にしたれども、敵軍を前に控ゆるとて、兎も角も此政府を扶くべしと爲し、共に俱に盡力せり、時に千八百七十年九月四日。日耳曼軍は最早や其前途に敵を見ず、パリを差して入り込み來れり。パリ政府は屢々平和條約を結ばんとせり、而かも條件に就て讓與すること難く、其れより四ヶ月間重圍の内に落ちつゝ戦ひしが、日耳曼軍は敢て殘酷なる砲火を之れに向けざりし、蓋し大勢已に定りたれば、君子の如くに進退し、普王の如きはヴァルサイユの王宮を占領し、優然之れに住して談笑し、更に迫るところ

あらざりき、之れに反してパリ市内に於ては、已に食物に窮乏を告げ、外部より援軍の來るべき望はなく、ガンベッタの如きは、屢々輕氣球に駕して市外に逸し、援軍と食物との爲めに盡力するところありしも功を奏せず、外には援軍敗れ、内にはあらゆる動物を食ひ盡すに至れり。

メッツに於ては大軍を控へつゝ、同じく重圍の中に在りしが、那翁の捕虜となり、パリに共和政府の打建てられたるを聞くや、大將バゼーヌは頗る不活潑の舉動に出でたり。幾度か攻勢を取るべき機會ありしも之れに乗せず、密かに日耳曼軍の本營に通じて、メッツ明け渡しの條約を爲し、千八百七十年の十月、病傷者を合せて總計十七萬人、おめくとして降ることとなりぬ。

メッツ既に陥りたれば、之を圍み居たる大軍は更にパリの軍に合し、パリ市街の山河は悉く普兵を以て滿さるゝに至れり。斯くて千八百七十年の十二月、最早や猶豫すべきにあらすとなし、壯んに之を砲撃せしかば、翌年一月に至り、フアーヴルは更に平和條約を結ばんとてヴァルサイユに於ける普の本營に來り、

種々の條件を容れて休戦となり、兎も角も此際全國の代議士を新撰し、以て事を決すべしと定まり、其二月新撰議員を以て開かれたる國會に於ては、先づ國防政府を廢して、更に假政府を起し、専らチェールをして行政の百事を處理せしめたり。此のチェールに就ては從來非難すべきもの尠からざりき、然れども此際に於ける動作は實に彼れが愛國心に滿てるものたるを現はしぬ。彼れ當年七十歳の老人なりき、然れども戦争以前に於ては、此戦争の不利なるを察して之を止めしめんと努力し、已に戦争となりて、パリの普軍に圍まるゝや、堡臺を築て之れに當りしものは彼れなりき。左れば今回は議會の爲めに推されて其主となり、其れよりビスマルクと平和條約の爲めに幾多の談判を重ね、實に當代に於ける二大英雄の手腕角べを見せしめぬ。而して結局は嘗て日耳曼の地たりし、アルサス、ローレインの二州を割き、五十億フランの償金を拂ふこととなりぬ、時に千八百七十一年の二月なり。

嗟呼吾人は最早や佛國史を語るを好まず、何んたる混雜の國民ぞや、又た何ん



二百十六  
たる愚昧の王のみ、後を逐ふて其位に即きしぞや、吾人不肖と雖ども、一頁を開けば則ち百頁の如何を知るに足る、而かも事に當て惑ふとは夫れ之を謂ふか、何んぞ其王の同轍を蹈み、其人民の同揆を行くことの屢次なるや。



## 第五章

# 日耳曼史

日耳曼帝國なるものは、千八百六年那翁が日耳曼を掃盪して、來因同盟を組織せしときに破られたり、而して爾來日耳曼帝國なるものあらず。因て古來帝位を占めたる奥のフランシス二世も、其時より、日耳曼帝と稱するを廢し、單に奥帝と稱し、改めてフランシス一世となりたり。左れば其後那翁の没落までは、帝として日耳曼を統ふるものなきも、奥普相合して一時日耳曼を率ひしが、千八百十五年、即ち那翁の没落に及んで、爰に「日耳曼聯邦同盟」なるを組織したり。

日耳曼聯邦同盟時代并に (自千八百六十五年)

埃普戰爭及び普佛戰爭時代 (自千八百七十五年)

- 日耳曼聯邦大會の決議
- 王者と自由黨
- 普王の政治主義
- 抑壓令の出現
- 自由派の反抗
- 形勢一變
- 匈牙利の自由派
- ウヰンナ革命黨の敗北
- 露匈牙利を征す
- フレデリック、ウイリアム四世立つ
- 革命黨の勝利と失敗
- シュレスウイック、ホルスタイン事件
- 埃普の競争
- 日耳曼聯邦同盟時代の進歩
- 埃帝とメテルニヒ
- 日耳曼人民の政治運動
- 神聖同盟の活動
- 當時大陸諸國の方針
- 埃國の革命
- 伊太利の革命運動
- 匈牙利の革命
- 普王の文治
- 普國の革命
- 日耳曼中央政府の設立
- 中央政府の末路
- 普埃に屬す

- ウイリアム一世の出現
- ビスマルク出づ
- 埃普戰爭
- 埃普戰爭後の普國
- 普佛戰爭
- 其軍備擴張
- 埃普丁抹を撃つ
- 伊、普と同盟す
- ビスマルクとモルトケ
- 普王日耳曼皇帝となる

ウヰンナの大會に於て全歐洲國が、那翁の善後策を決すると同時に、日曼曼のみにては、爰に「日耳曼聯邦同盟國」なるものを組織せり。此同盟は埃普兩國を二柱となし、三十九箇の國家之れに與みし、互に攻守の同盟を結び、凡そ外國との開戦若くは條約は、必ず之を同盟國全體に謀るべき事と爲し、之を統る爲め若くは決する爲めに、所謂「全國大會」なるものを起し、各國家に分配して、常に三十萬の兵を備ふこと、爲し、宗教は何れの國家に於けるも、自由と爲し、宗教の相違を市民權に及ぼさるること、定めたり。尤も之れに統治者を置かず、大會の多數に依りて、百事を決すと爲したることなれば、此同盟も畢竟空名たりしとは云へ、兎も角も此同盟にて、一先づ日耳曼諸國家の聯

合を保つことゝ爲したるなりき。

此同盟時代に於て、日耳曼は實に大發達を遂げたりき。近世史に於て見たる如く、日耳曼は彼の三十年戦争以來、百事皆崩壊し去り、之れが爲めに二百年の退歩を招けりと稱せられ、次で那翁の蹂躪するところとなるや、一層その疲弊を甚しくせしも、此同盟時代に於ては、漸々之を恢復しぬ。即ち此同盟時代に於て、日耳曼は一回たも外敵の爲めに襲はるゝことなかりき、又大戰を起したることなかりき、故に此平和時代に於て其繁榮と發達とは、著しく此國を祝福せり。尤も外敵已に滅したるを以て國民の内治に眼を注ぐもの勃興し、爲めに民權自由の叫聲をして、屢々革命に變せしめ、處々に動亂を惹起せしとは云へ、是れ國民元氣の横溢と見るべく、従つて外敵に蹂躪せられたる跡とは、大に其趣を異にしたりき。さらば政治界に於ける此時代は、殆んど王者若くは執權者と自由民權者との競争時代とも稱すべきものなりし。請ふ此れより徐々に之れを見ん。

### 煥帝ニメテルニヒ

既述の如く、此時に當りて煥國は、矢張り フラ

ンシス一世(自千七百九十二年至千八百三十五年)の下に在りしが、彼れは庸君にして取るに足らず、然るに其宰相メテルニヒは前條に見たる如く、一代の癖物にして、此際管に煥國を率ひたるのみならず、又た普國を率ひたるのみならず、更に日耳曼を率ひたるのみならず、實に歐洲全體の保守黨を率ひ、頑迷固陋の譏は免かれざりしも、歐洲第一の大立物なりき。従つて煥國をして殆んど歐洲に覇たらしむるに至りたりき。

### 普王の政治主義

當時の普王ウイリアム三世(自千七百九十年至千八百四十年)は前條

に見たる如く、良君なりき、於此乎善く人を用ひ、内治に軍事に學事に致々として力を盡し、特にスタインの言を用ひて、自由の政治を全國に布き、之れが爲めに國民の愛國心を喚起したることは非常なりき。然るに此良君も唯だ其意志の薄弱なる欠點ありしが爲めに、一朝メテルニヒの説くところとなり、「王よ此際思ひ切て一揆同様なる民權者流の運動を制止せよ、否らすんば、再び佛國

革命の如き大馬鹿を見るあらん」と警告せらるゝや、俄かにメテルニヒの政策に同じ、合せて奥國に隸するものゝ如くなり了せり。

### 日耳曼人民の自由の運動

日耳曼は久しく封建政治を脱し得ざるの國なりき。左れば英にはクロンウエルを産し、佛には大革命を生じたるに關はらず、日耳曼には一も斯る大變動を起したることあらざりき。然るに那翁一び出で、日耳曼を掻き亂すや、封建制度の餘習は、之れが爲めに一掃せられ、從つて平民の意氣勃然として昂るに至れり、而して此間最も此意氣を獎勵したるものは、時勢の豫言者たる新聞記者と諸大學の教授と其學生なりき。

### 抑壓令の出現

對那翁時代の日耳曼は、奥と云ひ、普と云ひ、其他の小國家と云ひ、孰れも人民の愛國心を鼓舞する爲めに、人民の機嫌を取り、爲めに立憲政治を人民に約束せしもの比々皆然りしなり。然るに那翁の己に亡ぶるや、俄かに王家の強大を期し得べくなりたるを以て、露帝アレキサンダルは勿論、終には奥帝も普王も、皆メテルニヒの政策に同じ、爲めに人民を抑壓す

るに至りしかば、前條に述べたる如く、爰に大騒動を起したりき、而して先づ其第一はスツールザの著書なりき、スツールザは一青年のみ、然ども筆力極めて豪健にして、當時論者の間に行はるゝ民權を語り、是れ畢竟日耳曼國をして空しく無政府に陥らしむべきものと斷じられたれば、露帝アレキサンダルは千八百十八年エークスラ、ジャベルに開かれたる「神聖同盟會」に於て、此書を諸帝王并に代議士に分ちたり。然るに此書たる元來露帝の命に由りて著せられたるものと判明したれば、日耳曼の自由家は、之れが爲めに大激昂を來せり。斯くて更に又た一怪人物現はれたり、當時漸く名を知られたる脚本記者にてロツツエプーなるものあり、久しく露帝に寵せられ居りしが、今回其故郷たる日耳曼のワイマルに歸り來りて、一雑誌を發行し、熾んに自由民權家を語り、かねて露國の間諜として働けり。左れば之を知りたる自由派の一學生にて、カール・サントなるものあり、一日ロツツエプーを其家に刺し殺し、其儘捕へられて刎ねられたり、時に千八百十九年三月なり。於此乎殺氣が忽ち自由派中に起る

と同時に、塊のメテルニヒと普の首相ハルデンベルヒとは、此際いよ／＼果斷の處置を取らざる可らずと爲し、カル、スパットに日耳曼の執權者を集め、所謂「カル、スパット決議」を定め、爾來言論の自由を制し、秘密集會を取締り、諸大學を政府監視の下に置くことゝ爲し、次でフランクフォルトに於ける日耳曼同盟國大會に此議を呈出して通過せしめ、之をしていよ／＼日耳曼國中を支配する法律と爲したり、而して是れ一にメテルニヒの力に依れり、時に千八百二十年五月なり。

### 自由派の反抗

塊普の勢力に壓せられ居る同盟議會は、前述の如く抑壓令を受け入れぬ。然れども此際西南の諸國家は、容易に之れに従はざりき。

ウイルテンベルヒの如き、バヴアリアの如き、バーデンの如き、ナッサウの如きは、夙に立憲政體を施き居りしが、當時ウイルテンベルヒの王ウィリアムの如きは、主としてカル、スパットの決議に異論を唱へ、何れの集會に於ても、斷然メテルニヒの政策に反對し、當時自由の氣運の熾んなる西南の諸

國を率ひて、塊普の勢力に戦を挑み、終には壓服を餘儀なくせしめられしとは云へ、一時は人民の爲めに大氣焔を吐きたりき。又た普國に於てもハンボルトの如き、ビーメの如き、ボーエンの如き高官の職に在るものも思ひ切て自由の説を吐き、用ゐられずして其職を辭し、アルントの如き、デウィッテの如き、シオーヌの如き、ウルケルの如き教授は、其大學に在て自由を叫びしが爲に、或は入獄、或は放逐、或は罷貶の運命に會ひ、青年革命黨の如きは、非常に猛烈なる運動を爲せしも、是れ亦た同じく挫折せられ、いよ／＼メテルニヒをして其勢力を得せしめぬ。尤も自由は畢に壓服せられ得べきものにあらざれば、吾人はメテルニヒの末路に於て直ちに其實證を見るあらんとす。

### 當時大陸諸國の方針

此時に當りて所謂自由の政治を施きつゝありしものは、唯り英國のみなりき。彼れ露帝を盟主に戴ける「神聖同盟」は、其後屢々集會を催せしが、千八百二十二年ヴェロナに開かれたるものゝ如きは、専ら大陸に於ける自由の民聲を壓するの相談のみにて、其互に約するや、佛は直ち

○西○班○牙○の○自○由○者○を○征○し、  
 ○埃○は○伊○太○利○に○於○ける○革○命○黨○を○壓○し、  
 ○普○は○昔○て○許○した  
 ○る○中○央○代○議○士○會○を○閉○し、  
 ○普○王○の○適○當○と○見○做○す○と○き○ま○で○見○合○す○べし○と○布○告○し、  
 ○帝○王○の○權○力○に○は○最○早○や○當○る○べ○か○ら○ず○と○見○へ○た○り○き。

### 形勢一變

右の如くにして自由の聲は、最早や帝王の鐵血政治には抗し難く見へたりし。然るに其後數年間人民と帝王との軋轢を繼續する中、爰に佛國に於て其壓抑せられたりと思はれたる自由の精神が、不意に大破裂を爲して、時の歐洲を驚かすに至れり、之れを千八百三十年に於ける「七月革命」とす(佛國史中に在り)。此時日耳曼に在る自由の希望は俄かに勃然として蘇生し來り、  
 プランスウィックに於ては其年の九月、直ちに其壓制家たる主公チャールスを逐ひ出して、自由主義者たる其兄弟を戴くに至り、  
 バヴァリアに於ては三萬有餘の自由者集り、  
 バヴァリア憲法の紀念會を催すと稱して大騒動を起し、  
 サキソニーに於ては、其王の天主教に傾くを攻撃し、直ちに之を廢せんと主張し、  
 ハノヴヱルに於ては二年間の騷擾を経て、一時自由政治を施くことゝ

なり、  
 ヤーデンの如きも此際一層騒ぎ立て、昔て得たる自由を恢復せんと欲して奮闘し、事態到るところに危険を示して、  
 埃も普も畢には此自由の精神を壓服し能はざるべしと思はしめぬ。

### 埃國の革命

埃國はメテルニヒを用ひて其威を天下に振ひ、殆んど大陸に覇たらしめぬ、然れども之れ影法師なりし。メテルニヒは外交の機畧のみを以て能く天下を制し得べしと爲したりき、而かも之れ誤見なりき。彼れは外部を張るのみを志し、而して内部を養ふことを忘れ居たりき。財政は紊亂し、内債は嵩まり、教育は自由を制する爲めに壓せられ、外貌は極めて治り居るが如く見へしも、其實は何日か大破裂を來すべく豫想せられき。左れば當時に記すべきもの尠く、只だ「神聖同盟」と「日耳曼聯邦」の牛耳を取りて、徒らに自由の聲を壓するのみに忙殺せられ居り、斯くて千八百三十五年フランス一世死し、其子フェルデナンド一世其後を繼ぎしも、更に政治に變動若くは刷新を見ず、依然メテルニヒの下に在りしが、爰にいよいよ大動亂を招くに至れり。

千八百三十年に於ける『佛國革命』の影響は主として日耳曼の諸小國に限られしを以て、奥普の力にて直ちに之を征服し得しも、此に普奥其れ自身を襲ふところのもの出で来れり。即ち千八百四十八年二月に於て、佛國は更に其王ル井、フ井リッブを放逐して、再び共和政體を布告するに至れり。於此乎日耳曼全國は再び千八百三十年の如き影響を繰り返し、サキソニー、ウイールテンベルヒ、バヴァリア 其他の諸小國に於ても、更に其王を讓位せしめ、若くは其主を變更せしめ、復又た立憲國と爲さしむるものありしが、今回はいよく普奥の兩國にまで其影響を及ぼすに至れり、而して奥國のみの方面を云へば左の如し。

千八百四十八年三月の三日、匈牙利の下院は重大なる決議を爲したり、而して此決議に憑れば、常に匈牙利に於けるのみならず、奥帝國全體に立憲政を施き、所謂責任内閣を起さしむべしと云ふに在りて、之を激成せしめたる匈牙利の政治家コスートの議論の如きは、實に絶大の魔力を帯びしかば、之

を聞きたる奥都ウヰンナの自由派は感激すること太甚しく、左らば来る十三日に開會せらる、『下部奥國』の議會に於て、其請願を奥帝に奉らしむべしと聲言し、此日自由派、殊に自由を叫ぶ學生の集ること非常にして、不穩の形勢漸く現はれ、其一び議會が兎角に緩慢に陥らんとするを聞くや、此等の群集は終に會場に闖入し、重なる議員を擁しつゝ、直ちに帝宮に進行し、彼等が所謂『人民の請求なるもの』を呈出したり。奥帝フェルデナンド一世は此時恐れて出でず、メテルニヒを始め其他閣臣等は之れに會ふて其旨を領し、其の大に讓歩すべきを誓ひしも、最早や之を鎮定し得べくもあらず、群集の數は次第に増加し、今は市街の全面に充ち、パリーの市民に倣ふて市案を起し、已に戦闘の準備に着手し、折柄繰り出したる近衛兵は、試みに數發を放て之を脅かせしに、市民は皆悉く之れと格闘せんと欲するの氣勢を示し、最早や如何ともする能はざるに至りしかば、此際まで頑強に其説を維持したるメテルニヒも流石に往生して其職を辭し、逃げて英國に去るに至れり。左れば今まで『メテルニヒを斃せよ』

タルニヒを斃せよ」と叫び居たる群集も、之を聞て大に其意を慰め、次で埃帝は立憲政體を起し、<sup>ネッショム、アッセンブリー</sup>全國大會を開き、出版の自由を許し、凡て人民の要求を容るべきことを布告するや、一先づ鎮定に歸したりき、時に千八百四十八年三月十五日なり。

恚て埃帝はメタルニヒの辭職を聴き届け、直ちに官民和衷的の新内閣を組織せしめたり。然れども事は容易に收まるべくもあらず、當時最も勢力を有したる學生は別に學生隊なるものを組織して威を示し、更に中央委員なるものを設けて、頻りに政府に新法律の發布を迫り、到底新内閣の意に従ふべくもあらず。因て之を解散せしめんとしたるに、更に暴舉に出でんとせしかば、臆病なる埃帝は家族と共に出奔してインスブルークに遁るに至れり、時に千八百四十八年五月十七日なり。

新内閣は其頭を失へり、然れども躊躇すべきにあらざれば、一方には帝に還御を請ひ、一方にはいよゝゝ學生隊を解散せしめんとせしに、更にウヰンナの市

中に市寨の建設せられたるを見しかば、いよゝゝ之れに歩を譲り、今回は革命黨中より保安委員なるを挙げ、敵をして敵を制せしむるの策に出でしかば、政治は暫時革命黨の手に落ちぬ。

左るほどに伊太利に於ても、革命の氣運同じく熟して、復た埃の支配を受くべくもあらず。ロンバルデー、ヴェニス、ミランの小邦に暴動起りたり、而かも個は伊太利の部に詳記すべきを以て、更に他の方面を云へば、此際プラーグに於て「スラヴ」人の謀反的大集會開かれたり。之れより先きボヘミア及びモラヴィア等の「スラヴ」人種は、從來より蒙れる壓制に向ふて哀訴を埃帝に呈したり、而して其の容られざるを見るや、千八百四十八年の六月、いよゝゝプラーグに大集會を催し、獨立政府を打建てることを企て、事や殆んどウヰンナに類せんとせり。然るにプラーグ市鎮臺の將たるウインゲンシュユグラツツは最初巧みに之を操縦し置き、機を見て大兵を縦ち、一舉直ちに之を壓倒するの策に出でしかば、プラーグの自由派は畢に其志を得ずして解散せられぬ。



於此乎フラーグの平定を見たる王黨は、俄かに勇氣を恢復し、靜かに時の來るを待ちしに、其後立憲政體に従ひて、ウヰンナに開かれたる國會は、兎角に騷擾を極むるのみにて、國民が期待したる如き功績を擧ぐることは能はず、即ち此際佛國と同じく勞働者の爲めに國立工場を設けしも、莫大の國庫費を支出して懶惰者を養ふに過ぎず。小作人を地主より解放して、大に平民を擁護するの途に出でしも、此等無教育の平民に國政を委すべくもあらず。内閣は内閣、國會は國會、勞働者は勞働者と、各々互に勝手を陳べ、如何に終局すべきか定かならず。兎角する中、匈牙利の革命運動は愈々益々烈くなり(匈牙利の事は後條に在り)、政府は鎮壓の爲めにウヰンナの或る軍隊に出陣を命せしに、其命に應ぜざるものあるのみか、暴徒の一群は、自由の爲めに戦へる匈牙利を征するは、我等の主義に協はずと聲言し、遂に陸軍省を襲ひて其大臣ラツールを殺すに至り、其混雜云ふべからず。於此乎埃帝は王黨と共にモラビアに至り、當時フラーグの自由黨を滅して盛名を擧げたるウインデシユグラツに委するに埃國

全軍の元帥を以てし、速かにウヰンナに赴て、目下の騷擾を鎮定すべきを命じたり。此時ウインデシユグラツは答へて云へり、「此れ我が一指の勞のみ」と、而して直ちにウインナに出陣したり。ウヰンナの革命黨も亦た直ちに戦闘の準備を爲し、市城に立て籠りて待ち構へ、斯くて一週間餘の激戦となりしが、市民兵は畢にウインデシユグラツの率ゆる訓練兵の敵にはあらず、結局は大敗し、潰走し、ウヰンナはいよいよ官軍の手に落ち、國民隊の將メッセンハウセル、學生隊の元帥ベム、議員主領ブルーム、其他革命黨の重立は、或は亡げ、或は放たれ、或は殺され、ウヰンナ政府は、更に武斷政治と成り果てたり、時に千八百四十八年十月なり。

右の如くにしてウインデシユグラツがウヰンナの革命黨を陥るゝや、新内閣は直ちにシユワルツエンベルヒを主領として組織せられしが、此シユワルツエンベルヒは實に一代の猛斷家にして、最早や些少の讓歩だも爲すべくもあらず、先づ悠柔不斷なる埃帝フェルデナンド一世を廢せざるべからずと爲し、

自ら帝に迫りて之を勸告せしに、フエルデナンドは、已に世事に歴き果て居たることゝて、直ちに悦んで之を容れ、千八百四十八年の十二月終に其位を退き、其弟の子なるフランシス、ジヨセフ當時十八歳をして其後を繼がしめぬ、是れ即ち現今の奥帝なり。次でシュワルツエンベルヒは國會を解散せり。當時奥國の國會はクレムシールに於て開かれ、依然として自由主義を把持し、已に許されたる憲法を制定し、何點までも其志を遂げんと意氣卷き居たりき。然れどもシュワルツエンベルヒは帝政主義を以て之れに對し、彼等が再び暴動に出でんとするを見るや、斷然之を解散し、其再會を期せしめず。又た直ちに大兵を匈牙利に差し向け、之れをも征服し去りたりき。

### 匈牙利の革命

匈牙利は古來より奥國に隸屬するものとは云へ、自ら別個の政府を擁し、國會を開き、屢次失敗せしも、屢次獨立を企て居たるものとす。左れば此際豈安閑としてあるべけんや、前條に見たる如く千八百四十八年二月に於ける佛國の大革命を聞くや、ウヰンナよりも先づ前に騒ぎ立ちたるは

此國なりき。當時コーストは其大辯を以て國會を動かし、將に事を擧げんとせしに、我れに先だちてウヰンナ革命黨の已に勝利を得るに至りければ、直ちに若干の革命黨と共にウヰンナに馳せ參せしに、ウヰンナの革命黨は勿論、奥帝までも亦た善く之を遇し、何んの難澁もなく其要求を容れ、匈牙利に授くるに責任内閣の組織、撰擧權の擴張、收税の公平、宗教の自由及び出版の自由等を以てせり。左れば匈牙利の革命黨は大勝利を得て國に歸りしに、匈牙利に在る奥帝の代理者ステフェン太公は、先づ其旨を領し、匈牙利に人望ある伯爵バチアニーを總理大臣と爲し、コーストを大藏大臣となし、新に内閣を組織せしめ、更に議會を開て新法律を議せしめたり、時に千八百四十八年七月なり。

然るに匈牙利の議會は、他國と同じく上下兩院に分れ居りしが、此間に於ける兩者の衝突も尠からず。又た下院のみに於ても、種々の黨派を生じて、議論容易に決せざる中、俄かに外敵の襲ふところとなれり。之れより先き匈牙利領内

なるクロアチア及びスラヴオニア等は、常に匈牙利より離れ去らんと欲するの志ありしが、此際埃國政府に向ふて、匈牙利と同じく、彼等自らも一個の政府を有するものとなり、改めて埃國の下に屬せんことを願ひ出でしかば、埃國政府は、喜んで之れを許し、之れをして匈牙利に當らしめんと企てたり。因て當時クロアチアの總督たるエラチックは、かねて匈牙利人を喜び居らざるところより、兵六萬を率ひて、匈牙利の政府を襲はんとて、匈都ベストを望んで攻め來れり。匈牙利政府は驚けり、然れども半時も猶豫すべきにあらざれば、直ちにコストの案を以て二十萬の軍隊を召集するに決し、之を埃帝に奏上せり。然るに埃帝の之を許さざりしかば、一百人の代議士は大に怒りてウヰンナに赴き、帝に迫りて其意を詰問せしも要領を得ず。兎角する中エラチックは已にドレーヴを横ぎり來りたれば、太守ステフェンは之れに赴て調停の勞を取りしも、其効を奏せず、因て其儘埃國に遁げ歸り、總理大臣パチアエーは其職を辭し、遂にコスト一人の天下となれり。

埃國政府は何點までも、匈牙利を壓せんと工み居たりき。然れども其處に大に智慮を用ひ、此際將軍ランベルヒを派し、之れに匈牙利とクロアチアとの兩國兵を總ぶるの權を與へ、併せて此兩國を調和せしめんとの名義の下に、之をベストに遣はしたり。然れども匈牙利人は其險謀を悟て之を受けず、國會も政府も之を拒みしかば、彼れは空しく歸らんとして、終に暴徒の爲めに殺されたり。左れば之を聞きたる埃國政府はいよゝゝ其覆面を擺脫し去り、匈牙利議會を解散し、其國內に軍政を施く旨を宣告し、今や攻め來らんとするエラチックを太守に補し、併て匈牙利軍の總督となすべき旨を匈牙利政府に通告したり。然れども已にコストを戴て獨立の政府を起したる匈牙利は、固より之に従ふべくもあらず、直ちに大軍を擧げ來りて、右のエラチックをグイレンヅに撃ちしに、エラチックは大敗し、其儘ウヰンナに亡げ去り、匈牙利は大得意となり、埃國には驚愕を來す中、爰にウインヂシユグラツがウヰンナに打ち入り、シユワルツエンベルヒが宰相に任せられ、フェルデナンド一世が位を退き、いよ

〱 奥帝國內には斷然たる處置を施すことに決せしかば、匈牙利に於ても、此に形勢の一變を見るに至れり。

即ち千八百四十八年の十二月に於て、例の將軍ウインヂシユグラッツは大軍を率ひて匈牙利に向ひ、向ふところ敵なく、其翌月即ち千八百四十九年の一月には、已にベストを占領し、其政府と國會とを都外に驅逐せり。尤も事は之れにて終結を告げざりし、匈牙利の勇將ゴルギー、クロラプカ及び波蘭より來れるベム等善く戦ひ、今やウインヂシユグラッツに次で來れる奥の諸將を邀撃し、之をしてウインヂシユグラッツと通せしめず、ゴルギーの如きは遂にベストを逆襲して、大にウインヂシユグラッツを破り、ウインヂシユグラッツは召還せられて、他將軍之れに代りたり。愾<sup>か</sup>くてベストは遂に匈牙利人の手に戻り、國會も政府も再び此に移るに至れり。於此乎匈牙利人の歡喜や譬ふるにものなく、政府はいよ〱奥國と分離したることを天下に布告し、且つ政體を改めて共和國となし、コストを以て大統領と爲すに至れり。然るに之れ亦た

暫時の夢なりき。奥國は匈牙利の獨立を以て己のが國家の死活問題と爲したれば、固より之を忍ぶべくもあらず、因て此際醜くも露國に向ふて援助を請へり。露國は又た當時露領なる波蘭人が切りと匈牙利の獨立に同情を有し、竊かに之れに兵士を送りたるを知りたれば、匈が首尾よく獨立せば、其次は波蘭が起つべしと推察し、直ちに奥國の請を容れて、大軍を匈牙利に送るに至れり。

千八百四十九年の七月、露軍八萬はバスキューウイッナに率ひられて、ダニユープの上流より侵入し來れり。匈將ゴルギーは進んで之れに當らんとせしが、奥將ハイナンが之を遮りたるを以て、之れと兵を交へしも其志を得ず、空しくハイナンをしてベストを占領せしむるに至らしめぬ。匈牙利の政府と國會とはアラットに移れり、而して更に又た戰畧を議し、一時デンビンスキーをして軍を督せしめしも、其人にあらざりしを以て、ベムを以て之れに代らしめ、之をして露軍に當らしめしも、亦た敗れ、今はゴルギーの力のみを待ち居たりき。然るにゴルギーはかねてコスト等と其意見の合はざりしを以て、聊

か不平を抱き居りしが、此際アラットに歸り來りしも、活潑なる運動を取らず、畢に露軍を撃つべくヴィラゴスに赴きしが、果敢々々しき戦を爲さずして露軍に降るの途に出でぬ。埃國はゴルギーが己のが軍に降らずして露軍に降りしを憤り、益々匈牙利軍を所在に撃破せり。因てコスト及び其他外交官將校等は皆國を棄て、土耳其に遁げ、後は埃國の殘忍なる復讐的行爲に委ね去りぬ。乃ち埃國政府は此際匈牙利を全く征服國の如くに取扱ひ、殺るるもの、放逐せらるるもの、入牢せらるるもの、其財産を沒收せらるるもの其數を知らず、而して憲法は廢せられ、人民の權利は剝がれ去りぬ、時に千八百四十九年九月なりき。

### 普王の文治

普王ウイリアム三世の善王たりしことは、已に之を

前條に述べたり。尤も彼れは那翁を退治する爲めに露帝を其兄に戴き、那翁の退治後はメテルニヒの政策に同して、専ら埃の後へに従ふ傾きありしも、彼れは此際内部の發達を怠らざりき。彼れは露國が武のみを以て其國を維持せんと

勉め、埃が外交のみを以て天下を操縦せんと志し、畢竟其國の發達に眼光を注がざりしに引き代へ、此際一國富強の基礎を置きぬ。

先づ國民教育を奨励し、之を組織的に發達せしめ、後日歐洲諸國の模範物たらしめ、高等教育に於ては、其政治上の意見を吐く上に制限を置きしも、其發達には大奨励を與へ、諸處に新大學を設立したり。又た宗教に於ても其信仰に自由を許し、從來ルーテル派とカールヴイン派即ち改革派と相軋り居たるを調和し、更に「福音一致教會」なるものを起して、可成右二教會のものを之れに混せしめ、宗派軋轢の弊害を減せしめたり。其商工業に於て之を云ふときには、此のウイリアム三世時代に於て、所謂「關稅同盟」なるものを起したるなり。當時日耳曼の諸邦は皆各々特別の關稅を有し、來因河畔より來るものゝみにても、二十七ヶ處の關稅を経ざるべからず、而して稅則に相違あり、競争に弊害ありて、日耳曼の商業を妨ぐるに尠少にあらず、因て普國は之が主となり、埃を除くの外、盡く日耳曼の諸邦を聯合し、同一の稅則によりて、日耳曼國の物産を保

護し、爲めに日耳曼國內を富し得たること非常なりき。斯くて此商業に伴ふ爲めに商業的・海軍なるものを起せしが、此物次第に生長して遂に近世に於ける日耳曼海軍の基礎たるに至れり。加之此商業的計畫の爲めに、當時發明せられたる汽船と鐵道を輸入し來り、益々繁榮を圖りたれば、此れが盟主たる普王は、陰然日耳曼に於ける霸王となり、後日耳曼の天下を握るべき概を示したりき。又た普王は此際管に武事と商工業とに、其の意を注ぎたるのみに止まらず、凡そ男子は皆兵たるべきの制を定め、且つ之を訓練したれば、武國としても亦た大に恐るべきものとなりぬ。左れば埃は之を視て嫉妬の念禁じ難く、從來よりの警戒をいよ／＼嚴にし、機を見て之を挫かんと思ひ居たりしに、憐むべし此際メテルニヒの政策に誤られ、其民を抑ゆるのみを知て、其民を發達せしむる途を知らざりしかば、畢に其志を遂ぐる能はず、却ていよ／＼帝冠を普王の爲めに奪はるゝに至りぬ。

### 普國の革命

千八百四十年ウイリアム三世は死せり、而して其子フレ

德里ック、ウイリアム四世位に即きしが、此四世たるや是れ亦た其父よりも猶ほ賢なりと思はれたりき。左れば父王は宗教、教育、商工業等に大發達の途を開きしも、唯り政治の方面に於ては、勉めて壓制の方針に出でしに拘はらず、此四世は即位後直ちに國事犯者を赦し、前年より禁錮若くは放逐の刑に處せられ居たる大學の教授を召還し、日耳曼聯邦會議にも自由の政策を採るべく勸告し、何れも當時の人物たるを表明しぬ。

然るに閣臣に於て此自由の方針に不同意を唱ふるものあり、諫言を呈するものあり、兎角する中、諸方に於ける革命的の氣運いよ／＼激成し來り、普國の人民も嘗て前王が那翁時代に誓ひたる立憲政治を實行せよと迫りて止まず。因て千八百四十七年の四月、上下の兩院を開くに至りしが、此時發布せられたる憲法なるものは、極めて議會の權利に制限を置き、之れに立法權を授けず、單に其意見を徴するのみに止りしかば、人民は之を見て呆然たる間もなく、更に開會に當りて、王の宣言を聞けば、王は猶ほ神權説を維持する如く思はれ、其語

中に『從來の關係を變じて立憲なるものに改むる能はず』云々とありしかば、代議士等は最早や之に忍ぶ能はず、其後種々なる議案出でしも、徒らに衝突のみの繼續にて終り、畢に六月に至るや此國會は大混雜の中に解散せらるゝに至れり。王と議會とは右の如く已に衝突して更に調和の途あらず、何れの處にか大破裂あらんと氣遣はれ居りしに、明けて千八百四十八年の二月に至るや、例の佛國革命あり、而して匈牙利及びリッヂナに於て、人民の大奮興を見しかば、普都伯林に於ても亦た之れに感激せられ、自由黨は最早や躊躇すべきにあらずと爲し、普王に立憲的自由の要求を爲すもの引きも切らず。終に三月十八日に及んで、いよゝゝ否やの返答を國王に求めんとて、人民の總代は王宮さして出で行きしに、王は確かに普國の國會を來る四月の二日に開くべきを約し、且つ日耳曼の各邦に立憲的國會を開かすべく盡力すべしと宣言せり。因て人民は之を聞くや、王宮の前に群集して歡呼せり。然るに王宮の前に兵士の整立するあるを見て、人民は今に於て兵士を見るの要なしと叫び、依然散會すべくも見へざれ

ば、右の兵士は之を脅さんとして、之れに數發の銃を放ちしに、戦闘は忽ち此に始まり、伯林の市街はみるゝ中に、市寨を以て充たさるゝに至り。戦闘は十九日の朝まで繼續せり。普王は事の已に容易ならざるに至れるを以て、いよゝゝ市民に讓歩すべく決し、先づ兵士を市外に退かしめ、次で人民に好意ある新内閣を組織し、猶ほも人民を悦ばせんとて、此際一の宣言書を發し、『普王は今日より常に普國人民の王たるのみならず、又た日耳曼の指導者となり、以て日耳曼全體を救済すべし』と告げ、俄かに日耳曼國の國旗なる金色、白色、黒色の旗を捧げしめつゝ、自ら市中を廻りしに、人民は其希望を歡迎して、いづれも萬歳を唱へざるなく、日耳曼帝萬歳と大呼せり。

千八百四十八年五月、いよゝゝ立憲議會は開かれたり、而して新憲法案は呈出せられ、從來人民が要求したる自由は大抵皆之れに許され、事態極めて都合よく見へし。然るに議員の中各種の黨派を混すると、激烈論を爲すあり、温和論を爲すあり、其激烈派の如きは、王が已に大讓歩したるに關はらず、

猶且つ之を窮追せんと欲し、憲法に「神の恩寵に依りて立てられたる王」云々であるを「人民の意志に依りて立てられたる王」と改めんと主張し、且つ去る二月兵士の爲めに殺らされたる市民を以て、「善く國家の爲めに盡したるもの」と決議せんことを主張し、騷擾容易に収まるべくも見へず、斯くて此の議會が温和黨の爲めに制せられんとするを見るや、過激派の黨與は議會を圍んで之を威嚇し、且つ伯林の武庫を襲ふて亂暴せり、而して當時市民護衛兵なるものを組織したるも、此等を鎮むるに足らざりき。

於此乎普王は最早や非常手段を取らざるべからずと決心し、伯林を去てポッツダムに退き、王黨と密かに時を待ちしに、此際内閣と議會とは屢々衝突し、二三内閣の更迭ありしが、事未だ和衷に到らず。兎角する中、此年の十月となり、奥都ウヰンナにウインデンシュラッツ起りて、已に革命黨を掃盪し去りたりと傳ふるや、左らば我等も亦た行るべしとて、普王は當時有名なる王黨の將軍 ブランデンブルグをして新内閣を組織せしめたり。王の意志は已に人民に

讀まれたり。議會は大警戒を加へ、王に向ふて抗議せり、而かも王は最早や聽くべくもあらず、直ちに議會に停會を命じ、伯林より之をブランデンブルグに移すべく命じ、議會が更に抗議する中、普王の命を受けたるウランゲル將軍は大兵を引きながら、伯林に入り來り、直ちに議會に解散を命じ、更に市民護衛兵に解隊を命じ、更に改めて王定の憲法を布告せしに、從來の混雜と騷擾とに稍々壓き疲れ居たる人民は、復た大抵抗を試むべくもあらず、伯林の革命はウヰンナと同じく終に泣寐入りとなりけり、時に千八百四十八年十二月なり。

### 日耳曼中央政府の設立

日耳曼國內が將に革命的の騷動に襲はれんとするを見て、奥普の兩國は夙に日耳曼全國の大會を開き、此蜂起的運動を防遏せんことを決議したり。然るに間もなく、此兩國其れ自身が、其革命騷動に襲はれしを以て、事聊か齟齬せしも、其の所謂る日耳曼大會なるものは、いよ／＼千八百四十八年の五月フランクフォートに於て開かれぬ。此時日耳曼國內なる三十六個の聯邦は各々代議士を出して、此際如何に日耳曼國內を統治



すべきかを議したりしに、兎も角も過般ウキンナの大會に於て定めたる如き漠然たる議會政治にては、事を統る難しと爲し、此に中央政府なるものを打建つべしと決議せり。於此乎多年メタルニヒ等に反對し、自由の味方と評判せられたる塊の太公シヨンは推されて政府の行政總裁となり、直ちに其内閣を形造し、同じく塊人にて有名なるシユメルリングを其總理に撰定せり。左れば普は其中央權を塊に奪はれたるを喜ばず、従つて此中央政府に重きを置かず、動もすれば之を蹂躪せんと欲するの傾きあり。加之爰に中央政府を置きたるも、如何にして其權威を振ひ得べきや、往時には同盟聯邦議會に於て、種々の自由を日耳曼國內の市民に與へながら、俄かにカル、スバットの決議によりて、此の自由を奪はれたることありき。されば塊普等が再び武力を恃んで、從來の如き壓制の處置を爲すことあらば、此中央政府は如何にして之に抗し得るや覺東なし。故に先づ第一は此中央政府に附するに兵力を以てせざるべからずと主張するものありき。然れども如何にして其兵力を附し得べきや、塊殊に今や不

平を抱くところの普は固より同意すべくもあらず、已に同意せずとせば、如何にして之に抗し得べきや、是れ此大會に於ける第一の問題なりき。斯くて其事の未だ定まらざる中に、先づ全國民權の確立を決せよと促すものあり、又た其極端論者に至りては、此際寧ろ日耳曼の各邦を解體して、爰に北米合衆國の如きものを起すべしと主張するものもありて、其混雜名狀すべからず。於此乎開會後已に四ヶ月を経過したるも、未だ何事をも議定する能はざる中、此にフランクフォートに於て一大騒動を醸すに至りぬ、而して今之を叙すれば左の如し。

日耳曼國內なるシユレヌウイッグ、ホルスタイン公國は、嘗て丁抹に割取せられ、當時猶ほ其管轄内に在りしが、此際獨立を企て、今や設立せられたる中央政府に向ふて援助を請へり。因て中央政府は之を普國に依頼し、普國は彼れ有名なるウランゲル將軍を遣はして、其地より丁抹兵を逐はしめしに、ウランゲルは勝に乗じて丁抹の本國にまで侵入せしかば、爰に露英の干涉とな

り、普王は止むなくウランゲルを丁抹より引き揚げしめ、千八百四十八年の八月に及んで、終に普國と丁抹との間に七ヶ月の休戦を約するに至れり。蓋し中央政府には關係なく、單に普國とのみ條約を結びたるは、當時丁抹が中央政府の存在を認めざるに由るなり。於此乎今やフランクフォートに集れる各邦の議員は普の專擅を嘗るあり、丁抹の失敬を怒るありて、議會之れが爲めに沸騰し、此條約に承認を與ふべきか否やに就て討議せしに、一時承認を與へざることに決せしも、左らば中央政府は、普に依頼せずして如何に丁抹と戦ひ得るや、中央政府には一兵だも有せざるなり、因て最後の決議に於ては、いよ／＼之れに承認を與ふべく定まりしかば、敗れたる急激黨は議會を去て戰鬪の準備に着手し、フランクフォートに市寨を起して戦ひたるも、普國兵の爲めに撃退せられ、次で諸處に轉戦し、更にバーデンに於て大抵抗を試みんとせしも其功を奏せず、其首領等は或は捕はれ、或は戦死し、或は米國に亡げ去り、全國議會に於ける革命黨は、空しく此に終焉を告げ、中央政府も竟に何事をも爲す能はず、徒ら

に虚名を擁して立つに至れり。

### 中央政府の末路

フランクフォートに於ける全國大會も暫

く其議事を中止し居りしが、其後更に之を開きしに、爰に二大問題現はれたり。一は奥國の領地にて他人種に屬するもの、即ち匈牙利なる東洋人種及びボヘミヤ、モラヴィア等のスラヴ人種までも此日耳曼聯合内に加ふべきや、否や、二は此聯合體の覇者を定むること是れなりき。而して之を換言すれば、正しく奥普の競争問題たりしなり。奥に左袒するものは奥の半面の此聯合より除かるるを喜ばず、奥も亦た飽くまで之れに不承知を唱へたり。於此乎議會に大激論を醸す中、中央政府のシュメルリング其職を辭し、ガゼルンの之れに代るや、彼れは斷然奥を聯合より省くの議を呈して、いよ／＼議會の協賛を得たり。斯くて更に覇者の問題に移りしに、議會は此際思ひ切つたる決議を爲し、寧ろ普王をして直ちに日耳曼皇帝の位に即かしむべしと定め、使者を派して之を普王に告知したり。普王は此告知を喜びたり、而して直ちに之を承諾せんと欲した

りき。然れども當時奥の之を肯んせるあり、サクソニー、ハノヴェル、ウイ  
 テンベルヒ等の不同意を唱る由を聞きたれば、止むなく之を辭退し去りたり。  
 左れば中央政府并に其議會は自今如何に進退すべきか、奥は已に敵氣を呈し來  
 り、普は躊躇して議會の決議を容れざるに至り、此兩國の援助を失へる中央政  
 府若くは議會は、其勢力を振ふに由なく、各邦の議員は其畢に何事をも爲す能  
 はざるを見て散解し去り、總裁ジョンも其職を辭し、ガゲルン等も其内閣を去  
 り、今や残れる一百人餘の議員は、其位置をウイテルテンベルヒのスト  
 トガルトに移し、ウイテルテンベルヒの朝廷に兵士の保護を請ひしも、管に其  
 請を斥けられしのみならず、畢に退去を命せられ、折角堂々と組織せられたる  
 中央政府と其議會も、今は雲散霧消するの止むを得ざるに至りぬ、時に千八百  
 四十九年七月なり。

### 奥普の競争

奥普ごもに一時は革命黨の爲めに、其都城をさへ占領せら  
 れ、殆んど危殆に瀕せしも、今や前述の如き順序を経て、更に其勢力を恢復す

るに至りしかば、又もや其競争を始めたり。普王はフランクフォートの大會  
 が好意を以て捧げたる帝冠を拒めり、而かも是れ其真意にあらず。因て今回は  
 己のが組織したる大會より其帝冠を戴かんと欲し、先づサクソニーとハノヴェ  
 ルとを誘ふて、爰に三王同盟を形成し、次で千八百五十年の三月エルフルトに  
 全國大會を開き、爰に帝國憲法なるものを議定せんと發議せり。因て各邦の代  
 議士は直ちに之れに集會し、普國を覇者としたる日耳曼統一の制を見んと欲せ  
 しに、之を聞きたる奥國は「是れ我れを蔑如するの太甚しきものなり」と爲し、  
 更に別にフランクフォートに大會を催し、日耳曼の帝權は固より奥家に屬すべ  
 きものなれば、普をして之を横奪せしむるを許さずと宣言せり。於此乎奥に  
 黨するものあり、普に與みするものありしが、形勢數次變轉し、結局はバヴァ  
 リア、ウイテルテンベルヒ、ハノヴェル、サクソニー等の大國は更に奥に加盟し  
 去り、殘餘の小邦のみ來りて普に結ぶに至りしかば、普相ブランデンブルグの  
 外交は、奥相シュワルツエンベルヒの外交に及ばずして失敗し、一時奥をして

普を壓せしむるに至りたりき。しかのみせしや加之當時撰舉侯國ヘッセに於ては、政府と人民との間に衝突起り、將に革命を見るあらんとせしとき、政府黨は奥に向ふて加勢を請ひ、人民黨は普に向ふて援助を求め、奥普とも孰れも之れに軍隊を差し向け、事態いよゝく接迫せしに、かねて奥の爲めに匈牙利を撃ちたる露帝が、更に奥の爲めに運動し、もしも普にして譲らざるば、露軍が直ちに普に向ふて下るべしと威嚇せしかば、普が稍々不首尾に見ゆる中、首相ブランデンブルグ死し、腰の弱きマントイフェル之れに代り、終に普はヘッセに干渉せざるべしと誓て其局を結び、更にシユレスウイッグ、ホルスタイン事件と日耳曼國の大會とに關しても、亦た奥に譲與すべく餘儀なくせしめられぬ。即ちシユレスウイッグ、ホルスタインと普とは、其後休戦の期満ちて更に戦端を開き居りしが、此際奥の干渉によりシユレスウイッグ、ホルスタインの革命黨をして武器を取めしめ、竟に此國民をして再び丁抹の羈絆に繋がしむるに至りぬ。更に又た今回は奥普一致して、否、寧ろ普が奥に率ひられて、日耳曼大會を

ドレスデンに開きしが、此際種々の議案と討論とある中、又々露帝が、奥の爲めに運動して、普が嘗て結びたる聯邦を解かしめ、諸事皆自由に反對する政策を諸邦に採らしむることに決議せしめ、奥露をして其意のあるところを恣にせしむるに至り、普の聲望は瞬く間に大下落を來し、彼れシユワルツェンベルヒは、メテルニヒの再來したるものにあらずやとまで疑はしむるに至りぬ、時に千八百五十一年の三月なりき。

### ウイリアム一世の出現

然に更に爰に普國をして其頭を擡げしめ、奥をして漸々と其前に退かしむるの舞臺となりぬ。其は奥を援けたる露國は、其後英佛とクリミア戦争を惹起して、復た普に當り得べくもあらず。兎角する中、普王フレデリック、ウイリアム病んで起つ能はず、千八百五十七年に於て、其弟のウイリアム之れが攝政となりしかば、爰に政界に一變動を見るべく期待せられしに、彼れは攝政となるや、直ちにマントイフェル内閣を辭職せしめたり、而して是れ實に國民の喜ぶところなりき。何んとなればマントイフェルの如き

弱腰が外交を左右する間は、普國をして益々國權を失墜せしむるのみなればなり。斯くて國民は此攝政が猶ほ何事を爲すべきかと窺ふ中に、佛國史に見たる如く、奥とサルデニアと衝突し、佛の那翁三世がサルデニアを援けて奥に當りしとき、奥が此ウイリアムに出兵を請ひしに斥けて容れず、尙ほ之れに加ふるに、「奥もし我れに出陣を欲せば、我れをして奥普及び日耳曼聯邦の總大將たらしむべし」と聲言せしかば、奥は固より之を許すべくもあらずして止みぬ。左れば今や奥は此ウイリアムの志望を洞觀して油斷せず、國民は更に歡呼して、此ウイリアムを祝する中、千八百六十一年に至り、フレデリック、ウイリアム死したるを以て、此ウイリアムはいよいよウイリアム一世として王位に即きぬ。

### ウイリアム一世の軍備擴張

ウイリアム一世は考へぬ、若夫れ眞に奥を打撃せんと欲せば、必ず兵力に依らざるべからずと、因て舊時よりの習慣に従ふて、擧國皆兵の制を厲行し、俄かに軍備擴張案を呈出せり。於此乎當時民主黨に支配せられ居たる議會は、其軍費を出すことに躊躇したれども、ウイ

リアムは之を肯くべくもあらず、事によらば其議會を蹂躪してまでも、猶ほ其志を貫かんと欲するの意志を示し、大膽にも此際專制君主の口吻を洩し、「夫れ普國の王は其王冠を神より戴くものなれば神聖なるもの也、卿等議員は只だ其忠告者として集會し居るものなり」と公言せり。

### ビスマルク出づ

人民は對外硬の政策を喜びぬ、然れども其議會を蹂躪せらるゝを喜ばず、於此乎此際王が議會を解散したるも、更に多く民黨を再撰し、敢て政府に譲らんとはせず、因て内閣は議會と王との間に介りて其職を辭せしかば、此時ウイリアムはオット、フオン、ビスマルクをパリーの公使より拔擢して之を首相の坐に就かしめぬ、時に千八百六十二年なり。然るに此のビスマルクは是れ即ち十九世紀中の大怪物にして、容貌獅子に似たりと雖ども、其露國に公使となりて露帝に接し、又たパリーに公使となりて佛帝に會するや、極めて溫柔的令色を装ひ、巧みに宮廷の寵物となり、普國の爲めに種々の外交を成就せしものなれば、此際も亦た最初のほどは巧みに議會に媚び、可

成程かに政府の陸軍案を通過せしめんと圖りしが、終に其議會の譲らざるを見るや、所謂る鐵血政治を施き始め、爾來數年間議會なくして政府の意志を斷行せり。

### 更に埃普の大競争

左らば埃國は普國が頑強なる新王を戴きしのみならず、更に此大怪物たるビスマルクを内閣の首坐に戴きしを見て、其心平かならず。因て此際更に日耳曼各邦の聯合を確かむる必要ありと爲し、千八百六十三年の八月、フランクフォートに日耳曼各邦の君主を集め、今回は各邦に於ける上下兩院の代表者をも之れに混じ、其行政權は埃の統轄の下に於ける諸君主の指揮に委すべしと布告せり。然れども普は固より之を肯くべくもあらず、且つ其他にも此布告を拒絶せしものありしかば、埃は終に日耳曼統轄の目的を達すること能はず。斯くて埃普互に日耳曼の各邦に遊説を試み、其外交手腕を振ひ、必死となりて其主權を爭ふ中、爰に丁抹との開戦となりぬ。

### 丁抹との開戦

前條に見たる如く、シュレスウイック、ホルスタイン

に就ては、最初日耳曼全國が之を丁抹の手より分離せしめんと望み、普が兵力を以て此志を遂行せんとせしとき、英露の干渉するところとなりて休戦し、其後更に此の二公國と丁抹との開戦となりしとき、埃は當時弱腰の政治家マントイフェルに支配せられ居たる普國を誘ひ、終に此二公國の革命黨を壓して、再び之を丁抹に屬せしめたりき。然るに千八百六十三年に於て、丁抹の王フレデリック七世死し、グルックスブルグの親王クリスチアンが、クリスチアン九世として其後を嗣ぐや、彼れは自由に反對するものとして人氣極めてよろしからず、殊に此際シュレスウイックの公國を變じて、之を丁抹の本國に合せしめしかば、日耳曼の人民は大に之を憤り、兎も角もホルスタインをして又たシュレスウイックの運命に陥らしむる勿れと呼びつゝ、日耳曼大會の決議を経て、サキソニーとハノヴェルとより兵士一萬餘をホルスタインに入り込ませしめたり。時に埃はかねて此二公國の民を丁抹に引き渡したることゝて、此事件には極めて不熱心なりしがども、普はかねての行掛りもあり、且つ此際己の勢力を此

地方に張らんと欲して大に之れに干渉せんと志ざせしが、かねて英との條約に由り、フレデリック七世の後には、クリスチアン九世を迎へることに同意し居れば、英の意向如何を憚りて、暫く活動を見合せ居りしに、當時英が最早や丁抹事件に干渉せざるべきことを突き止め得たれば、直ちに大兵を繰り出すべく用意せり。左れば奥は前述の如くに冷淡なりしも、今や普が大兵を繰り出すに至らば、普の爲めに先んせられて、奥の聲望を日耳曼國中に墜すの虞れあれば、是れ亦た直ちに普と結んで丁抹に當るべく決議せり。於此乎奥普兩國の大軍は、丁抹がシュレスウィッグを合すことに反對なりとの口實の下に進發し、みるゝ中にシュレスウィッグを占領し、忽ち丁抹軍との衝突となりたり。

吾人は爰に戰記を詳にするの時を有せず、由て畧して之を云は、當時普は親王フレデリック、ナヤールレス及び元帥ウランゲルを派し、奥は將軍ガベレンツを遣はし、兵數四萬五千餘を繰り出せしが、奥は丁將をダンテウエルクの堡塞に逐ひ、次で之をオーグエルシーに破りたり。又た普は有名

なるツールベルの堡壘を圍みて之を攻めしが、堅くして抜けず、遂に之を陥れしも七十人の將校と千二百人の兵士を失ひたり。斯くて此戰敗の爲めに、丁抹の士氣は大に沮喪し、フレデリシアを放棄して退却し、海軍も亦た普の爲めに破ぶられ、終に英の仲裁を以て一時休戦することなりぬ、時に千八百六十四年五月なりき。然るに其後媾和の條約が丁抹を満足せしむるに至らざりしかば、六月再び開戦し、這回は普が更に兵を増し、リッテンフェルトの下にアルセン島にまで押し寄せ、更に奥と合して連戦連勝を奏しつゝ、ジャットランドの全面を占領せしかば、丁抹も終に大に屈し、いよゝウ井ンナの條約によりて、シュレスウィッグ、ホルスタイン及びローエンブルグを奥普に引き渡すことに定り、之れに調印したるは、其翌年即ち六十五年の十月なりき。

### いよゝウ井ンナの大戦

丁抹を撃て大獲物を爲せしが、之を奥普の間に分つに於て、更に兩國間の喧嘩となりぬ。普は種々の理由を並べて此地を普の監督の下に置かんとし、奥は此等の公國を獨立せしめて、之を日耳曼聯邦

の中に加へ、自ら之を主宰せんと企てたり。斯くて此談判屢々不調に陥りしが、結局は奥がホルスタインを取り、普がシユレスウィツグを取り、ローエンベルグは普に屬すると同時に、普が賠金を奥に與ふること、定まりしに、元來此の競争たるや、此等公國の上にはあらず、兩國が覇權を日耳曼國に争ふ點にありければ、一時は右の如く收まりしも、其後互に油断せず、先づ睨み合ひの姿となりて月日を送りぬ。

然るに此時に當りて絶代の辯物たるビスマルクは、竊かに奥國の情勢を探り、且つ其軍隊の如何を調査せしに、其一舉して奥國に打勝つべき見込十分立ちたりければ、參謀長モルトケ等と謀し合せ、いよ／＼戦備に着手せり。左れば奥も亦た之を見るや最早や開戦の避くべからざるを知り、かねて己れに好意を表し居るサキソニー、バヅアリア、ウイルテンベルヒ、ダルムスタット等を招き、之れに戦備を爲すべきを命じ、普は又た之に對して日耳曼の各邦に檄を飛ばし、『此に強固なる日耳曼同盟國を起さざるべからず、今日の狀態にては到

底波蘭の運命に陥らざるを得ず』とて、かねて日耳曼國民が望める一大帝國の出現の必要を勞勞し、暗に己れに同すべきを説き、更に伊太利のサルデニアに交渉して、此際背後より奥を衝くべきを以てし、佛の那翁には何れ報酬を爲すべしと約して、其の中立を求め置き、いよ／＼腕を撫して待ち構へたり。普國の人民はビスマルクの餘りに大膽なる志望に向ふて危険を感じ、寧ろ平和を望むべきを公言せり、而かも勝算の立ちたるビスマルクは空吹く風として之を聴き流しぬ。

戦備は双方に整はれたり、左れば口實を設くること難からず、シユレスウィツグ、ホルスタイン問題は猶ほ種々の關係あるを以て、奥普の間に分ち難きものあり。因て奥は更に之を合して其主にオーガスチンブルグの公子を戴かんと申出し、普は之を諾する代に『此公國に屬する總ての軍隊を普に合せしめ、且つ遞信事務等は、皆之を普の管轄に屬せしむべし』と主張せり。左れば固より調和の出來べくもあらず、因て奥は己のが組織したる日耳曼聯邦大會に此議を呈出せ



んとせしに、普は從來のものは奥の爲めに亂されたりと主張し、更に奥を除て別に日耳曼聯邦同盟なるものを起し、其憲法をも發布せり。於此乎メクレンブルグ、ブレメン、ブランズウィック、ウアイマル等の諸邦は、普と共に進退し、ハノヴェル、ヘッセ、サクソニー、バヴァリア、ウイラテンベルヒ等は奥に黨し、戦端は爰に開かれぬ、時に千八百六十六年六月なり。

奥は北軍をオルムツに置き、ベチデック將軍をして、兵數二十四萬に將たらしめ、南軍をヴェニスに置き、太公アルベルトをして之れに將たらしめぬ、是れ主として伊太利方面に備ふるなり。斯くて普は各方に王軍を進めしが、普王ウイリアム一世は親ら大元帥として中軍を率ひ、之れに有名なるモルトケを従へ、皇太子フレデリック、ウイリアム并に親王ナヤールスは第一及び第二軍に將とし、兵數凡そ三十萬を繰り出したり。愆くて第一は先づサクソニーとハノヴェルとヘッセ等の諸邦に通告し、速に兵を収めて、普の組織したる日耳曼聯邦同盟に加入すべしと傳へしに、彼等が之を聽かざるより、直ち

に之に兵を向けしに、彼等は一支へもなく潰敗し、また普國練兵の敵にはあらず。斯くていよいよ奥普間の戦闘は六月の廿二日より始まり、普軍はボヘミアに在る奥の北軍を襲ひ、勝敗相交ゆる中、遂に奥を撃退して、之をサドワに圍みたり。此時奥普ともに其全軍を擧げて戦ひしとなれば、天下分目の關原たりしなり、親王チャーレスは最初九萬有餘の兵を率て之を攻めたり、而かも撃退せられて其効を奏せず、然るに皇太子が率ゆる十一萬の大兵が纏て之れに加りて戦ひしかば、奥は善く拒ぎ、善く戦ひ、或る方面の如きは三千人の中其三百人に減するまで抗抵せしも、畢に普の敵にあらず、サドワは陥られ、三萬二千人の死傷者を出しつゝ、オルムツの方面に退却し、普は僅かに九十人の死傷者を出せるのみなりき、而かも是れ怪しむに足らず、當時普は窈かに元込銃なるものを發明し居り、之を持って向ひしとゆえ、斯くも大勝利を得たるなりき。サドワの大敗を見て、奥は最早や普に敵する能はずと觀念し、奥帝フランシス、ジヨセフは佛國に仲裁を依頼し、事成就せばヴェネシアを佛に割くべく約束し、

佛は之を試みぬ、而かも普と伊とは之を肯かざりき、蓋しヴェネシアは戦勝の後、後に普が伊に與へんと前約したるものなればなり。斯くて戦は繼續せしが、サドワの大戦以後は、奥の士氣頗に沮喪して、また普軍を支ゆべくもあらず、普は普王を擁しつゝ、直ちにウヰンナを望んで攻め寄せ、己にブルンにまで到着し、其大本營をニコルスブルグに置き、今にも奥都を陥れんとするの氣勢を示し、更に其一軍を匈牙利に馳せ、是れ亦た其都を陥るべく進みたり。於此乎更に佛の手を経て休戦となり、結局ブラーグの條約により左の條件を定むるに至りぬ、時に八月二十三日なり。

- (一) 奥は自今日耳曼聯邦同盟内より退き、普をして之を組織せしむること。  
 (二) シュレスウイッグ、ホルスタインの權利は、全く普に讓ること、但し自由投票によりてシュレスウイッグが丁抹に合せんと望む旨を表せば、其請を入るゝこと。

(三) 二千萬ターレルの償金を拂ふこと。

(四) ヴェニスは之を伊太利に割讓すること。

此外此戦勝の結果として、普はハノヴェル、ヘッセ、ナッサウ、フランクフォルト等の地を己れに合せたるにより、莫大の土地と人口とを得、且つ其他の諸邦を己のが權下に服せしめ、久しく己れに敵氣を含み居たる南方日耳曼をして、外戦の時攻守同盟と云はんよりも、寧ろ其兵權を普に委ねしむるに至りたれば、普は此戦によりて日耳曼に帝たる九分の土臺を造りしなり。

伊太利の方面に於ては更に之を伊太利史に見るべきも、此際サルデニアの王エドマヌエル自ら兵に將として奥のアルベルトに當り、最初のはどは敗績せしも、普がウヰンナに迫り、奥が其方面に兵を分つに至るや、漸次に勝利を得、海軍に於ても奥の制するところとなりしも、普奥の勝敗已に決する上は、最早や如何ともする能はず、奥はヴェニスを伊太利に與へ、伊太利半嶋に於ける其壓力を喪ひ去れり。

此際大馬鹿を見たるは佛の三世那翁なりき。ビスマルクはかねて那翁に報酬を

約したりき。然れども其那翁が餘りに狡猾にして窃かに埃よりグエニスを得て埃普間の仲裁を試みんとしたるを知るや、逸早く佛を出し抜きて、埃と直接に平和條約を結び去り、那翁をして所謂の鼻を明かさしめしかば、那翁大に頷むところあり、此際前約を履んで日耳曼の或地を得んとを申出でたり。然れどもピスマルクは之を聴かず、嚴格に佛の公使に告げ、「是れ意外の事なり、普は日耳曼の地を寸毫たりとも割くこと能はず、強てとあらば複雑なる問題に入るべし」と警告したり、而して此れぞ是れ直ちに來る普佛戦争の地下なりき。ア、國家の盛衰するゆえんのもの、何んぞ其れ奇なるや。普の如きは幾度か隆替消長し來り、其ウイリアム一世とピスマルクの出づる當時には、殆んど埃の爲めに壓倒せられ居たるなりき。然に此二人の政治舞臺に出現するや否や、局面は頓に一變し來り、みるゝ天下を提げて起つに至れり、而して其の民黨を壓し國會を蹂躪して銖血政治を施せしが爲めに、大なる反對と大なる不評判とを一時國民間に起したりとは云へ、這回埃を打撃して殆んど日耳曼統一の業を

爲し遂げたるを見るや、國民は歡喜して彼れの政策を迎ふるに至りぬ、英雄の出現は何れの國にも必要と知るべし。

### 埃普戦争後の普國

フレデリック大王を戴て其國を興せし普國も、其

後那翁の時に半滅亡の運命に會ひ、更に舊時に復して那翁を逐ひしも、前述の如く、フレデリック、ウイリアム四世の末路には、埃が一代の豪物、シユワルツエンベルヒを其宰相に戴けるに關はらず、我れは弱腰のマントイフェルに支配せられしが爲めに、國運日々に削落し、今や再び埃の下に屬せんとしたりし也。然るにウイリアム一世立ち、オット、フォン、ピスマルクの國政を執るに至るや、俄然として其面目を改め、遂に埃を回めて日耳曼に於ける霸權を確立するに至りぬ、其隆替實に驚くべきものあるにあらずや。左れば埃普戦争後に起りたる第一の事件は露佛の嫉妬なりき。佛の那翁三世は前述の如く比公に其要求を峻拒せられて啣むところありしが、露も亦た此際黙止すべくもあらず、嘗て比公が聖ピートルスボルグに公使たりしとき、巧みに

露帝の歡心を買ひ置きしかば、此埃普戰爭に干渉せざりしも、戦後に及んで、比公が何んの報酬をも爲さざるを見るや、今や普に合せられたる諸邦君主を招て、之を己れが保護の下に置き、以て他日普を襲ふの用意を爲さんと計畫せり。因て比公は又た當時露の強大を喜ばざる埃佛の兩國を利用して、直ちに露の外交を挫き去りしとは云へ、此時より普が露佛の間に介りて苦心し始めたるものあるを知らざるべからず。

次ぎには内治の確立なり、已に埃を回まし去るや、普は直ちに從來埃の下に形成せられ居たる「日耳曼聯邦同盟」を解き、更にメイン河を界として「北日耳曼聯邦同盟」なるものを起し、己れ之を率て、爰に憲法を制定せしが、其憲法たるや、内政に於ては各邦の随意に任すべきも、凡そ外交の掛引、領事の事務、遞信事業及び陸軍の總督は全く普に委し、貨幣、度量、土地、税關等の制度は皆之を一様に爲し、更に南方日耳曼と結びて、爰に攻守同盟を形成せり。左らば普は未だ日耳曼の帝位には登る能はざりしも、已に其土臺を据へ得たりと云ふ

べきなり。於此乎比公が鐵血政治を宣言して以來、露々として其壓制を嘗り居たる人民も、今や大に柔き來りて、又た之を責むべくもあらず、却て比公の手腕に驚き、從來政府が爲したる非立憲的の行動をも許し、莫大なる出費に事後承諾を與へしかば、普王も亦た之れに準じて、從來嚴罰に處したる國事犯者を赦し、上下凱旋の聲を挙げぬ。

### ビスマルクとモルトケ

吾人は此埃普戰爭に於て多くの人物を見た

りと雖ども、未だビスマルクとモルトケに及ぶものはあらず。ビスマルクの志望はかねてより普王をして日耳曼皇帝たらしむるに在りき、然れども其の之を成就せんには、是非とも兵力に依らざるべからず、於此乎陸軍に於ける傑物を探り居りしに、即ちモルトケに於て之を見たり。モルトケは普人にあらず、メクレンブルグの産なり。最初丁抹の兵學校に學び、轉じて普の陸軍に仕へ、其後歐洲各國を歴遊して、總て陸軍の制度を取り調べ、歸り來りて普國參謀本部の長となるや、事務周到、畫策緻密にして、萬事に違算あることなく、其潛む

や九地の下に潜むも、其動くや忽ち九天の上に動く底の手腕を有し、實に當時普國の陸軍をして、天下に敵なからしめしものは、單にモルトケの力に依る。

左らば吾人は是非とも此二人を記憶して以て當時の普國を觀察せざるべからず。

### 普佛戰爭

普佛戰爭は千八百六十六年なり、而して普佛戰爭は千八百七

十年なり。然らば其間僅かに三年のみ。普は最初丁抹を挫き、次で埃を挫き、更に進んで佛を挫かんと企てたるなり、否、之を挫き得たりしなり、何んぞ其意氣の壯んなるや。目下日本の勃興を以て普に比するものあり、如何にも十九世紀間に於ては、其勃興の速かにして大なる、蓋し此二國に比すべきものあらざるべし。普佛戰爭の來歴と其成功に就ては、既に之を佛國史に述べ置けり、故に爰に之を復せず。

### 普王日耳曼皇帝となる

普軍のバリを圍んで將に之を陥れんとす

るときに當り、北日耳曼同盟の諸聯邦は、各々代表者を柏林に出して國會を開き、いよ／＼普王ウイリアム一世を日耳曼皇帝の位に即かしむべく議決せり。

於此乎今やヴェルサイユに在りてパリを攻撃しつゝありしウイリアム一世は、大砲の雷轟を聞きつゝ、諸王、諸公、諸臣下の前に於て、即位の式を執行せり、時に千八百七十一年一月の十八日なり。

### 埃國の方面

顧みれば埃國も亦た普國の如く、大消長を免かれざりしも、

其間大に趣を異にするものなくんばあらず。那翁一世の爲めに半滅亡に會ひしは普と同じきも、其後メテルニヒを戴くや、普國とは大に其形勢を異にし、管に日耳曼國のみならず、實に歐洲大陸を支配し得たるなりき、而して其革命の騒亂に會ひしも、是れ亦た亦た普國に同じきも、普國の其後衰へたるに引き代へ、埃は更に舊時の帝權を恢復しぬ。其れ然り然れども一たび普にウイリアム一世とビスマルクの現はるゝや、又々一轉して其國力を失墜し、みる／＼第二等國の仲間に落下せり。尤も埃帝フランシス、ジョセフが善君なるが故に、其普に破らるゝや、大に顧みるところあり、今回はいよ／＼人民の請求を容れ、斷然立憲の政に改め、撰擧權の如きは、殆んど各戸に行き渡るものとなり、匈牙

利に大自由を免し、其人民の普通選挙に憑るものより立法部を設立し、之をし  
も 埃帝を戴ける獨立國と爲さしめたりき。是れ大賞賛に値すべく、多年人民を  
壓したるの罪を償ひ得べしと謂ふべきなり。



### 第六章

## 露國史

ニコラス一世 (自千八百二十五年 至千八百五十五年)

- 兵士の大謀叛
- 波斯を割く
- 波蘭の謀叛
- 匈牙利の謀叛
- ニコラス一世の内治
- 希臘問題の落著
- 更に露土戦争
- 土耳其との秘密條約
- クリミア戦争

アレキサンダル一世には子なかりき、因て順序として其弟にて當時波蘭の總督  
たるコンスタンチンを擧げんとせしも應せざるより、更に其次ぎの弟なるニコ

ラスの世となりしなり。

### 兵士の大謀叛

ニコラスの即位するや、先づ第一に出會したるは、軍人の謀反なりき。之れより先き、那翁戦争の爲めに、歐洲の中原に出でたる將校等は、他國民の自由を得て、露國民の自由を得ざるを憤慨し居りしが、此際大膽にも謀反せり。コンスタンチンは好んで位を其弟に譲りしなり、然るに右の謀叛軍人は、名をコンスタンチンに藉り、我等はコンスタンチンを戴かんと欲するも、ニコラスを戴くを好まずと稱し、先づモスコの軍團より破裂せり、而して其主張するところは立憲國と爲さんとするにてありき。然るに兵士等の多數は立憲政體の何物たるを解せず、『コンスタチユシア』とはコンスタンチンの妻なりと解し居たりと云ふほどなれば、固より物に成るべくもあらず、直ちにニコラスの近衛兵に砲撃せられて潰亂したるも可笑かりし。

### 希臘問題の落着

英國史中に見たる如く、アレキサンダルは希臘獨立の爲めに英と合して之を援けたりき。然れども元來自由を好まざるものと成り

果て居たる彼れは、其後果敢々々しく力を盡さず、ニコラスも亦た其方針なりしが、此際英のカンニングはウエルリントン公を露に派し、巧みに露に説き、いよゝゝ英露相合して希臘の獨立を確むるに至りき、而して此事たるや、英露の聯合を不可能と斷言したる頃のメテルニヒを愕かしぬ。

### 波斯を割く

露國は如何なる帝王の下に在るも、曾て侵畧を止めたることあらず。千八百二十八年、更に波斯を撃て之を破り、エレヴァンとナクシグアンの二地を割き、二千萬ルーブルの償金を取りたり。

### 更に露土戦争

此戦争に就ては土耳其史に譲るべし、而かも一言にて之を括せば、希臘の獨立戦争後、露國は猶ほ土耳其と其衝突を繼續し居りしが、千八百二十九年戦争の後、アドリアノーブルにまで進み、茲に平和條約を結び、種々の條件の下に、爾來露國は土耳其領内に在る希臘教信者を保護するの權利を得、又た黒海を自由に使用し、ダニユープ河畔に在る諸國家の上に保護權を擴張したるなりき。

## 波蘭の謀叛

那翁時代に於て見たる如く、波蘭は其後ワルサウの太公國となり、ウヰンナの大會後、露の主權の下に、立憲的半獨立の國體を保ち居りしが、常に露を離れて、舊時の獨立國に復さんとの希望を絶たず。當時露が土耳其と兵を交へたる隙に乗じて、旗を翻さんごせしも、果さざりしに、千八百三十年、佛が彼の革命を起したるに屬まされ、いよく事を擧げたりき、而して今其順序を云は、最初學生の一團體は、不意に起つて露國より來れる彼の總督コンスタンチンを執へんごして之を逸し、計畫稍々齟齬するに至りしも、直ちに那翁時代の名將クロビキヤをして、謀反軍の總督指揮官たらしめ、兵九萬を集めて波蘭に在る露軍を逐はしめたり。斯くて間もなく共和國を組織し、ナヤートルリスギヤを大統領に擧げ、使を露帝ニコラスに派し、平和に協商を遂げしめんとせり。然るにニコラスは大に怒り、協商とは奇怪なり、汝等は降服か否らすんば滅盡あるのみごて、千八百三十一年二月デービッチに兵十二萬を授けて進撃し來り、グロローフに於て大戰ありしが、波兵は最早や彼

れの敵にあらず、遊說者を英佛に送りて救援を求めたるも得る能はず、兎角する中、露軍中に虎疫起りてデービッチもコンスタンチンも之れが爲めに斃れ、波軍も亦た能く諸處に轉戦したるも功をせず、終に千八百三十一年の九月、露將パスケウイツナの下にワルサウを陥られ、其翌年二月いよく露の一州ご布告せられ、折角起したる獨立の義兵も、半獨立國より滅亡ごなり、立憲より專制の下に移るに至りぬ。

## 土耳其の秘密條約

千八百三十四年土耳其に於て内亂あり、エデプトの謀反が、土國を危地に陥れたるを以て、土帝は救援を露帝に求めたり。因てニコラスは此れに應じて之を助け、事の終るや、土と秘密條約を結び、若しも露國が他國より攻撃せらるゝ節は、ダーダネルス海峽を閉し、露の敵國をして黒海に入らしめざるべしと誓はしめぬ(土耳其史參照)。

## 匈牙利の謀反

匈牙利の謀反に就ては之を日耳曼史中に述べ置けり、故に今之を贅せず。然れども當時ニコラスが塊を援けて、匈牙利の獨立軍を撃



ちたるとは、實に謂はれなきことにて、露國は之れが爲めに自由を好む歐洲人民の擯斥を受け、其嫌厭を招きたれば、其後クリミヤ戦争の時に至るも、孰れ一人露國を最負するものはあらざりき。

### クリミヤ戦争

此戦争こそニコラス一世が企てたる最大事件にてありたるなり、而してニコラスは此戦争の失敗を聞くや、セバストポールの陥落に先ち、千八百五十五年の三月失望の餘りに死し去りたるなり、(クリミヤの戦記は英國史に在り)。

### ニコラス一世の内治

ニコラスは祖先傳來の遺志を受けて、外交と外戦とに其精力を費し、畢に失敗して死し去りたるものとす。然れども其間内治に意を傾けざりしにあらず、彼れは法律を改善し、法廷の怠慢を責め、大に人民の爲めに盡さしめ、又た貿易を重んじ商人を保護するの策を取り、ドンとヴオルガ間に於ける大渠を通じ、法律學校、實業學校、師範學校等をも起したりき。

## アレキサンダル二世

(自千八百五十五年  
至千八百八十一年)

- アレキサンダル二世の人物
- 更に波蘭の謀叛
- 更に土耳其の大戦
- 戦争の状況
- アレクザナの役
- 伯林會議
- アレキサンダルの遺囑
- 記者の短評

- 農奴の解放
- 領土の擴張
- 英露間の外交
- オスマン、パシヤの出現
- 英露將に戦はんことす
- 諸英雄の會合
- 陰無黨の毒

アレキサンダル二世はニコラス一世の長子なり、位に即く時三十七歳、父の傲岸なるに似ず、極めて人情深く且つ物解りのする人物なりければ、クリミヤの戦争も前條英國史中に見たる如く、可成速かに結局を着け、而して専ら内治の改革に従事したりき。彼れは即位後直ちに大恩恵を民に施さんと欲し、委員を

設けて調査しつゝありしが、千八百六十一年に及んで、愈々之を漸行し、其帝國內に在る「地着の奴隸」凡そ二千五百萬二千三百萬と書する歴史もあり人を解放し、當時の米國と相應じて、人道の上に一大發展を來さしめぬ。彼れは又た父帝が武力にのみ信頼りて大失敗を重ねたるに懲り、治國の方針をして文明的に向はしめ、教育に力を盡し、英國并に支那とも通商條約を結び、猶太人には從來無きところの自由を許し、只管良君たらんことを勉めたりき。然れどもニコラス一世が多年壓迫し來れる政策は、畢に其反響を受くることを免かれず、更に波蘭に謀反黨の起るを見たり。

### 波蘭の謀反

波蘭は前代に於て已に露國の一郡國と爲されたりき。然れども其人民が獨立を希望するの念願は、猶ほ毫も減せざりしに、千八百六十三年に於て、更に謀反の旗を翻しぬ。千八百六十一年比より、波蘭に謀反の氣運あるを察し、アレキサンダルは勉めて之を慰撫するの策を取り、從來露人を以て司らしめたる諸官衙を波蘭人の手に歸せしめ、地方に於ても人民の撰舉によ

りて官吏を擧げしめ、果ては「波蘭評議院」なるものを置き、波蘭人ウイロボルスキを擧げて其首とならしめ、行政上に大讓歩を與へぬ。然れども波蘭人の念願は専ら獨立に在りしを以て、毫も之れに満足せず、益々謀反の氣象を増長せしむるのみなりし。於此乎露帝は止むなく斷然たる處置を取るに決し、其弟コンスタンチンを太守として之れに差し向け、謀反人と目指さるゝ重なるものを捕へ、國事犯の嫌疑あるものを兵士に徴し、騒亂の根底を一掃せんとせしに、ワルサウの市民は竟に公然武器を執て謀反せり、時に千八百六十三年なり。然るに波蘭人の武器たるや、木鎗若くは鈍刀其多數を占め、兵士は嘗て戰に習はざるものなれば、固より露の訓練兵に敵すべくもあらず、山野に出沒して抵抗せしも、瞬く間に潰亂せしめられぬ。リミアニアに於てもワルサウと共に謀反の旗を擧げぬ、而かも亦た將軍ムラヴィエフの爲めに手痛く懲罰せられ、慘狀を極めて降参せり。然則波蘭は畢に如何なりしが、露帝アレキサンダールは其後ミルチンの策を用ひ、比較的謀反心強き貴族の地を割きて、

比較的謀反心なき平民に之を與へ、一方に壓力を加へて、一方に善意を示し、大體に於ては全く之を露化し、言語に於ても露語を用ひしめ、之れに露國教育を施き、國民としては波蘭に終焉を告げしむるに至りぬ。

### 領土の擴張

露國は何れの時代といへども、領土の擴張を廢したること

はあらず。左らば此時代に於ても其重なるものを擧ぐれば、先づ古加索地方に在りて未だ服せざりしサルカシヤの會長シアマイルを捕へて之を降し、逾々土耳其斯坦を征服して去て、英領印度を距る五百英里の處にまで進み、東の方は支那が英佛と葛藤を生じつゝある間に乘じて、黒龍江の左岸一帯の地を得、其東端に浦港を開くに至れり。

### 更に土耳其の大戦

アレキサンダル二世の時代に於て語るべきは、

内地に於て彼れが二千五百萬の「農奴」を解放したること、更に土耳其と大戦を惹き起したることを以て冠とす。

千八百七十年普佛戦争の開くるや、露は之れに干渉することを敢てせざりき。

蓋し之れより先き、普の癖物ビスマルクが巧みにアレキサンダル帝を籠絡し、他日普が他國と葛藤を生ずることあるも、能く中立を守らんことを約し、左る代りに他日露が他國と事を生ずるときには、普が同じく好意の中立を保つか、若くは援助を與ふべき旨を以てしたるに由る。左れば普佛の戦争中に於て、露はかねてクリミヤ役に制限せられたる黒海の自由を恢復する旨を宣言し、能く此の戦亂を利用したりき。然れども最早や此れのみにては満足せず、再び土耳其を狙ひつゝありしに、爰に其の端緒を見出しぬ。

千八百七十五年回教徒たる土耳其人が、基督教徒たるモンテネグロ人を殺せしより、此二國の間に交渉ありしが、事の未だ落着せざる中、土領ヘルゼヴグイナに於て、徴税の不平より一揆起りしかば、モンテネグロとセルヴイア人は之を援けて土に當れり。左れば塊は禍の其國に及ばんことを恐れ、獨り露に謀りて、土廷に迫り、以來基督教徒を虐待せざること、ヘルゼヴグイナに公平なる徴税を爲すべきを以てせり。土廷は之を承知せり、因て三國は

ヘルゼゴヴィナに兵を取むべきを以てせしも、土廷を信せずして従はず。兎角  
 する中、サロニカに於ける普佛の領事が、土耳其人の爲めに暗殺せらるゝと  
 となりたれば、右三國は更に英佛伊を誘ふて伯林に會議を開き、所謂伯林覺  
 書を制定し、いよゝゝ土耳其を脅迫せん爲めに、各々軍艦をサロニカに繰り出  
 したり。尤も英國は從來の政策に由り、此際土を割くの恐れありとて超然たり  
 き。然に當時土の内部に於ても正に大混亂を極むる最中にて、土帝アブヅル  
 アジーズは廢せられ、次で殺され、ムラッド五世位に即き、宰相ミドハ  
 ット権力を振ひ居りしが、更にブルガリアに一揆の起りたるを以て、今回は  
 容赦なく、大兵を送りて之を鎮壓し、剩へ大虐殺を行へり。左らばモンテネ  
 グロもセルヴィアも、いよゝゝ之れに激し、公然土に向て宣戦を布告し、事益々  
 重大となれり。

千八百七十六年に於て、土帝ムラッド五世は廢せられて、其弟アブヅル、ハ  
 ミッド二世 其後を嗣ぎぬ。然れども事態は之れが爲めに變せざりき。於此

乎露廷は開戦の終に避くべからざるを知り、おさゝゝ軍備に怠りなかりしが、  
 左るにても成るべく外交に由りて利益を占めんと欲し、土國在留の公使 イグ  
 ナチーフをして其手腕を振はしめ、爰にコンスタンチノールの大會となり  
 ぬ。此大會には各國の公使皆集りぬ、而して決したるところは、爾來土領に憲  
 法を施き、基督教徒も回教徒も皆同一様の權利を有し、ブルガリア、ボスニア、  
 ヘルゼゴヴィナ等に基督教徒の知事を置き、其指名には諸列強の贊同を待つべ  
 き事等なりし。然るに土廷は悉く之れに同意を表したるも、其列強より内治に  
 干渉せらるゝことを厭ひ、自任以て之れに當らんと主張したるを以て、列強の  
 公使は其手を引き、更に英露の協商となりて再度土帝に迫りたるも、土は畢に  
 之を容れざりき。蓋し英は露に同意するが如く見せしも、其實時の宰相ヂスレ  
 リーは、露の失敗せんことを祈り、一日公會に於て暗に露の土を侵すを傍觀  
 せざるべしと諷したることありしかば、土はクリミヤの時に鑑み、窃かに英の  
 助力を得べしと信じたるに由る。

千八百七十七年の四月、露はいよ／＼外交に敗れたるを以て、直ちに土に向ふて宣戦を布告し、アレキサンダルの弟たる太公ニコラスは第一軍に將とし、逸疾くもダニユープ河を指して進み行けり。吾人は爰に詳細なる戦記を省くべし、而かも概して之を云はゞ、露は一撃の下に土を撃破し得べしと信じ、長驅して土境に迫りたり、而して土は其豫期の如くに撃破せられ、バルカン山を越へられ、ダニユープも渡られ、到るところに逐ひ卷られぬ。然るに中途に及んで土が更に弱將を交迭せしめて抵抗するや、露軍も一時は大に難み、將軍グー・ルコーの如きはバルカン山に逐ひ戻され、將に大軍と共に降参の運命に會はされんとせり。加之土は此際オスマン、バシヤなる有名なる將軍を出しぬ、オスマン、バシヤはルーメリアの一小地プレヅナに城壁を築きぬ、然り僅々數日の間に之を築きぬ、而かも彼れが之れに據て、露軍を遮ざりしときには、露軍は一步も之を越へて進むこと能はざりき。最初露軍は此城壁を眺めて、是れ一擧手の勞のみと爲し、一氣呵成に陥れんとせり、而かも直ちに撃退せられ、

剩へ逆襲に遇ひ、其本陣たるローグアッツを棄て、潰走せり、因て更に勇を鼓して再び二回目の攻撃を爲しぬ、而も今回は以前よりもヨリ大なる撃退を受け、殆んど其兵の五分の一を失へり。露軍はオスマン、バシヤの人物と其戦術に驚けり、於此乎露帝に親征を請ひ、更に大軍を以て第三回の攻撃を試みぬ。此時露帝は自ら陣頭に出で來れり、而して有名なる露將スコベレフが十三師團の兵を率ひ、全力を擧げて戦ひしなり、而かもオスマン、バシヤは僅々五萬に足らぬ小勢を以て敢然として能く之れに對し、更に撃て其の一万二千を斃し、逐ふて之を潰走せしめぬ。露軍は最早や懲り果てぬ、因てかのセバストポールの役に大功を現はしたる名將トッドレーベンを招てプレヅナ攻圍軍の將たらしめしに、トッドレーベンは來りて之れを見るや、是れ急に陥るべきものにあらず、宜しく餓餓に瀕せしめよとて、其後重圍の中に置いて糧道を絶ちしに、オスマン、バシヤも之れには堪へ得ず、終に千八百七十七年の十二月、即ち籠城せしより五ヶ月の末に於て、突出を企てしが、最早や城を出づるに於ては、其怪腕

を振ふに由なく、將校と合せて約四万人なる土軍は、此際白旗を掲ぐるに至りぬ。

露軍己にブレヅナを陥れたれば、前途最早や遮るものあらず、露帝は安心して聖ピートルスホルグに還り、グールコーはツフヒアを占領し、他の軍はシブカを陥れ、更にマリツアの谷にスリーマンを破り、いよいよアドリアノーブルに進入せり。又た他方に於てはマクタル、バシヤ敗れ、カールスは取られ、アルメニアは荒され、エルゼルム堡臺も陥れたれば、最早や土耳其には希望を維ぐべきもの無きに至れり。

因て土耳其は英國に向ふて平和の調停を請へり。ビクトリアは露國の意向を問へり、露國は好意的に答へしも、談判は直接土政府と爲さんことを望む旨を以てせり。土廷の使者はアドリアノーブルなる露國の本營に赴き、兎も角も太公ニコラスと休戦の條約を爲しぬ。英國はかねて露帝に通牒して、此際中立を守るべきも、若しも露にして埃及に手を着くるとあるか、若くはコンスタンチノー

ブルを占領することあらば、我中立は破らるべきを以てせり、而して露は之を諾したりき。然るに當時在土英國公使より電報あり曰く、今や露は休戦を約したるに關はらず、益々其兵を進めつゝ、己にコンスタンチノーブルより三十英里附近にまで押し寄せ、將にコンスタンチノーブルを呑まんとす。於此乎英國は一時に沸騰し始めたり、而して艦隊は直ちにコンスタンチノーブルに進發すべく命せられたり。露は又た之れに對して用意を爲し、英艦にしてボスボラスに現はれなば、直ちに水雷を以て襲ふべく命じ、英艦にしてコンスタンチノーブルに達せば、露軍は直ちに此地を占領すべしと言明せり。因て英國は暫時艦隊に命じてマルモラ海に停留せしむる中、露國はサン、ステファノに於て土廷と平和の假條約を結べり、時に千八百七十八年三月なり。サン、ステファノの條約は露國にどりて極めて好都合のものなりき、即ちモンテネグロとセルヴィアとは土の地を加へられてルーマニアと共に獨立し、廣大なる土領ブルガリアは土の貢地たることは從來の如きも、自今全く基督教

徒たる君主を戴き、行政も軍隊も獨立することとなり、土耳其は三億ルーブルの償金を露に拂ひ、亞細亞に在るアルメニアの大部分を割き、ドープルーシアを譲ると同時に、露が之れを以てルーマニアのベサラビアと交換すること定め、二年間五万の兵をブルガリアに駐むる事等にてありき。

左らば英國は如何にか黙すべき、是れ露國をしてダニユーブより黒海の沿岸に跨る一帶の地方を其勢力範圍に置かしむるものなりとて故障を入れぬ、而して奥も其國境を接することゝて、驚愕すること太甚しく、終にビスマルクの仲裁により、幾多の交渉と混雜を経て後、いよゝゝ有名なる伯林の大會議となりぬ、時に千八百七十八年の六月なり。

伯林會議に於ては普の宰相ビスマルク之れが會主たりき、而して英よりは當代の辯物ヂスレリー―出で、露よりは一世の豪物ゴルチヤコフ來り、實に偉觀を極めたりき。露は謂へらく普は必ず大に露の肩を持つべしと、蓋し曩時に普が佛を撃ちしとき、好意的中立を守り、尙かにビスマルクと約したる

ことあれば也。然るにビスマルクは已に佛を挫き去りて、復た他に懼るゝものなきを以て、今となりては寧ろ露の強大を來すを喜ばず、因て曖昧の態度を取れり、而してヂスレリー―はかねての公言もあることなれば、此際頑として讓る色を見せざりき。即ち英は之れより先き露と畧々内相談を遂げ居りしも、其相談に移るや否や、俄かに強硬の態度に出でしかば、ゴルチヤコフは最早や忍ぶ能はず、憤然起つて地圖を捲き、將に露都に歸らんとせり、左ればヂスレリーも亦た其威嚇に乗らず、更に威嚇を彼れに試み、忽ち特別列車を用意せしめて、是れ亦だ英京に歸らんと擬し、ビスマルクは此間に處して、舌を出しつゝ、仲停の勞を取るなど、孰れも辯物同志の怪劇を見せしが、結局は何れの國も露の強大を喜ばざりしに由り、サンステファアの條約は、可憐無情に大修正を加へられ、つまり露は外交に大敗を招きぬ、而して今其伯林會議に於て定められたる條約を摘せば、

ブルガリアの地はダニユーブとバルカンの間に限られ、他は東ルーマニアとな

りて依然土に屬し、之れに基督教信徒の知事を置くことゝなり。ボスニアとヘルゼゴヴィナとは奥に讓られ、アビラスとセサリーは希臘に讓られ、露は單にバツームとカールスとアルダハンと其他の小地を取り、ブルガリアに置く軍隊は九ヶ月に限られ、ルーマニアよりも一年以内に退くべく議定せられ、英は其勞に報ひられて、土より地中海なる樞要の名島サイブラスを得ることゝなりたるなり、而して結局露は戦場に三十餘萬人を失ひたるほどの報酬を得ること能はざりしなり。

### アレキサンダルの遭難

嗟呼露國皇室の不幸なる何ぞ夫れ太甚しきや、而て其外交が巧妙の如く見へて、其實拙劣なる、苟も露史を讀む者は、常に此二者を感ぜざる能はず。露國皇帝にして暗殺に會ひ毒殺に會ひたるものは比々之をビートル大帝以來に見たり、而して凶手に狙はれざるものは殆んど罕れなり。其外交に至りても、前帝ニコラスはクリミア戰役を惹き起して失望の餘りに死し、今やアレキサンダルは自由と文事を以て其治を始めたるも、又た

ニコラスの蹤を逐ふて失敗せしのみか、畢に凶手に斃るゝに至れり。

之れより先き露に虚無黨なるものあり、社會黨の一派也、元は單に人類の同胞主義を唱へ、階級を打破するを目的と爲し、敢て暴行に出るとなかりしが、露政府が之を壓し、之を捕へ、之を流し、其書を焼き、其財産を沒収し、極めて殘酷なる處置に出でしかば、虚無黨は最早や政府を目して無用の長物となし、否、寧ろ有害物となし、帝王の如きは其狙的となるに至れり。然るに千八百七十八年露土の戦亂が未だ其局を結ばざる中に、虚無黨の一女にヴエラ、ザスリツクなる者あり、有名なる暴政家ツレポフを殺せしを始めとし、俄かに虚無黨が殺氣を帯び來り、其間に暗殺黨を出すに至れり。アレキサンダルは比較的善君なりし、而して國家を文明に導かんと志を有せしことは明瞭なりき。然れども露國の國是たるや、百事帝王の意志に依ることなれば、其虚無黨の虐せらるゝを見るや、一に罪を皇帝に歸し、之を殺さずんば措かじとの氣概を彼等の間に吹き入れたり。於此乎千八百八十一年の三月、アレキサンダルが觀兵式



より歸り來り、今やビートルスボルグなるカタリン溝の堤を過ぎるを待受け、爆裂彈を其雪車に投じ、遂に之を殺すに至れり、而て其凶行者を執へしに、其中に元とビートルスボルグの知事たりしもの、娘もありしと云ふ、以て此虚無黨が意外の處にまで其勢力を及ぼしつゝありしを知るべきなり。嗟呼吾人は爰に至りて、本書なる露國史を閉ぢざるを得ず、顧みれば何んたる奇怪の國柄ぞや、其大を爲したる上より云は、僅々二十六ヶ年なるアレキサンダルの時代に於てすら、露國は支那より黒龍江一帶の地を取り、東洋に出づるの口を開き、其外交に失敗したりしとは云へ、更に土耳其の方面に領地を増し、全く土耳其斯坦を吞了してアフガニスタンに及び、こゝに英と相對して睨み合ふに至り、其内地に繁榮を來したる上より云は、此間七千英里の鐵道を其國內に敷き、殖産工業を奨勵し、輸物物は三千萬弗より上りて其十倍に達し、二千五百萬人の農奴を解放して、彼等に自由の生業を許し、且つ彼等をして皇帝を神の如くに難有からしむるの功德を施しぬ、而かも其皇帝たるや、終に其

臣民の爲めに殺されたるなり。是れ何を以て然るか、曰く露國は此人文の開けたる時に際しながら、猶ほ且つ國民と共に天下を経営するの道に出でず、所謂る皇帝一人と廷臣なるものとの其政治を私せしむる所以に由らすんばあらず、今回に於ける日露戦争の失敗亦た其源を此に發すと謂ふべきなり。





第七章

列小國一括

伊太利

吾人は當時宇内の大勢を左右したる歐米の列強國、即ち英佛普奧露と北米合衆國との六ヶ國を説き去れり。左らば此より列小國に移るべし。而て先づ伊太利を説くゆえんのは、當時伊太利が列小國より進んで、殆んど列強國に加入する如き大飛躍を演じたるを以てなり。

歐洲近世史に見たる如く、伊太利は一名の下に在れども、其實數多の國家ステイツに分

れ、此數多の國家も、亦た絶へず隆替興亡し、一名若くは一主の下に在らず、多くは獨、佛、西の爲めに領奪せられ、其獨立を保つものも、皆歐洲列強の勢力範圍に屬し居りしが、唯り伊の西北に位するサヴオイ家(サルデニア若くはベドモンド)のみ、此際突如として獨立的の王國となり、他日伊太利の運命を支配すべく期待せられ居たりき。

然るに佛國史中に見たる如く、千七百九十五年に至るや、己のが國のコルシカより蓋世の英雄那翁を出せしが、那翁はかねて、伊太利の統一と、其獨立を希望し居たることゝて、之を征服するや否や、直ちに北部を己れの直轄に屬せしめ、ネーブルス方面を其兄弟のジョセフに與へ、伊太利にありし諸列強の勢力範圍を一掃し去りぬ。

然るに更に又た那翁の没落後に於て之を見るときには、かのウヰンナの大會議より、ヴェニスとミランとは塊に入り、タスカニーとモデナとは塊統の太守に支配せられ、ネーブルスは西に屬し、バルマは一時那翁の妻マリア、ルンサに與

へられ、ベドモンドとサルデニアとはゼノアを合してサヴオイ家のヴィクトル、エンマヌエルに還り、而して再び那翁以前の狀態に復しぬ。

### 第一の革命時期

- ネーブルスの革命運動
- サルデニアの革命運動
- マシニーの出現
- カルボナリー黨の騒動
- ロンバルデーの革命運動
- ガリバルデーの出現

### ネーブルスの革命運動

那翁がセント、ヘレナへ流されしより間もなく、伊太利に起りたる秘密會を「カルボナリー」とす、「カルボナリー」とは炭火の意なり。吾人は今此の會の性質を詳細に説くの時なきも、要するところ、「伊太利は人種を同ふし、宗教を同ふし、半島を同ふし、古昔に於ては久しく宇内を支配したるもの、左れば何日<sup>いつ</sup>まで他國の屬地たるべき、速かに外人を逐ひ、

壓政を掃ひ、自由制度に依る一大獨立國を打建てざるべからず」と云ふの主張を  
持するものなりき。

於此乎千八百二十年西班牙に於て革命起り、前條に見たる如く、一時其王朝を  
覆すに至りしかば、伊太利のネーブルスは、其西班牙の一族に支配せられ居た  
ることゝて、革命運動は先づ此地方より生まれり。此時ネーブルスの近衛大將  
ビーブも亦た何時しか「カルボナリー」黨の一人となり居りしが、革命黨が旗を  
擧ぐると同時に、其軍を率て之れに合しぬ。左ればネーブルスの王フェルデナ  
ンドも、今は奈何ともする能はず、革命黨が言ふが隨意、立憲政體を許し、「予  
れもし此誓言に反かば、神罰を受くるも亦た辭せざるべし」と誓ひ、ネーブルス  
は難なく、革命黨即ち「カルボナリー」黨に支配せらるゝ立憲王國となりぬ。

然れども當時埃太利にはメタルニヒありき。西班牙は其本國に於てすら、其革  
命黨に苦められ居るものなれば、ネーブルスを援ふの餘裕はあらざりき。然れ  
ども此のメタルニヒは謂へらく、ネーブルスにして已に革命黨の領するところ

とならば、其施て埃領に及ばんと必定なれば、此際速かにネーブルスの革命黨  
を打撃すべしと。於此乎唯り伊に向ふて埃軍を繰り出したるのみならず、露と  
晋とも申合せて、聲援を爲さしめ、所謂神聖同盟を利用しぬ。

左れば如何に自由と愛國との赤誠に燃ゆる革命黨とは云へ、埃の大國より大軍  
を派せられ、剩へ普露の兩國が聲援を爲し居ることゝて、勿論之れに敵すべく  
もあらず、戰敗の後、ビーブは誅られ、首領連は殺され若くは捕へられ、終に  
元の木阿彌と成り了りぬ。

### サルデニアの革命運動

サルデニアに於ては、千八百二十一年、即ちネーブルスが旗を擧げたる翌年、同じく「カルボナリー」の起つありて、此處に  
も革命運動を起しぬ。當時サルデニア王エンマヌエル一世は、自由を好む  
人にはあらざりき。然れども革命黨の力によりて、伊太利を一統することを得  
ば幸なりとの感想を懷き居たりき。左らば今や革命黨の起るを見て、其處置に  
感ひ、位を其兄弟のフエリックスに譲りて遁げ去れり。然るに革命黨の勢

ひ非常にして、ネーブルスと同じく、數多の軍人が之れに投入したれば、一時其目的を達せんとするが如く見へしに、フェリックスは飽くまで革命黨に反するの政策を取て動かす。兎角する中奥軍の來襲に會ひしかば、革命軍はエンマヌエルの從弟にてナヤールレス、アルベルトなるものを戴て戦ひしも、其効なく、アルベルトは中途に於て逃げ去り、全軍忽ちネーブルスと同様の運命に會はされぬ。

### ロンバルデーの革命運動

ロンバルデーは嘗て一大王國として其盛名を轟かしたるもの、今は奥國に合せられ居たるも、亦た是れ北方伊太利の一國なれば、『カルボナリー』黨員を有すると尠からざりき。左れば此際又た亦た謀叛を企てぬ。當地なる『カルボナリー』の首領にコンフェロニリーなるものありき、嘗て立憲政體を喜び、ミランに於て愛國黨を起し、此地に立憲國を打建てんと企て、事成らず、今やロンバルデーに來りて時機を待ち居りしに、已にネーブルス并にサルデニアにも兵を擧げたりと聞くや、黨人を集めて之れに應

せんとせり。然るに大切なる時に當りて病にかゝり、且つ準備の整はざる中、逸疾はびくも、奥國政府の探知するところとなりて捕へられ、其黨人は散亂するに至れり。尤も此コンフェロニリーは奥の皇室の縁家にして且つ侯爵たりしを以て、特に死に一等を減せられて終身禁錮の身となりしも、其他の首領株に於ては殆んど皆斬殺せられ、かれモロンセリー及びペリユの如きは、十五ヶ年間牢獄に繋かれ、其後赦されしも、ペ氏は世を果敢なみて僧となり、モ氏は亞米利加に渡り、窮して乞食となり、終に發狂して死するに至りぬ。當時に於ける革命黨の慘状と失望察すべきにあらずや。

### マデニの出現

マデニは千八百八年伊太利のゼノアに生る、幼にして才學あり、因て専ら學事のみ其日を送り居りしに、前述にかゝる如く千八百二十年より同二十一年の革命に際して、『カルボナリー』黨の處刑せらるゝ者引も切らず、折柄彼れは其母と共にゼノアの海岸を散步し居りしに、人の群集すること夥しく、其何事なるかと怪しむ中、一人の巨人あり、突然彼れの母に

來りて、其帽を脱しつゝ、『伊太利亡命者の爲め』との一言を洩しぬ。因てマデニ  
 ーの母は涙滴と共に若干の金を其帽に投入せしかば、マデニは直ちに母に向  
 ふて、其意を問ひしに、母は之れに答へて、『是れ愛國者なり、彼等の友は今や  
 國事犯の爲めに流されつゝあるにより、彼等は之れが爲めに有志の寄附を仰ぎ  
 ついあるなり』と云へり。マデニ後日自ら書して曰く、我が國事に盡さんと志  
 したる源泉は、全く當時に流されたる此母の涙滴より湧き出でたるものなりと、  
 マデニ一時に歳十二なりき。愆くて彼れは其後いよく學事に勵み、法科大學  
 を卒業するに至りしも、彼れが十二歳のときに受けたる感動は、終に制し得べ  
 くもあらず、因て間もなく『カルボナリー』に投じ、次でゼノアの牢獄に繋がるゝ  
 に至りしが、此際一ツの理想を描きぬ。彼れは實行家よりも理想家なりき。其  
 身を革命黨に投ずるよりも、寧ろ革命黨を指導するの人なりき。於此乎猶ほ未  
 だ青年たりしと雖ども、其入牢中に沈思默慮を凝らしたるの結果、こゝに『伊  
 太利青年』なるものを起すに至れり。彼れは謂へらく、今や『カルボナリー』は伊

太利一統若くは外人放逐を叫ぶと雖ども、今日の勢にては、此事容易に行はれ  
 ざるべし、而して已に容易に行はれずとせば、失望に次ぐに失望を以てし、終  
 に起つこと能はざるに至るや必ず。是故に眞に此目的を達せんには、嘗に事業  
 上の成功をのみ目的とせず、之を宗教的の觀念に變せしめ、『我れは只だ爲すべ  
 き事を爲しつゝあるのみ、爲すべき事を爲さずして止む能はざるが故に之を爲  
 すのみ、成敗利鈍は固より顧みることゝあらざらん』と云ふ此の道念より進まざる  
 べからずと。於此乎其後赦されてマルセーユに潛み居りしが、此處より秘密の  
 檄文を散布し、其立つところは道念、其理想とするところは共和政治、其標語  
 とするところは『神と人民』、而して其旗の一方には『一致と獨立』の二字、他の一  
 方には『自由、平等、人道』の三字を描くことゝなし、此主意に基て青年を集め、  
 名けて之を『伊太利青年』と稱し、こゝに一種の革命黨を起しぬ。

### ガリバルヂーの出現

ガリバルヂーは千八百七年伊太利のニースに生  
 る、船長の子なり、幼にして學を好まず、常に惡戯をのみ事とせしも、資性極

めて卒直にして、其十六歳のとき、父と共に羅馬に到り羅馬の墟址を見て憤慨し、「予れ此伊太利をして古昔の全盛時代に復さしめざるべからず」と獨語し去るや、此れより其意を國事に傾くるに至りぬ。

然れども未だ其手段を見出す能はず、暫く父の業を嗣で航海に従事し、地中海若くは黒海の濱邊を乗り廻り居りしに、一日ゼノア人よりマデニの檄文を手にしたり、因て把て之を見るに、慷慨淋漓、血湧き肉躍るの概あり。於此乎船を棄て、陸に上り、マルセイユにマデニを尋ね、爾來其志を同ふするに至れり。

### 第二の革命時期

○革命法王州より起る

○マデニ、アルベルトに書を送る

○ガリバルデーゼノアを襲はんぞす

○南方伊太利の革命運動

○マデニの徒サグォイを襲ふ

第一期を去ること十年、即ち千八百三十年に於て、更に革命の運動起りぬ。此年佛國に革命ありて、チャールレス十世放逐せられたり。因て伊太利の革命黨、カルボナリーは更に之れに力を得て、今回は法王州并に其附近より事を挙げたり。蓋し當時法王バイアス八世死し、未だ其嗣を得ず、暫く無主國となり居りしに乘じたるなり。

ボロナに於ては革命黨いよく其功を奏し、最早や法王の地上權を受けずと宣言せり。因て新に撰ばれたる法王グレゴリー十六世は使者を派せて、之れと調和を圖らんとせしに、其使者は空しく革命黨に拘留せられて、其意を果す能はず、益々革命黨をして猖獗を極めしめぬ。

モデナに於ては革命黨の主領メノナー其部下を率て旗を挙げぬ。而して衆寡敵せず、其身は須臾にして捕へられ、一時、モデナ公をして凱歌を唱へしめしも、更に各地より起り來れる革命軍の爲めに破られ、此モデナ公も終に埃國に遁がるゝに至れり。

斯くてバルマに於ても革命軍起りぬ、而して益々南方に彌漫するの徴ありき。左れば此形勢を見たる奥國は争でか之を黙すべき、再び大軍を差し向けしかば、今回の革命軍も亦た十年以前の革命軍と其運命を同ふしぬ。蓋し當時の革命軍は、竊かに佛の我れを扶くべしと期待せしに、終に其事無かりしに由る。

右の如くして、千八百三十年の「カルボナリー」運動は、又た復た失敗に終りたりき。然れどもマデニー黨の方面に於ては、事業よりも先づ教育に在りと爲し、其後益々青年を鼓舞しつゝありしが、千八百三十一年、チャーレス、アルベルトがフエリックスの後を嗣てサルデニアの王位に即くや、マデニーは之れに書を送りて曰く

チャーレス、アルベルトよ、汝は榮光ある人の第一たらざれば、暴君の最後たるべし、庶幾くは自由、一統、獨立の三大文字を汝の旗に大書せよ、汝之を能くせずんば、予れ汝をして之れを爲さしめんと。

チャーレス、アルベルトは曩日に革命黨に屬し、而して中途に逃げ出したるもの

なり、故に其意志弱きも、猶ほ且つ伊太利一統を望むものなりと想はるゝものありしを以てなり。

千八百三十二年佛國政府はマルセーユよりマデニーを逐へり、因てマデニーは瑞西スイツに去りしが、彼れは千八百三十四年、此處よりサヴォイを襲ふの計畫を爲しぬ。チャーレス、アルベルトは革命黨に同情を有せざるにはあらざりし、然れども直ちに奥國より干涉せらるゝの恐れあれば、容易に之れに應せず、却て之れに反對するの態度に出でしかば、マデニーの徒は、最早や忍ぶべからずと爲し、さてこそ暴舉に出でしなれ。吾人はマデニーの自傳に由りて、此サヴォイ攻撃に於ける慘事を知る、而かも今は之を陳ぶるの時なし。マデニーは此時失敗せり、而して其後三年猶ほ瑞西に潜み居りしが、更にロンドンに亡げ入りぬ。ガリバルデーは其後伊太利青年の一人となり、竊かにサルデニアの軍艦に住み込み、荐りに同志者を糾合する中、千八百三十四年、いよゝ大運動に従事せんと欲し、「青年伊太利」の黨員と共にゼノアを襲ふ計畫を爲して失敗し、尋



で南亞米利加に脱奔せり。

### 第三の革命時期

- 法王バイアス九世の大奮發
- マゼニー倫敦より歸る
- チャーレスアルベルト起つ
- 羅馬革命黨の據城となる
- 更に革命黨の大頓挫
- 革命黨所在に起る
- ガリバルデー南米より歸る
- マゼニーガリバルデー羅馬に入る
- 第三世那翁羅馬を襲ふ

千八百四十六年に至るや、法王グレゴリー十六世死して、バイアス九世其後を嗣げり。然るにグレゴリーは保守一片の頑物なりしも、バイアス九世は所謂當世流の人物にして、此際法王領に於ける政策を一變し始めたり。彼れは第一國事犯者に大赦を行へり、次に出版の自由を許し、次に立憲政體を起し、尋で伊太利聯邦會なるものを起し、以て伊太利の統一を圖らんとせり、是れ實

に羅馬法王としては、古今未曾有の斷行なりき。於此乎全伊太利に在る革命黨は、俄かに救世主の出現せしかの如くに喜び、法王にして此くの如くんば、いよ／＼天下は我が物なりと勇み立ち、羅馬に入り込み來るもの引きも切らず之れに加ふるに諸外國に亡げ居たる革命者も歸り來り、今は如何なる形勢を呈し來るや、容易に測るべからざるものとなりぬ。

果然伊太利の全國は未曾有の混雜を惹起し來りぬ。自由者は更に未曾有の活氣を帶び來りぬ、而して革命黨員にあらざるも、立憲政體を希望するもの到るところに現はれしかば、ペドモンド并にタスカニーの如きは、終に立憲政體を布告するに至り、ルーカの如きも革命黨の爲めに覆へされ、所在革命黨の勝利を見るに至りぬ。

蓋し當時は前段に述べたる如く、嘗に此伊太利に於てのみならず、歐洲各地に革命の流行したる時期なりとす。即ち千八百四十八年は、是れ有名なる佛國第三回目の革命にして、其餘響は施て埃に及び普に及び、いづれにも立憲黨若く

は共和黨の勝利を見ざるなく、爲めに埃の如きに於ては、數十年間其國を支配したる大壓制家メタルニヒの逃亡となり、最早や前年の如く、伊太利を征するの力なく見へたりき。

マゼニ―は其後ロンドンに亡げ居たりき、而して不絶此處より伊太利の志士を鼓舞し居たりき。然るに今やバイアス九世の自由政治より事起り、佛國革命の亂に及び、更に埃國の大混雜を聞きしものから、忽ちロンドンより馳せ歸りぬ。ガリバルデーは南米に亡げ、一時は乞食ともなり、海賊ともなり、果ては當時ブラジルに反對して起ちたるリオグランデーの海軍に投じ、今や一艦の長となり居りしが、此際己のが軍艦に乗じて歸り來れり。然るに更に又一大快事の起りたるありき、從來サルデニアの王ヤールレス、アルベルトは埃を恐れて専ら革命黨を鎮壓し居りしが、今や埃國が革命黨の爲に苦しめらるゝを見るや、俄かに伊太利一統の業に着手し、先づミランを襲ふて之を取りぬ。左れば埃は政治上に於ては、大混雜を極むるとは云へ、已に敵國より其領地を

襲はれたることなれば、直ちに將軍ラデッスキ―を派せて之れに當らしめぬ。ラデッスキ―は嘗て大那翁に對して戰へるもの、當年八十二歳の高齡なりしが、其來るや否や、苦もなくミランよりアルベルトを逐ひ、次でノヴアラに於て最後の打撃を加へしかば、アルベルトは失望の餘り、位を其子のエンマヌエル二世に譲り、去て他國に行き、四年の後葡萄牙に於て死し去れり。ガリバルデーは最初チャールレス、アルベルトに投じたりき。然れども彼れの疑ふて用ゐざるを見るや、アルベルトの到底事を成し遂げ能はざるを看破して去り、其後ミランに於て三千の義勇兵を得たりしも、アルベルトの敗れし後は、到底小勢にて埃軍に當るの難きを察し、其軍を解散しつゝ、飄然去て暫く行くところを知らず、其後羅馬に入り來りぬ。

マゼニ―は最初アルベルトに屬し居たりき。然れども彼れの人物を察するところ、臆病にして事に堪ゆるの性質にあらざれば、長居は無用と覺悟を定め、其後ガリバルデーの軍に投じ、暫時ミランの埃軍と戦ひしが、ガリバルデーが

其軍を解散したる後、是れ亦た同じく羅馬を指して落ち行きぬ。

之れより先き羅馬に於ては、立憲政體を施き、法王首となり、ロッシー宰相となりて、着々自由の制度を實行せんと爲し居りしに、急激派の面々は、實に内治に盡すのみならず、此際兵を擧げてサルデニアの王チャールス、アルベルトを援くべしと請求せり。然るに法王は其法王たるの故を以て、兵を動かすを好まずと云ひしかば、急激黨は大に憤り、左らば法王を逐ひ出して、よろしく共和政體を施くべしと叫號し、ロッシーは間もなく暗殺せられたり。

然るに此時に當りてマデニーは已に羅馬に入り來り居りぬ、左れば一び彼れが入り來りたりと聞くや、共和政治を唱る面々は、益々爰に勢を得て、いよ／＼共和政體に變じたれば、法王は去て佛國に通れ、ガリバルデーは來りて軍を督し、羅馬はいよ／＼革命黨の據城となりぬ。左れば伊太利全國の革命黨は益々此に集り來り、政治にはマデニーあり、軍事にはガリバルデーあれば、最早や伊太利を一統すること容易なりと歡ぶ中、こゝに佛軍の來襲に會へり。

之れより先き佛王ル井、フヒリッブ逐ひ出されて、ル井、ナポレオン大統領となりぬ。然るに此ル井、ナポレオンは前條に見たる如く、實に絶大の辯物なれば、其自由主義によりて新に建てられたる共和國の主人としては、此羅馬を征すべき權利なきものなりし。然れども彼れは此際法王を救ひ、以て舊教の信仰家を喜ばせ置き、後日己のが謀反を成就せしめんと欲せしより、舊教國として其法王を救ふ義務ありと稱し、大軍を此羅馬に差し向けたり。天下より聚り居たる伊太利の革命黨は能く戦いぬ、分けてもガリバルデーは其全力を擧げて能く戦ひ、屢々佛軍を惱しぬ。然れども終に佛軍が援兵を得て、三萬五千の大勢となりしかば、羅馬軍は其補充兵なかりしが爲めに、僅々一萬數千人に減せられ、畢に止むなく陥落せられ、マデニーとガリバルデーとは再び何地ともなく落ち行きぬ。

斯くてサルデニア已に屈し、羅馬また陥りたりと聞くや、革命黨の勢力は次第に衰へ、而して王黨の勢力は次第に増し、シ、リーに於ても、ネーブルスに於

ても、タスカニーに於ても、マルマに於ても、モデナに於ても、ロンバルデーに於ても、ヴェニスに於ても、齊しく皆元の木阿彌に復せられ、再び埃と佛との勢力を伊太利の全國に見るに至れり、而して此等の革命運動は千八百四十六年より始まりしと雖ども、其實大運動は僅々千八百四十八年と同四十九年の二ヶ年に過ぎざれば、恰も一夜の夢の如くに思はれぬ。

### 第四の革命時期

- サルデニア王國の狀態
- カミロ、カヴール出づ
- カヴール動き始む
- パリイの會議
- 伊太利戰爭
- 更に伊太利各地の革命運動
- 最初に於ける合體王國の國會
- カリバルザイ、シ、リイを征す
- エンマヌエル、チーブルスに赴く
- グイクトル、エンマヌエル二世立つ
- カヴールの見識
- クリミアの戰爭
- カヴールと三世那翁との密約
- ソーリックの條約
- 伊太利諸州サルデニアに合す
- マゼニー、エンマヌエルに書を送る
- チーブルス革命黨の手に落つ
- チーブルス、サルデニアに合す

第四革命時期に於ては、主としてサルデニア王國の歴史を説かざるを得ず。千八百四十九年、チャーレス、アルベルトの後を嗣ぎたる其子ヴィクトル、エンマヌエル二世は、其父の億病者たりに似ず、實に武人的にして豪膽者なりき。左れば伊太利の革命黨は猶ほも希望を此王に繋ぎ、更に時期の來るを待ち居りしに、エンマヌエルの一言一行は、果して伊太利一統の意志あることを顯はし來りぬ、而して之と同時に更に一個の英雄現はれたり、之をカミロ、カヴールとす。

カヴールは千八百十年サルデニアの國都ツリーニンに生る、貴族の子にして、幼より睿悟なりき。左れば稍や長するに及んで惟へらく、今や「カルボナリー」若くは「伊太利青年」なるものを起して革命を企て、此伊太利を一統せんと焦心するもの多しと雖ども、是れ蓋し徒勞に屬せん、何んとなれば埃と云ひ、佛と云ひ、孰れも容易ならざる大國なれば、之と戦ふて勝つべきの望み毫もあるなし、此故に先づ我がサルデニア國をして根據地たらしめ、こゝに十分なる戰鬥力を養

ひ置き、又た十分なる民望を繋がせ置き、徐ろに時期を待て、外交の手腕を振ふより外あるべからず、予や幸に貴族に生る、左れば予が修養の如何に由りては、此サルデニア國の宰相となり、或機會を執へて以て、一大飛躍を試むるの時やあるなかるべしと、是れカヴールが青年時代より抱きたる觀念なりき。

於此乎彼れは政治學を研究しぬ、經濟學を研究しぬ、而して専ら古今の歴史に其眼を曝し、常に宇内の形勢に心を注ぎぬ。然れども其後百聞一見に如かずと感じ、先づ去つて英國に行き、英國の社會と其政治の運行とを觀察し、大に學ぶところあり、其れより去て歐洲各國を巡遊し、以て大に悟するところあり、歸り來るや自ら田園に耕し、先づ國家の殖産物を獎勵するの策に出で、密かに機會の到るを待ちぬ。

千八百三十年の革命運動の時、カヴールは猶ほ未だ二十歳の血氣者なれば、殆んど革命軍に其身を投せんとせり、然れども當時已に前述の如き觀悟に出で居りしを以て、思ひ返して留りしが、千八百四十六年法王バイアス九世が、革命

の氣運を開き、次でサルデニアに於ても立憲政體を施かるゝに至りしかば、彼れはソロ／＼出づべき時の來れりと爲し、一雜誌を發行して、其意見を世に發表すると同時に、市より撰ばれて國會の議員となりぬ。識者は早くよりカヴールの舉動に注目し、其志の小ならざることを看破し居りしが、いよ／＼爰に動き始めぬ、而して其動き始むるや、其學其識及び其人格に於て、當時彼れに及ぶもの無きを證明したりければ、エンマヌエル二世は直ちに彼れを擧げて内閣に列せしめ、次で彼れを宰相に擧げぬ、時に千八百五十三年なりき。

カヴールは志を得たりき、因て多年の抱負を實行せんと欲しつゝある間に、爰にクリミヤの戦争となりぬ。クリミヤの戦争に就ては、幾度か前條に繰り返し置きたり、而して讀者も已に其詳細を知る。サルデニアは元來戦争に關係なきものなりき、然れども向後サルデニアをして世界の舞臺に出さしめんには、是非とも諸大國と交際するの必要を感じたれば、カヴールは此際英國に申込みて、クリミヤ戦争に參せんことを以てしたりしに、英佛は當時一人にても、其味方

の多きことを望むときなりければ、直ちに之を欣諾せり。因てサルデニアは先づ一萬五千の兵を繰り出し、クリミアに於て頗る勇敢なる動作を爲したりき、特にチエルナヤの戦に於ては英佛を驚かしたるほどの軍功を奏し、以て大に英佛人の感謝を受けたりき。

左ればカヅールは益々其目的を達しつゝ來れり。於此乎クリミア戦争の終りて、パリーの會議となるや、彼れ自らサルデニヤ王國を代表して行き、諸豪傑諸辯物の間に奔走し、勉めて彼等の歡心を買ひ、冥々の裡に伊太利の慘狀を訴へ、特に埃國の壓制を吹聴し、到底此儘にては伊太利の平和を保つ能はざる理由を陳述せり。斯くて公式の議席に於ても、カヅールは一言伊太利の現狀に及び、壯んに埃を攻撃したれば、埃使は青くなり又赤くなり、アハヤ大破裂を來さんごせり。然れども英佛のカヅールを支ゆるありし爲め、奈何ともする能はざりき。又たカヅールは三世那翁の辯物たるを利用し、他日埃を攻むるの計畫を爲し、事もし成就せば、伊は埃よりロンバルデーとヴェニシヤを

割き、佛に伊のニースとサヴオイの二州とを與ふべし約束して歸れり。

此時に當りてカヅールの名聲は非常なりき。又た其政治も着々奏功せり。彼れは富國の基を置かんが爲めに、殖産工業と通商貿易とに向ふて大獎勵を與へ、強國の實を擧げんが爲めに、練兵の制を立て、由來伊太利の難物たる法王の權力を抑ふると同時に、『自由の國に在る自由の教會』と云へる語を案出して、巧みに之れと衝突せざる方針を取り、保守黨と共和黨との中に入れて之れが調停を圖り、苦心慘愴の間に其國の繁榮を畫したりき。斯くていよゝ佛と結んで埃を攻むるの戦争となりぬ。之を伊太利戦争と云ふ。

パリー會議の後三年、即ち千八百五十九年四月に於て、いよゝカヅールの大計畫が實行を始めぬ。那翁三世は約に従ふて、埃を攻むるの覺悟を爲し、機を見て喧嘩を吹き掛けたり、而してサルデニアに於てはエンマヌエル二世親ら兵に將として出で、那翁も亦た親ら軍を率て來りたれば、埃帝フランシスも亦た親ら出陣し來れり。於此乎マゼンタの戦となり、更に又たソルベリノの戦とな

り、埃畢に大敗し、聯合軍も亦た二萬有餘の死傷者を出せしが、埃は三萬餘を失ふて退却し、ロンバルデーは占領せられ、埃都ウヰンナも亦た危くなれり。於此乎久しく埃に苦しめられ居たる伊國人は欣躍し、カヴールは大得意となり、己が大願成就せりと喜びしが、間もなく更に那翁の裏切となりぬ。

那翁は進撃を續け居たりき、然るに埃も左るものゆえ、此間普に通じ、背後より佛を脅かさんことを交渉せり。昔は條件を附して之に應せざりき、然れども那翁にして、いよゝゝ埃都を陥る如きことあらば、或は其擧に出んども限らざりしに、那翁は此事を聞くや否や、猝に怯氣を生じ、サルデニアを出し拔て、ヴィラフランカに於て埃帝と會見し、埃にロンバルデーとヴェニシヤを讓るべく要求せしも、其ヴェニシヤを割くを拒みしを以て、ロンバルデーのみを取り、之をサルデニアに與へて以て、約の如く伊よりサヴオイとニースを己れに取らんと企てたり。

伊太利の癖物は、佛の癖物に一杯喰はされたりき、然れども佛の援助なくして

埃に當らんことは、固より出来得べき事にあらざれば、三十年來の計畫は、ガラリと爰に外れ來て、今は内外に面目なく、カヴールは其冠を掛けて民間に下れり。カヴールは圓轉滑脱の大才物なりし、然れども此時には憤慨の情禁する能はず、殆んど狂氣の如くに立腹せりと云ふ。左ればエンマヌエルも今は如何ともする能はず、止むなく埃佛の條約に與みし、己れはロンバルデーを得て、サヴオイとニースを佛に與ふることに同意せり。之をツォーリックの條約とす、時に千八百五十九年十月なり。

カヴールは野に下れり、然れどもカヴールなくして今日の國事を經營せんことは、到底覺束なき次第なれば、エンマヌエルは更にカヴールを起たしめしに、カヴールも亦た來りて宰相に復しぬ、時に千八百六十年の一月なり。然るに之れより先き、此戦争の開くるや否や、カヴールは人を伊太利の諸方に派せて、此際獨立の旗を翻へすべきを以てせしに、左なきだも待ち構へたる革命黨は、再び各地に運動を始め、バルマ、タスカニー、及び法王領の一部の如きは、み

る。中に革命黨の占領するところとなり、其舊來の主を逐ひ出し、直ちに伊太利一統を希望する旨を以て、サルデニアに合せんことを申出でたり。左れば如何に此等を處置すべきか、其請を容るべきか、將た之を拒むべきか、其請を容るれば即ち埃佛より故障を申込まるべく、之を拒めば即ち彼等を失望せしめ、かねての統一を圖ること能はざるなり。於此乎カヴールは極めて世間體の好き政策に出で、千八百六十年の三月、此等の諸邦に答へて、來意之を謝す、而かも未だ貴國に在る人民全體の意向如何を知る能はざるを以て、此際普通投票を行ひ、果して其地人民の全體か、若くは大多數が、サルデニア王國に合併せんと欲するの實證を示さば、勿論之を諾すべき旨を以てせり。斯くて果して其實證を擧ぐるに至りしかば、サルデニアは遂に此等の諸邦を合すに至れり。法王は怒りて反對せり、而かも最早や從來の如き勢力を振ふこと能はざりき。那翁も反對せんと試みたりき、而かも此際事ろサヴォイとニースとを取て満足すべきを得策と爲し、いよゝ正式的に此二邦を合せ去れり。左ればカヴールは一

時那翁に欺かれて失望せしも、今は思ひがけなき獲物を得たるを以て、大に喜び、其翌月直ちに此等の諸邦より代議士を召集し、初めて合體王國の國會を、サルデニアの首府ツーリンに開きたり。

然るに更に又々一大事件起りたり。當時マゼニ書<sup>マゼニ</sup>をエンマヌエルに送りて曰く、『時機失ふべからず、今や速かに軍隊をネーブルスに差し向けて之を陥れ、次でシ、リに渡り、更に此二國を合併して以てサルデニア王國に加ふべし、而して王もし能はずんば、予はガリバルデーを遣して之を成就せしむべし』と。然るにエンマヌエルが暫く躊躇し、且つ畢に之を拒むや、千八百六十年の五月、ガリバルデーは不意に一千の義勇兵を募りてゼノアより出帆し、直ちにシ、リに渡り、みるゝ中にシ、リ島を征服し去れり、而して其軍に投ずるもの日々に多く、遂に四千に及びしかば、更にシ、リ島より轉じ來りてネーブルスを襲ひたりき。ネーブルスは是れ實に伊太利に於ける最悪政治の土地たりき。千八百五十一年英の大政治家グラッドストーンが其歩を伊太利に



運びしとき、ネーブルスを見舞ふて嘆息し、是れ人間の地獄なり、一萬二千の國事犯者が、其牢獄に呻吟するを以ても其一斑を知るべしと云ひ、其後其状態を書に筆して、之を天下に訴へたることありき。然り其王フェルデナンド二世は、夥多の謀叛地を砲撃し去りたるより、世人より砲撃王と渾名せられたるほどの暴君にして、其後を嗣ぎたるフランシス二世も亦た其父に劣らざる悪君なりき。左ればマデニーが先づ此者を撃つべしと勧めしは、實に無理ならざる次第なりしが、今やガリバルデーは戦勝の餘威に乗じて入り來り、其の入り來るや、三週間を経ざる間に、ネーブルスの守備兵を降して、之を占領したれば、王は亡げて出奔せり。

左らばサルデニア王國は之れに對して如何なる處置を取るべきか、是れ實に大問題なりき。人情より云はゞ、エンマヌエル并にカヴールは大悦に悦び居たりしなり。然れども埃佛に對して之を黙過すると能はざりしを以て、エンマヌエルは兵を引て出陣せり、而して若しもガリバルデーにして反對せば、之れと一

戦を試むる覺悟なりし。然るに其到るや、ガリバルデーは出で、之を迎へ、「予は王の爲めに之を取りたり、王にして來らば、最早や用なし」とて、其儘平然としてネーブルスを去り、かねて歸農して樂しみ居たるカプリーナ島の家に歸り行きぬ。斯くてエンマヌエルは一時ネーブルスを領し居たりしに、此地もシ、リーも、亦た同じくサルデニアに合せんと欲する旨を申出でたり、然るに事の未だ決せざる中に、ネーブルスの王フランシス二世は、一旦ガリバルデーの爲めに逐はれしと雖ども、今や其部下の兵を集て押し寄せ來り、直ちにエンマヌエルに當りければ、エンマヌエルも今は引くに引かれの身の上となり、止むなく之と兵を交へしに、フランシスは忽ち大敗してガエタの城に退き、數月の後終に降を入るゝに至れり、於此乎シ、リーとネーブルスとは、更にサルデニア王國の一部となりぬ。

### 伊太利一統時期

- 今古の羅馬
- カガールの苦心
- カグールの死後の形勢
- カリバルザイ捕らる
- 普と合し地に當る
- 羅馬いよく合せらる
- 伊太利國第二の國會
- マヂニとカリバルザイとの態度
- カリバルザイ羅馬を襲ふ
- 第三世那翁羅馬より手を引く
- カリバルザイ復た羅馬を襲ふ
- 結論

○ 顧みれば羅馬が天下を失ふてより、爰に千數百年、其間伊太利なるものは、如何なる状態に在りしか、吾人が興亡史に見たる如く、又た近世史に陳べたる如く、實に遊女が其主を代ゆるが如き苦界に陥り、未だ曾て獨立したることあらざりしなり、然るに今や殆んど之を成し遂げたるなり。吾人は「殆んど」と云ふ、何んとなれば、當時未だ羅馬とヴェニスとを合すと能はざりしを以て也。

然れども最早や殆んど一統の目的を達したるを以て、千八百六十一年の二月、更に合體諸邦の代議士を召集して、此に第一の國會を開き、先づ今日よりエンマヌエル王を「伊太利王」と稱すべしと決議し、大萬歳を以て之を祝し、更に諸法律諸政度を議したりしが、事皆圓滑に進捗しぬ。然れども此時に於けるカグールの苦心は實に其絶頂に達したりき。彼れは萬事の責任を負はざるべからず、特に新に合體したることゝて、邦と邦と其情態を異にし、州と州と其風俗を同ふせず、而して問題には教育あり、財政あり、行政あり、兎ても一身にては之を負ふ能はざるべしと思はれしに、左りとて當時彼れの右手たるべき人物はあらざりしなり。人或は問はん、かれマヂニは何れに在りしぞ、ガリバルザイは如何せしやと。然り是れ伊太利の三傑と稱せらるゝものなり。然れども此時に當りて、マヂニもガリバルザイも彼れの右手たることを肯んせざりき、否、管に彼れの右手たらざりしのみならず、當時マヂニは伊太利の一統を喜びしも、其持論たる共和政體を打建ること能はざりしを見て、心頗

る平ならず、こゝを以て寧ろカヅールには反對の態度を取り居り、ガリバルヂーは又たカヅールが己のが故國なるニースを佛に割きたるを終生不忘の恨事と爲し、之れが爲めにカヅールと大激論を醸し、殆んど絶交の姿となり居たれば、常にカヅールの心事を感めしも、カヅールの慰藉者とはならざりき。於此乎人々はカヅールの健康如何と氣遣ひ居りしに、果してカヅールは千八百六十一年の六月五十一歳の事業盛りを以て過ぎ逝きぬ。

カヅールの死して後は、最早やカヅールに亞ぐべきものあらず、ペナノ、リカソリーなるもの暫時カヅールの後を襲ひ、ラッタデー尋で之れに代はりぬ。然るに此ラッタデーなるものも、此れ亦た第二流の人物にして、忽ち大失策を曝露せり。千八百六十二年に於て、ガリバルヂーは更にカブリナ島を躍り出で、今回は羅馬を襲ひたりき、是れ羅馬が未だ法王に屬して伊太利王國に合せざりしを遺憾に思ひたるに由る。然るに宰相ラッタデーは前以て之を知りながら、何等の手段をも取ることなく、却て彼れが爲すが儘に任せたりしに、ガリバ

ルヂーが出發するや否や、第三世那翁は、當時法王を保護し、且つ兵士を羅馬に滞留せしむることゝて、直ちに之れに故障を入れ、事もし肯かれずんば、大軍を繰り出すべく脅かしぬ。是れ蓋し前以て分り切つたる事たりしなり。然るに事の此に至るや、ラッタデーは俄かに驚き騒ぎつゝ、直ちに王兵を羅馬に送り、ガリバルヂーを撃て之れに負傷せしめ、次で之を擒にせり。尤もガリバルヂーは間もなく放免せられしとは云へ、是れ實にラッタデーが大失策を演じたるものなりき、而して國論之れが爲めに囂々たりしかば、彼れは畢に其職を辭せり。

次で宰相に上りしものは、ミーンゲッサーなりしが、羅馬問題の囂々たるを看過する能はず、三世那翁に交渉して、羅馬より佛兵を撤せんことを請へり、而して英も亦た之れに聲援を與へたり、因て那翁は當時メキシコ遠征の失敗より、次で埃普に對する失敗もありしかば、伊が此羅馬を侵畧せざるべきを誓ひ、且つ外敵の來るとき、之を守護する責任を帯ぶれば、今より二年の間に撤兵す

べしと約せり、時に千八百六十四年なり。  
然るに千八百六十六年に於て奥普の戦争ありき、是れ前條に見たるごとくなり、  
左れば此際ミーングッチーに次で宰相に上り居たるラ、マルモラは、直ちに普と  
連合して奥に當りしに、伊は海戦に於ても陸戦に於ても、奥の爲に大打撃を受  
けしも、幸にして普軍の大勝利の爲めに、結局平和條約となり、伊太利は多年  
蹶望したるヴェニスをも得たりき。

ヴェニス已に手に入りたり、而して残るは唯り羅馬のみとなりしかば、千八百  
六十七年に於て、ガリバルデーは又々カプリナより躍り出で、更に羅馬を襲ひ  
たり。然るに此時に當りて、佛國は已に其守兵を引き揚げ居たりしと雖ども、  
羅馬を失ふは佛の國權に關すること大なりと爲し、直ちに將軍フェーリーを遣  
はして之を撃たしめしに、ガリバルデーは敗れて擒らはれ、其功を奏するに能  
はざりしも、其後佛伊の間に交渉あり、佛は當時普と事を構へんと欲する下心  
ありたれば、寧ろ羅馬を伊に與へて同盟を求めんと欲し、伊も亦た之れに應じ

て外交政策を弄する中、終に普佛戦争となり、而して羅馬は自然と、伊太利王  
國の中に没收せられぬ。

### 結 論

嗟呼吾人は伊太利一統史を一瞥し去りたり。讀者は此間何物をか発見したる。  
曰く文、曰く武、曰く外交、是れ伊太利を一統したるの三武器なりと知らずや。  
而して此三武器はマヂニー、ガリバルデー、カヅールの三偉人によりて成就せ  
られたるものと知らざるべからず。凡そ事を爲す、先づ其事に向ふて、人心を  
鼓舞奨勵するを以て第一と爲す、而してマヂニー之れに當りたり。次ぎには實  
行なり、而して實行は武力を意味す、是れガリバルデーの任じたるどころなり。  
然れども此二人や屢次事を擧げて屢次敗れたり、是れ何に由るか、外交如何を  
顧みざりしが爲めのみ。如何に愛國心に満ち、如何に義勇心に富みたりとて、

埃若くは佛の大軍に出會しては、何んの抵抗力をも有する能はざりき。於此乎カヴール出で、諸國を操縦し、以て事業に完成を告げしめぬ。

然るに更に此に一大人物の存在せしことを忘るべからず、エンマヌエル一世即ち是れなり、彼れは立憲國の君主として表面上何事をも爲さざりしが如し、而かも表面上何事をも爲さず、人に任じて疑はず、只々要處々々をのみ握りて指揮し、未だ曾て一回だも其間に失望せず、着々大方針に向つて進みたるごころは、何等の度量ぞ、又た何等の心膽ぞ、英主にあらずんば能はず。斯くて彼れは完く伊太利を一統し去り、埃が普の爲に控かるゝを見、佛が普の爲めに敗らるゝを見たりて、千八百七十八年に死せしが、自由を得たる伊太利國民は、恰も其父を失ひたるが如くに哀悼し、千載に國祖たるの榮名を彼れに與へぬ。

## 土 耳 其

土耳其は最早や、一個の獨立國として數ふべからざるに至れり。彼れは猶ほ兵力を有す、而かも到底歐洲の諸列強に當るに足らず、其今日の存在を僥倖するゆえんは、何れの國も之を取るご能はざればなり、即ち之を取らんと欲するものあらば、是れ歐洲全體の戰亂を惹起するものなればなり。露は一度ならず二度ならず、ビータル以來之れと戰を交へ、殆んど之を陥れたること幾回なるを知らず。然れども毎に他國特に英國が之に干渉して其志を得せしめず。因て此事に關してのみ云はゞ、土耳其の今日あるは、英國のお蔭なりと云ふも妨げず、兎にも角にも今日にては獨立の資格なきものと成り了せり。

歐洲近世史に於ては、埃露が土耳其を撃て之を分割せんと試み、英のピットが之れに干渉して其志を得せしめざりし段にまで及べり。左れば其後を次で之を

陳べんに、當時の帝セリーム三世は、千八百八年まで土耳其を治めしが、其間佛の那翁とエヂプトにて争ひ、英露の力を借りて之に當り、更に那翁の全盛時代となるや、之れに壓せられて其命を聞く中、次代即ちマムード二世の代となりぬ。

### マムード二世 (自千八百三十九年)

○希臘の獨立  
○埃及の謀叛

○更に露土戦争  
○列強の外交手腕

マムード二世の初代には、那翁の戦亂にて、歐洲諸國は之れが爲めに惱殺せられ居りしかば、敢て土耳其を狙ふものあらざりき。然るに那翁の没落後に至るや、數年ならずして東方問題、即ち土耳其問題を惹起しぬ、而して其當初を希臘の獨立とす。

### 希臘の獨立

希臘は伊太利と同じく、古代よりの名邦なり。然るに亦た伊太利と同じく、早くより獨立を失ひ、特に異教徒なる土耳其に征服せられしより以來、哀れなる状態にて存在せり。左れば伊太利の志士の如くに、同じく此にも獨立の旗を翻へし、屢次失敗の運命を重ね居りしが、爰にいよゝゝ其志を遂げぬ。

千八百二十年希臘の北方に位せるアルバニアの管領アリ、バシヤ、土耳其政府に逆ふて叛旗を翻へし、進んで希臘をも己に屬せしめ、己れ之れに王たらんと企てたり。而して此企畫は土耳其政府の兵に撃破せられて其志を達する能はざりしも、之を見たる希臘人は好機逸すべからずとなし、かねて組織せられ居たる秘密政社は、此際檄を全國に飛し、更に希臘教信者たるの故を以て、露に援助を申込みおき、千八百二十二年の一月、全國の代議士をエビダウラヌに召集し、爰に共和政體を起し、假りに五人の行政委員を置き、之れに三十三人の議官を附し、先づ一個の政府を組織し、天下に向ふて斷然土耳其を離れて

獨立したる旨を宣言せり。

左れば土國政府は争でか之を許すべき、忽ち大軍を差し向けたり、而して希臘軍は能く其獨立の戦を戦ひぬ。然り七年間の戦に堪へぬ。然るに希臘は最爾たる一小土のみ、而して土耳其は政治に於ては不活潑なるも、軍事に於ては常に活潑に運行することゝて、容易に希臘をして決勝戦を得せしめず、加るにかねて援助すべく期待せられたる露のアレキサンデル一世は、俄かに埃のメテルニヒの爲めに説破せられ、希臘は自由制度を希望するものなれば、之を助くること露國の國是に反するにあらずやと詰問せられて、其手を引くと同時に、當時エジプトの管領にてホハメット、アリーなる豪傑あり、土耳其の命を奉じて攻め來りければ、希臘は最早や潰滅せられんとせり。於此乎宇内の志士は希臘に投じ、英の詩伯バイロンの如きも之れに赴き、只管希臘に勝利を得せしめんと焦心る中、土耳其軍は到るところに虐殺を行ひ、基督教徒たる幼老男女を殺すこと其數を知らざりしかば、露國も今は之を看過すること能はず、英も

亦た之を捨て去るに忍びず、爰に佛を誘ふて、所謂る三國同盟を形成し、先づ土に向ふて干渉を試み、土の之を聴かざるを見るや、英國史中に見たるが如く、いよゝゝ同盟軍と土耳其との大戦となり、ナヴァリノの海戦に於て、土耳其は其艦隊を全滅せられ、陸に於ては其後露佛より攻撃せられ、畢に止むなく希臘を獨立の状態に置くことゝなりぬ、時に千八百二十七年の末なりき。希臘は此獨立戦争の爲めに、殆んど人口の半數を失ひぬ、是れ其の虐殺せられしもの多きに由るなり、而かも彼れは其自由を得たり、天下は之を見て且つ賞し、且つ哀れみぬ。

### ○ 更に露土戦争

希臘の獨立も一段落を告げ、英佛も手を引き、露もアレキサンデル一世死し、其ニコラスの時代となりて、一先づ土耳其事件を見捨て居りしが、露土は犬猫國の間柄にて、固より和衷すべくもあらず、互に睨合ふて暮す中、土は露に兵士の謀叛ありたるを利用し、之れに復讐を爲さんと欲し、おさゝゝ軍備を爲し居り、露も猶ほ一大打撃を土に加へんと仕度する折柄、

千八百二十八年、いよ／＼公然たる開戦となりぬ。然るに此役や露に一代の英雄デービッチあり、小勢を以て土の大軍を壓迫しつゝ、遂にバルカン半島に突入せり、而して爾來サルカンスキーの名を得たり。又た亞細亞方面に於ては、曾て波斯のエレザンを陥れて、波斯に大打撃を與へしより、エリヴァンスキーの名を得たる、露の驍將バスケウイチの大勝利に歸したるを以て、土は忽ち累卵の危に逼りたりき。左れば常に土を扶けて露に當り居る英國は、直ちに軍艦をマルモラ海に派せて、露國を脅かし、再び露に當らんとするの氣勢を示せしかば、此時に當りて、佛と結び普ども力を合せて、いよ／＼土都を領せんと期し居たりし露國も、之を見て聊か凹み、普も其間に周旋して、遂にアドリアノーブルの條約となり、露は更に其勢力をバルカン半島に擴張し得たりしも、其本來の目的を達することは能はざりき、時に千八百二十九年(露國史参照)。

### エジプトの謀叛

エジプトの管領モハメット、アリーは、實に一代

の豪物なりき。左れば土耳其を離れて獨立せんと企て居たる折柄、希臘の亂あり、因て暫く土耳其の命を奉じ、希臘を撃て大功を挙げしが、平和回復の後、土耳其はクリット島を與へて其戦功に報ひたりき。然れども元來の目的はクリットの如き一孤島を得るにはあらず、將に小亞細亞を併呑するに在りしかば、千八百三十一年に至るや、エーケルの總督と隙を生じ、直ちに之を征服せんと欲して出兵したり。左れば土耳其政府は大に驚きて、之を鎮壓せんと試みしが、モハメット、アリーの子なるイブラヒムは、是れ亦た當代の武將にして、兵を行ふこと神の如く、忽ちシリアより小亞細亞一帶を席卷し去り、今やコンスタンチノーブルを陥れんとするの氣勢を示しぬ。土耳其政府は更に大驚慌を來せり、而かも今は奈何ともする能はず、折柄露國は此機を失ふべからずと爲し、土に救援を發給せしに、土が喜んで之に應せしかば、こゝに露土の同盟となれり。然るに那翁が征討以來エジプトと關係を繋げる佛國は、是れ一大事なりとて、直ちにエジプトにも勸め、土にも説て休戦せしめ、モハメット、アリ



川にシリアの地のみを與へて、一旦和睦するに至らしめたり。因て露國は當てが外れたるき。然れどもかねて外交に抜目なき彼れば、猶ほも土政府に説き、千八百三十三年に及んで(露國史に述べたり)ウンキアル、スケレシーの秘密條約を結び、一舉して土耳其政府を左右するまでに至りしかば、佛國は固より英國も今更の如くに打驚き、黒海の大權を此兩國に占めらるゝに於ては、軍事上及び貿易上に大障害を受くべしと爲し、直ちに之れに故障を入れ、事稍々紛雜に赴きぬ(外交の事何んぞ紛雜なるや)。

兎角する中エヂプトに於ては、佛國の聲援あるを力となし、再び大活動に出でんとし、佛國も亦た已にヂブラタルとマルタを英に領せられたれば、此際埃及を支配して以て英に當らんと欲し、其將校の如きは、暗に埃及に入りて其軍を援くることとなり、更に英佛との交渉となりたり。於此乎英は俄かに其態度を變じ、土に説て通商條約を結ばしめ、爾來英國の商人は、エヂプト及びシリアに於て、何等の制限をも受くることなく、自由に其商品を輸出入するの權

利を得、以て佛に對したりき。モハメット、アリーは此條約に反對せり、而して千八百三十九年に至るや、再び大舉して土を犯し、爰に有名なるニシブの戦となれり。此役や後日天下に大名を轟かしたる普のモルトケは聘せられて土の參謀部に在り、土將に作戰計畫を告げたりしも、土將の之を用ゐざりし爲め、土は殆んど潰敗し、更にコンスタンチノーブルを危險に瀕せしめたりき。左れば露はかねての條約に従ひ、今や土の爲めに海陸の兵を進めんと爲しけるに、英と佛とは之を見て、更に露に對して聯合し、兩國の艦隊をダーダネルスまで派し、大に露を威嚇し、露をして躊躇するところあらしめぬ。又た埃と普とは其歐洲の平和を亂さるゝを厭ひ、此間居中調停の勞を取り、此にロンドンに於ける五強國の會議となりたり。此會議に於て佛と露とは最も相敵視して争ひぬ、即ち佛は可成エヂプトに利益を與へんと議し、露は可成土に利益あれよと闘り、其結果露の外交の成功となり、佛國が手を引くと同時に、英露埃普が土を扶けて、エヂプトを抑ゆるに決し、直ちに其實行に着手し、海上よりは英埃の海軍

進み、陸上よりは土軍進みて、忽ちシリアよりエジプトのイブラヒムを逐ひ拂ふや、エジプトの首府アレキサンドリアは更に英の海軍の爲めに砲撃せられ、最早や陥落に近づきたれば、流石の豪骨モハメット、アリーも終に平和を申込み、從來奪取したる諸地を土に還し、唯りエジプトを領して満足するに至れり。然るに英は此際大働を爲したることゝて、尙かにモハメット、アリーを壓迫しつゝ、自今英國はスエス地峽通過の自由を得ることを約束せしめ、いよゝ佛を凌で立つに至れり、時に千八百四十一年(英の外交の巧妙なる實に人をして啞然たらしむ)。

### アブドル、メジッド

(自千八百三十九年  
至千八百六十年)

マムード二世はエジプト事件の未だ落着せざる中に死せり。因て其後即ち千八百三十九年より其子アブドル、メジッドの世となりて、エジプト事件も落着

せしが、此時代に見るべきものは、土が其國に立憲政體を施かんとせしと是れなり。英の全權公使ストラップ、オード、カンニングは外交の手腕を振ひ、此際土の宰相と結び、アブドル、メジッドをして憲法を制定せしめ、此憲法によりて、數多進歩的の改革を爲さしめたりき。然れども元來土國民が之を希望したるにあらざれば、事畢に成就せず、且つ忽ち保守黨の反對に會ふて、其實行を見る能はざりき。兎角する中歐洲の各方面に革命起り、匈牙利及び波蘭の革命黨員なるコスート、ベム、デンピスキ等敗れて土國に亡げ來り、埃露より其謀叛人を引き渡さんことを要求せられぬ、而かも此事はカンニングの周旋により、英佛より聲援を得て之を聴かず、爲めに土廷をして名を爲さしめ、次でエルサレムに於ける教會の議論より、爰にクリミアの大戦を惹起せしむる至りたりき。クリミアの戦争に就ては己に前條に之を述べ置けり、故に之を復せず、而かも土耳其は之れに由りて、再び其生命を繋ぎ留めたるなりき。斯くて千八百六十一年に於て、アブドル、メジッド死し、其兄弟アブドル、アジーズ位に即きた

り。

## アブドルアジーズ

(自千八百六十一年  
至千八百七十六年)

アブドルアジーズは十五年間位に在りたり。然れども頑愚にして其國を治むるを知らず、露國史に見たる如く、バルカン半島に於ける基督教徒の謀叛となり、將に大混亂を起さんとするとき、廢せられ次で殺るされ、アブドルメジッドの子ムラッド五世其後を嗣ぎぬ。

## ムラッド五世

## アブドルハミッド二世

(自千八百七十六年  
現今)

ムラッド五世は僅か三ヶ月にして廢せられ、次で其兄弟アブドルハミッド二世

位に即き、而して直ちに起りたるは、更に露土の大戦なりき。而かも吾人は已に之を露國史に見たれば、こゝには言はず、而して其結果露は英の爲めに干渉せられて再び大望を達する能はざりしも、土のみに就て之を云はゞ、土は此戦争の爲めに、いよゝゝバルカン半島の諸邦を割かれたるなりき、即ち歐羅巴土耳其の運命に終焉を告げしめられたるなりき。

左れば顧みて此時代に於ける歴史を見るに、土國は僅々百餘年間に、其地の四分の三と、之れに準ずる人口とを失ひたるなり、而して今日其國の命脈を維持しつゝあるゆえんのは、全く歐洲諸列強間なる『勢力平均』のお蔭に由ると噂させらるゝに至れり、亦た哀れなりと謂はざるべけんや。

## 西班牙

- フキリッブ五世の政治
- フェルデナンド六世時代
- チャールズ四世の失政
- フェルデナンド七世時代
- 自由黨と保守黨との軋轢
- 外戦の成功
- 伊太利遠征軍を起す
- ドンカロロ佛と同盟す
- 那翁時代
- 亞米利加領土との關係
- 政治界の大混雜
- 西班牙に就ての短評

歐洲近世史に於ては、フキリッブ五世にまで及べり。然るにフキリッブは千七百一年に王となり、相續戰爭の結果、ルキ十四世の大敗となり、次で千七百十一年種々の條件の下に更に改めて王となり、其後千七百四十六年まで、西班牙國を治め居たりき。斯くて此間又々種々の混雜を惹起しぬ。内に在て云ふときには、此際伊太利の『ゼスイト』僧にアルベロニーなるものあり、バルマ

の公妃を此のフキリッブに嫁する爲めに周旋せしところより、遂に擧げられて西班牙の宰相となり、烈しく内外より非難を受けしも、兎も角も此間殖産貿易并に美術と學事とに大進歩を來さしめぬ。外に在て云ふときには、此のアルベロニーと女王等は、遂に謀叛心を起して、ユートレヒトの條約の存するにも關はず、佛の王位を左右せんことを企て、次で英國とも隙を生じ、其結果、相續戰爭當時の如く、諸列強より抗議せられてアルベロニーの退引となれり。其れより更に女王の企畫として、伊太利征服の軍を起し、埃と争ふてシ、リーとネーブルスを合せ、米國に於ては、更に英と衝突して、此間種々の外交を経過せしが、此等は皆英佛若くは日耳曼史に記入し置きたるを以て、之を復せず。千七百四十六年に於て、フキリッブ五世死し、其子フェルデナンド六世其後を嗣げり。然るに此のフェルデナンドは從來の政策を一變し、勉めて外戦を避け、一意以て内政に心を留めしかば、此際大に富榮を來し、多年の疲弊を癒し得たりき。即ち此間例の七年戰爭等ありて佛よりはミノルカ島を與ふべし

と誘ひ、英よりはチブラルタルを譲るべきを以てせしも應せず、超然として内養のみを心掛けぬ。

千七百五十九年フェルデナンド六世死し、其兄弟ドン、カロロネーブルスの王より轉じて其後を嗣ぎ、チャールレス二世となりたり。然るに此チャールレス三世は、其兄弟の超然主義を擲ち、終に佛に同盟するに至りしより、いよく英國との戦争となり、得るところ少く、失ふところ多かりき、而かも亦た能く兄弟の志を嗣ぎ、此際農工商を奨励し、僧侶の横暴を制して、國民の稱賛を得たりき。

千七百八十八年チャールレス三世の死するや、其子チャールレス四世其後を嗣ぎしが、當時佛國革命の大亂に接したることゝて、實に大驚慌に會ひぬ。チャールレス四世は其父若くは其伯父の伶俐なりしに似ず、極めて頑愚なる君なりき。左れば佛國人民が其王ルイ十六世を殺したりと聞かば、己が力と天下の形勢をも計らず、直に佛を一撃し去り得る積りにて、之に宣戰を布告せしが、其結果

己のが大敗と成り了しぬ。加之佛國史中に見たる如く、其後那翁の世となるや、那翁は當時西班牙の宰相たりしゴドイに利を啗はせて、先づ葡萄牙を征し、次で西班牙をも畧奪し去り、此チャールレス六世を廢し、己のが兄弟ジョセフをして西班牙王位に即かしめぬ、時に千八百〇八年なり。

左らば之を見たる西班牙人民は、大に憤慨せり、而して那翁は此際ジョセフをして憲法を發布せしめ、此憲法によりて、善良にして且つ自由なる政治を西班牙に施くべしと約束せしも、最早や國民は之を聽くべくもあらず、直ちに假政府を打建て、此際チャールレス六世の子なるフェルデナンド七世を假王に置き、斷然佛に抗することゝ決定せり、而して此時より那翁の没落までは、英國史に述べたる如く、全くウエルリントンの勢力の下に保護せられつゝありしなり。

千八百十二年に於て假政府は新に憲法を制定し、僧權を抑へ、市民權を擴張し、總て自由の方針に依りて、國家を經營するの道に出でたり。斯くて佛國に捕へ

られ居たるフェルデナンド七世も此際歸り來りたるを以て、大に之を歓迎し、  
 西班牙萬歳を唱へたりき。然れども此フェルデナンド七世は其後人民の聲に従  
 はず、専ら王權を維持することに勉めしかば、爾來王と議會との衝突は絶へざ  
 りき。

千八百十五年ウヰンナの大會に由りて定りたる西班牙の分配は、已に之を前條  
 に述べ置きしが、其後千八百十九年に至りて、米のフロリダを合衆國に賣り、  
 次で翌年メキシコ及び南米殖民地の獨立に會ふや南米殖民地の獨立と其  
 國々の状態とは下卷に譲る兵士の謀叛より直ちに自由黨の革命運動となりぬ。  
 此運動によりて革命黨は兵士と共に大勝利を得、一時西班牙の主となれり。然  
 れども佛が十萬の師を送りてフェルデナンドを扶けたりしを以て敗滅し、革命  
 黨の重立は處刑せられ去り、再び西班牙をして僧侶と王との權下に服さしめた  
 りき。

千八百三十三年に於て、フェルデナンド七世死せり。然るに其死するとき、其

女イサベラに位を譲り、其女の母たるマリア、クリスチナに後見を命じ置き  
 たりしに、之れより先き後繼者たるべしと定り居たるフェルデナンドの弟のド  
 ン、カロロは、之に不承知を唱へて大に争ひ、こゝに二派の戦亂を惹起し、カ  
 ロロは保守黨を率ひ、マリア、クリスチナは自由黨を率ひて戦ひしが、千八百四  
 十年に到り、いよいよクリスチナの勝利に歸し、之れが爲めにクリスチナは自  
 由的憲法を其援助者に與ふるに至れり。

クリスチナは自由の憲法を與ふるに至れり、然れども一時自由黨を己のが味方  
 に入るゝの政策に過ぎざりければ、其敵のいよいよ消滅するを見るや、更に壓  
 制に出でんごせしに、自由黨は大に怒りて畢に此の女を佛國に逐ひ、將軍エス  
 パロテロをして後見たらしめ、暫時自由制度を持続し居たりしに、間もなく  
 クリスチナ黨が佛の援助を得て、大勢力を復し來るに會ひ、エスパロテロは退  
 けられ、西班牙は保守黨の手に落ち、クリスチナは還り來り、ナルヴァエス  
 は後見となり、イサベラは佛王ルイ・フィリップの周旋によりてアシスのフラン

シスに配し、其妹はル井、フ井リップの子に嫁したり、而して是れ佛と西とを繋ぐものにして、ユートレヒトの條約に反すこと、列強殊に英國の大抗議に出會ひたる有名なる事件なりき。

千八百四十八年、ル井、フ井リップの佛位より逐はるゝや、西班牙は其援助者を失ひ、次で千八百五十四年に至るや、更に内亂を惹起せり。此内亂は將軍オドンドン子ルが其兵士を率て起せしものにて、主張するところは、確乎たる立憲政體を起し、マリア、クリスチナを國外に逐ふべしと云ふに在りしが、女王がエスバロテロを英國より迎へて之れに政治を托し、更にクリスチナを佛國に逐ひしによりて、一時鎮定に歸するに至れり。

然れども其後又々エスバロテロを逐ひ、更にナルツアエスの世となるや、民黨と王黨との間に、陰謀又陰謀、軋轢又軋轢、内閣は頻りに交迭し、名士の流竄に會ふもの續々絶へず、内政の事また言ふに忍びざるもの多かりしが、千八百六十八年に至るや、將軍ブリム及び將軍セルラノが亡命地より歸り來りて、

いよゝ大運動を始め、國民に普通選舉を與へんと叫びしより、國民は遂に之れに和し、イサベラは逐はれて佛に退き、假政府は打建てられ、而してセルラノは其主權者となりぬ。

然則西班牙は此際に於て共和國となりしか、曰く否、西班牙國は立憲政體だも善用することを知らざるものなり。彼等は中興の祖なるフェルデナンド及びイサベラ時代より、王權の赫々たるものを見せられたりき、而して天主教特に「ゼスト」宗の勢力に感化せられ居るものなりき。されば懸々として常に王政を廢する能はず、一部の人士は立憲政はおろか、共和政體を主張しつゝありしも、國民全體は動かざりしなり。加之彼等人士の間に於ても、其節操や強固ならず、政黨としては温和黨あり、進歩黨あり、共和黨あり、急激黨ありき、然れども多くは皆一身の利益を望むより出でしものたりしを以て、富貴と權勢とを得んが爲めには、急激黨より温和黨若くは保守黨に傾き、民黨より王黨に移るものも多かりき、こゝを以て更に國民に信用を得ず、國民をして舊時に於ける王權

の全盛時代より、其敬慕心を取り去ること能はざりし、因て今や形體に於ては共和政治たりしも、依然立憲的の王政を起す希望なりき。然則其王たるべきものを何の邊にか求むべき、是れ實に當時に於ける一大問題なりき。於此乎、佛國史中に見たる如く、日耳曼國なるホーエン、ゾレルン家のリオポルトを招かんせしに、佛帝三世那翁の抗議に會ふて能はず、又た此際ドン、カロロの孫たるもの、兵を擧げて王位を要求せしとありしも、功を奏せず。斯くて伊のヴィクトル、エンマヌエルの子を王位に迎へたりしに、其來るや、之を推擧したる將軍ブリムが暗殺に會ひしを以て、久しく其位に在らず、因て止むなく其元に戻り、遂に女王イサベラの子なるアルフォンソ十二世を王位に即くることとなりぬ、時に千八百七十四年なり。前條は専ら内國の事に屬す、然らば此際海外に於ては如何、曰く、千八百五十九年に亞非利加なるモロッコを征し、之をして平和條約を申込ましめ、南米に在るサン、ドミンゴ島を復し、ペリユーとチリーとを討て功を奏せざりし

も 左る代りに佛と與に交趾支那を征して成功し、國脈は已に絶んとしつゝ、ありしも、猶ほ蠢動より龍飛に移らんとて悶き居たりき。然れども西班牙は最早や語るに足らず、英主上に出でずして、私黨下に軋り、國家に理想なくして、前途の標目を喪ひ、一時の盛時に驕奢を極めて、後日の大計を誤りたる結果、また奈何ともすること能はざるに至れり、國家を經營するものは、深く西班牙に鑑みるところあらざるべからず。





## 葡萄牙

○佛國革命前後の形勢  
○進歩派と保守派との軋轢  
○政黨の腐敗

○ジョン王の時代  
○ドン・ミーゲルとドン・ペドロとの戦争  
○葡萄牙死す

近世史に於ては、千七百七十七年マリアが即位の時に迄及びしが、此マリアは女子に普通なる特性を現はし、迷信に支配せられて、『ゼスイト』僧を信用し、諂諛の嬖臣を近づけて、國民を壓し、益々國脈を弱め、千七百九十九年に至りて、政治を當時南米のブラジルに太守たりし其子のジョンに委ねしが、此時より佛國革命の大騒動中に入れり。佛國革命の大騒動より、次で那翁の將ジュノーの襲來となり、英國の豪雄ウェルリントンの援助となりしが、此際ジョンはブラジルに居て歸らず(ブラジルの

歴史は下卷に譲る)、因て英のペレスフォード卿權りに政を執て、此國を治め居りしに、千八百十六年女王マリアが死すると同時に、右のジョンなるものは、いよ／＼葡萄牙王と定められたり。

然るに此ジョンや、多年ブラジルに居たることゝて、葡萄牙に歸るを肯んせず、寧ろブラジルに永住せんと欲する様子なりければ、國民は何時までも英人に支配せらるゝを喜ばず、千八百二十年一大騒擾を醸して、ペレスフォードを退け、こゝに全國の代議士を召集し、新に國家の經營策を議せんと企てぬ。於此乎ジョンは千八百二十一年其長子のドン・ペドロをしてブラジルを治めしめ、自己は急ぎ葡萄牙に歸り來れり。

然るにジョンの歸り來りたるときには、議會は已に自由的憲法を制定し居たれば、ジョンは謹んで之を承諾したるも、其子のドン・ミーゲルは保守黨に擁せられて之れに反し、屢々父と確執を生じ、次で千八百二十六年ジョンの死するや、こゝに相續問題に就て内亂を起したりき。進歩派はジョンの女のイサベ

ラ、マリアを執權者となし、ドン、ペドロを名義上の王と爲さんと志し、保守派はドン、ミーゲルを王と爲さんと欲し、已に戦闘に及びしかば、ドン、ペドロは此に一計を案じ、己が女ドンナマリアの未だ七歳なるを王と爲し、ドン、ミーゲルを執權者と爲す旨公布せり。左ればドン、ミーゲルは一時之を承諾せしが、其勢力を握るや否や、千八百二十八年ドンナマリアを廢し、自ら代りて王となりたり。左ればドン、ペドロは之を聞て最早や棄て置き難き事となし、自ら行て其弟を征せんと欲せしとき、偶々ブラジルに於ても一騒動を生じ、ペドロも自由黨の爲めに見棄てらるゝに至りければ、位を其子に譲り、其妻并に其女のドンナマリアを伴ひつゝ、葡萄牙に來らんとせしが、其上陸の困難なるを察し、一時テルセイラの島に據りしに、之を聞きたる自由黨は、續々本國より此島に詰め寄せ、こゝを自由黨即ちマリア黨の根據地と爲して、いよゝゝ本國と争ふに至れり。此時に當りて英佛西の三國は、密かにドン、ペドロに加勢せり、而して此兄弟喧嘩たるや、終始を通じて二ヶ年に及びしが、千八百三十年ブレイス灣の海戦に

於て、自由軍先づ勝利を得、尋でオーボルトーに上陸して、其地の堡臺を攻めしとき、有名なる司令長官チャールレス、ナビエルに率ひられたる英國艦隊の援助を得て、更にこゝに大勝を得、次で千八百三十四年、いよゝゝドン、ミーゲルを降し、遂にマリアの王位を確立せり。

恁てドンナマリアの王位に即て、ドン、ペドロの執權となるや、其後己れを援けたる自由黨の爲めに盡せしかば、國內に自由の制度を見るに至れり。然れども此間保守黨もあれば、共和黨もありて、常に紛擾を醸し、國家を如何に導き行かんかとの觀念よりも、寧ろ己のが利達を圖りて進退するもの多きより、益々國家の命脈を縮め、爾來十八年間の歴史は、此等政黨の争奪若くは軋轢にあらざるはなし、斯くて千八百五十三年マリアの死するや、其子ペドロ五世の代となり、千八百六十一年ペドロ五世の死するや、更に其兄弟ルネ一世の時代となり、此時代には政黨も好い加減に疲憊し去り、内閣の交迭も以前の如く頻繁ならず、共和黨及び社會黨の如きも一分子として存在せしも、何れも立憲黨の

勢力には及ばず、斯くて此時代も過ぎて、千八百八十九年にル井の子のカロロ一世となりしが、葡萄牙は極めて静かなる國となれり、左る代りに最早や生命なきものとなれり。



### 白耳義

○白耳義和蘭を離れて獨立す  
○英佛との交渉

○獨立戰を起したる理由  
○白耳義立憲國となる

○白耳義はチザランドの一部なり。此國たる、古來より諸列強の争地となり、絶へず紛擾を極めたりき、而して其歴史は已に歐洲近世史に詳かなり。左れば十九世に至りて之を見るに、那翁の没落後、ウ井ンナの條約によりて、更に和蘭に合併せらるゝものとなりしが、其後千八百三十年に至るや、南部チザランドなる此地方は、又々獨立の旗を翻へし、こゝに和蘭を離れて一政府を起さんと議し、遂に戰備に及びたり。  
白耳義人の不平とせしところは、當時此地より議會に出ず代議士の少數なるが

爲めに、常に和蘭人に壓せられ、財政の如きは終始和蘭人の爲めに計られ、官吏は多く和蘭人に占められ、公語の如きは和蘭語に限られ、不便極めて大なりと云ふにでありき、而して是れ夙に天下の同情を惹きついありしものなりし。加之白耳義人の一部は「セルチック」人種に屬し、宗教の如きは天主教にして、和蘭の新教と相容れざりしに、和蘭政府は天主教特に「ゼスイト」的の僧侶が、今猶ほ白耳義教育界を左右するを見て、大に之を改革せんと企圖せしかば、僧侶は之を見て、俄かに獨立派と合し、終に謀叛に出でたるなり。

左らば千八百三十年、佛國に革命ありしを機會と爲し、此白耳義の革命黨も旗を擧げぬ。和蘭兵は忽ち白耳義の都ブラッセルに入り込みたり。ブラッセルの叛徒は市寨を興して戰へり、而して遂に和蘭兵を逐ひ卷れり。然れども和蘭は猶ほも大兵を繰り出さんとし、事いよゝゝ重大となり、佛は白耳義を扶け、英は和蘭を助けんとする傾向ありしに、佛王ル井、フ井リッブは時に八十歳の高齡に垂んとする老雄タレイランを起して英に使ひせしめ、英のウエルリントン及

びウイリアム四世王に交渉せしめ、若も英佛にして此獨立戰爭に關涉するに至らば、更に歐洲の大戰爭となるべきを以てし、此際佛も無干渉主義を取るべきにより、英も亦た無干渉主義に出でんことを説き、兩國の間に黙諾を結びぬ。然るに其後白耳義の革命黨は其國を立憲的王国と定め、其の王にル井、フ井リッブの子を戴かんことを交渉せしも、ル井、フ井リッブは英國の感情を害せんことを慮りて之を諾せざりしかば、白耳義は遂にサクスコブルグのリオポルドを推して、其國王たらしむるに至れり。

和蘭は靜かに事の成行を見居たりき。然るに佛の外交が著々其功を奏し、白耳義と和蘭との境界すら佛國の手を通じて定められ、極めて和蘭に利益たらんとするを見るや、最早や忍ぶべからずと爲し、一萬五千の兵を繰り出し、直ちにアント、ウエルブ堡臺を占領し、進んで白耳義の謀叛黨を一掃に揉み潰さんと意氣卷きたり、而して勿論成功したるに相違なかりし。然るにかねて相談し居たる英佛は此戰亂を制限せんが爲めに、海陸より之れに干涉し、和蘭軍を逐ひ